

成田新線建設事業地内
埋蔵文化財発掘調査報告書

II

(関戸遺跡)

昭和58年3月

日本鉄道建設公団
千葉県文化財センター

成田新線建設事業地内
埋蔵文化財発掘調査報告書

II

(関戸遺跡)

昭和58年3月

日本鉄道建設公団
財團法人千葉県文化財センター

序

千葉県は首都圏にあって、東京湾時代の一翼を担うとされ、21世紀に向けて、全国でも最も発展の可能性を秘めた地域といわれております。

成田新線は、新東京国際空港の開港に伴う交通網整備の一環として、空港と都心間のアクセス、及び北総地域の通勤通学輸送の確保を図るための鉄道として国から、提示されたものであります。

この成田市地域は、標高30から40mを測る台地が樹枝状に発達し、その台地上には古代からの遺跡が数多く残されております。

今回、成田新線の建設にあたり、工事区域内に遺跡の所在が明らかになりその取扱いについて関係機関と協議の結果記録保存のための発掘調査を当センターが実施することになりました。

約6か月に及ぶ発掘調査では、弥生時代中期から平安時代までに至る70数軒の住居跡などが発見され、特に、北総地域としては、様相の異なる弥生時代の土器群が出土し貴重な資料を提供することができました。

これらの資料は、今後学術資料として、また、教育資料あるいは郷土の歴史に関する理解を深める資料として広く活用されることを希望します。

最後に、終始、調査の円滑な遂行に協力された、日本鉄道建設公団、また、調査に指導と助言をおしまなかった千葉県教育文化課、成田市教育委員会には厚く御礼申し上げるとともに、寒風吹きすさぶ遺跡で調査員に協力し、発掘調査に従事された、地元のみなさまに感謝申上げます。

昭和58年2月

財團法人 千葉県文化財センター

理事長 今井 正

例　　言

1. 本書は、千葉県成田市関戸における、成田新線建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。関戸遺跡のコード番号は211-003とした。
2. 調査は、発掘を昭和55年10月1日より昭和56年3月31日まで、整理を同9月1日より昭和57年9月30日までとし、千葉県教育委員会の指導の下に、日本鉄道建設公団との委託契約に基づき、財団法人千葉県文化財センターが実施したものである。
3. 財団法人千葉県文化財センターでは、この事業を調査部長白石竹雄、同部長補佐栗本佳弘（昭和56年3月31日まで）、班長堀部昭夫（昭和56年3月31日まで）・斎木　勝（昭和56年4月1日から）の組織の下に、調査研究員谷　旬・小林清隆・鈴木文雄が当たった。
4. 作業の分担は、現場運営・図面作成・原稿執筆を谷が、発掘記録・遺構カードの作成等を小林が、遺物実測を鈴木が主として行った。
5. 本書で使用した地形図は以下のとおりである。

第1図 5万分の1図 (N I - 54-19-10) 国土地理院発行 昭和53年6月

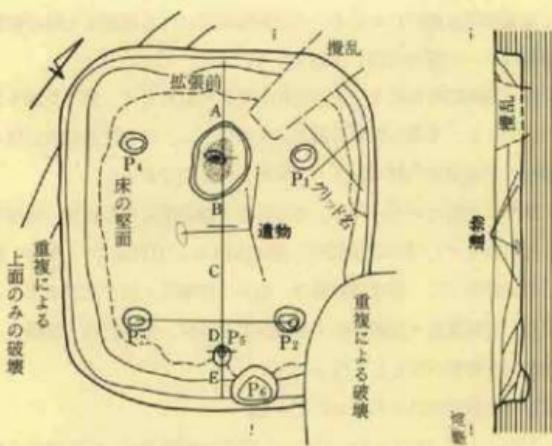
第2図 2,500分の1図 成田市都市計画図 No.33

6. 発掘調査の実施および報告書刊行までに下記の諸機関・諸氏の御指導・御協力を賜わりました。記して謝意を表します。

日本鉄道建設公団・千葉県教育庁文化課・成田市教育委員会・成田市川栗・吉倉・大清水、赤荻・関戸・芦田地区、八日市場市吉田・木積・多古町並木、光町篠本地区、および成田在住の内勤の皆様。

大塚初重・大野政治・小川和博・柿沼修平・関俊彦・田村言行・寺内　静・平岡和夫・藤下昌信・山岸良二・リチャード・ピアソンの諸先学（順不同）

凡例図



- ・当該遺構より古い遺構は図化しない。
- ・炉の位置についての指数は $A + B / A$
- ・ P_5 の位置についての指数は $D + E / D$
- ・主柱穴は炉の右側から数えることとし、炉が中央にある場合や炉のない場合は北東隅から数える。

目 次

序

例 言

目 次

1節 立地と調査経過	1
1項 立 地	1
2項 調査経過	1
2節 遺 構	3
1項 住居跡	3
2項 古墳跡	63
3頁 土 壁	70
3節 遺 物	72
1項 住居跡	72
2項 古墳跡	113
3項 そ の 他	114
4節 ま と め	119
1項 弥生時代	119
2項 古墳時代	123
3項 歴史時代	124

挿 図 目 次

第1図 道路地形図	1	第42図 206、207、208号跡実測図	68
第2図 道路周辺図	2	第43図 207、208、209号跡実測図	69
第3図 001、002号跡実測図	4	第44図 101、105号跡実測図	71
第4図 003、005、006号跡実測図	6	第45図 001号跡出土遺物実測図	73
第5図 007、008号跡実測図	8	第46図 003号跡出土遺物実測図	74
第6図 009号跡実測図	10	第47図 002～006号跡出土遺物実測図	75
第7図 010、011号跡実測図	12	第48図 007、008号跡出土遺物実測図	77
第8図 012、013号跡実測図	14	第49図 009号跡出土遺物実測図	78
第9図 014、015号跡実測図	16	第50図 010号跡出土遺物実測図	80
第10図 016、017号跡実測図	17	第51図 011～013号跡出土遺物実測図	81
第11図 018号跡実測図	19	第52図 014号跡出土遺物実測図	83
第12図 019、020号跡実測図	21	第53図 015～017号跡出土遺物実測図	84
第13図 021、022、023、024号跡実測図	23	第54図 018号跡出土遺物実測図	85
第14図 025A、B号跡実測図	24	第55図 018～022号跡出土遺物実測図	87
第15図 026、027号跡実測図	26	第56図 024号跡出土遺物実測図	88
第16図 028、029号跡実測図	28	第57図 025～029号跡出土遺物実測図	91
第17図 030、031号跡実測図	29	第58図 031～035号跡出土遺物実測図	92
第18図 032、033号跡実測図	31	第59図 036～039号跡出土遺物実測図	93
第19図 034、036、037号跡実測図	33	第60図 040～043号跡出土遺物実測図	96
第20図 035、039号跡実測図	35	第61図 044号跡出土遺物実測図	98
第21図 040、041号跡実測図	36	第62図 044号跡出土遺物実測図	99
第22図 042、043号跡実測図	38	第63図 045～047号跡出土遺物実測図	101
第23図 044号跡実測図	39	第64図 048～054号跡出土遺物実測図	103
第24図 045号跡実測図	40	第65図 057号跡出土遺物実測図	104
第25図 046、047号跡実測図	41	第66図 058号跡出土遺物実測図	105
第26図 048～052号跡実測図	43	第67図 059～061号跡出土遺物実測図	107
第27図 053～056号跡実測図	45	第68図 061号跡出土遺物実測図	109
第28図 057号跡実測図	48	第69図 062～069号跡出土遺物実測図	111
第29図 058、059号跡実測図	50	第70図 069～070号跡出土遺物実測図	112
第30図 060号跡実測図	51	第71図 201、208、209号跡出土遺物実測図	
第31図 061号跡実測図	53		114
第32図 062、063号跡実測図	54	第72図 グリッド内出土土器実測図(縄文時代)	115
第33図 064、065、067号跡実測図	56	第73図 グリッド内出土土器実測図(弥生時代)	116
第34図 069、070号跡実測図	57	第74図 グリッド内出土土器、陶器実測図 (土師器、陶器)	117
第35図 炉集成図(1)	59		
第36図 炉集成図(2)	60	第75図 グリッド内出土土・石製品実測図 (1、2、5 = 1/2 3、4 = 1/4 6、7 = 1/4)	117
第37図 炉集成図(3)	61		
第38図 カマド集成図	62		
第39図 201号跡実測図	64	付図 1 道路地形図	
第40図 202号跡実測図	65	付図 2 道構配置図	
第41図 204、205号跡実測図	66		

図版目次

- 図版1 道跡遠景(南より), 同(北より)
図版2 道跡近景(東より), 調査風景
図版3 道跡空撮(北東より), 同(南西より)
図版4 道跡空撮(東より)
図版5 調査状況, 同
図版6 001号跡全景, 002号跡全景
図版7 003号跡全景, 001号跡06出土状況,
 002号跡炉, 003号跡01出土状況
図版8 004号跡全景, 005号跡全景, 006号跡全景
図版9 007号跡全景, 同道跡出土状況, 同炉
図版10 008号跡全景, 同01出土状況, 同炉
図版11 009号跡全景, 同遺物出土状況,
 同01出土状況, 同炉
図版12 010号跡全景, 011・013号跡全景
図版13 012・013号跡全景, 014A・B号跡全景
図版14 015号跡全景, 016号跡全景
図版15 017号跡全景, 015～017号跡重複状況
 015号跡炉, 017号跡朽
図版16 018号跡全景, 同床下状況
図版17 018号跡遺物出土状況, 同01・02出土状況
 同01出土状況, 同02出土状況
 同03・07出土状況, 同土玉出土状況
図版18 019・022号跡全景, 021号跡全景
図版19 024号跡全景, 同床下状況
 同遺物出土状況, 同カマド掘方状況
図版20 025A号跡全景, 同炉・01出土状況
 同02出土状況, 025B号跡全景
図版21 026・027号跡全景, 028号跡全景
図版22 029号跡全景, 030・031号跡全景
図版23 034・036・037号跡全景, 034号跡01
 036号跡炉, 037号跡朽
図版24 035号跡全景, 039号跡全景
図版25 040号跡全景, 041号跡全景
 同01・02出土状況, 同炉
図版26 042号跡全景, 043号跡全景
図版27 044・045号跡全景, 044号跡遺物出土状況,
 同炉, 045号跡03出土状況
図版28 046号跡全景, 047号跡全景
図版29 048号跡全景, 051号跡全景
図版30 054号跡全景, 057号跡全景
図版31 058号跡全景, 同05・07出土状況,
 同02～05・07・012出土状況, 同炉
図版32 059B・C号跡全景, 060号跡全景
図版33 061号跡全景, 同カマド状況
 同断面状況, 同掘方状況
図版34 061号跡カマド右脇遺物出土状況
 同カマド左脇遺物出土状況
 同土製勾玉出土状況, 062・063号跡全景
図版35 067号跡全景, 069号跡全景, 070号跡全景
図版36 101号跡全景, 同断面状況,
 105号跡全景, 同断面状況
図版37 201号跡墳丘状況, 同全景
図版38 201号跡墳丘断面状況(南北), 同(西)
図版39 202号跡椚出状況, 同全景
図版40 203～206号跡椚出状況, 203・204号跡全景
図版41 205号跡全景, 206号跡全景
図版42 207・208号跡椚出状況, 207号跡全景
図版43 209号跡全景, 208号跡遺物出土状況, 同
 209号跡遺物出土状況
図版44 001・003号跡出土土器
図版45 007・009号跡出土土器
図版46 008・010・014・016号跡出土土器
図版47 018号跡出土土器
図版48 024号跡出土土器
図版49 091・025・026・035・045号跡出土土器
図版50 044号跡出土土器
図版51 040・041・048・054・060・065号跡出土土
 器
図版52 058・062・064・069号跡出土土器
図版53 061号跡出土土器(1)
図版54 061号跡出土土器(2)
図版55 古墳跡およびグリッド内出土土器
図版56 遺跡出土土製品
図版57 遺跡出土石器

1節 立地と調査経過

1項 立 地

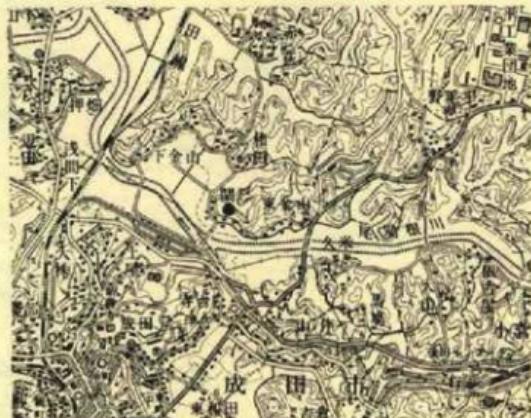
本遺跡は成田市中央を北流する根本名川と、その支流である取香川の合流点を南に見下す台地上にある。取香川の北岸には樹枝状の小台地が並び、その西端の突出した独立丘を思わせる台地上が本遺跡である。周辺の遺跡については本書1に詳しいが、同書第1図の3が、本遺跡にあたり、先行して行われた分布調査ではNo.24と呼ばれたものである。成田市域のうちでも弥生時代の遺跡は極めて少なく、大集落の存在も未だ明らかでない。

2項 調査の経過

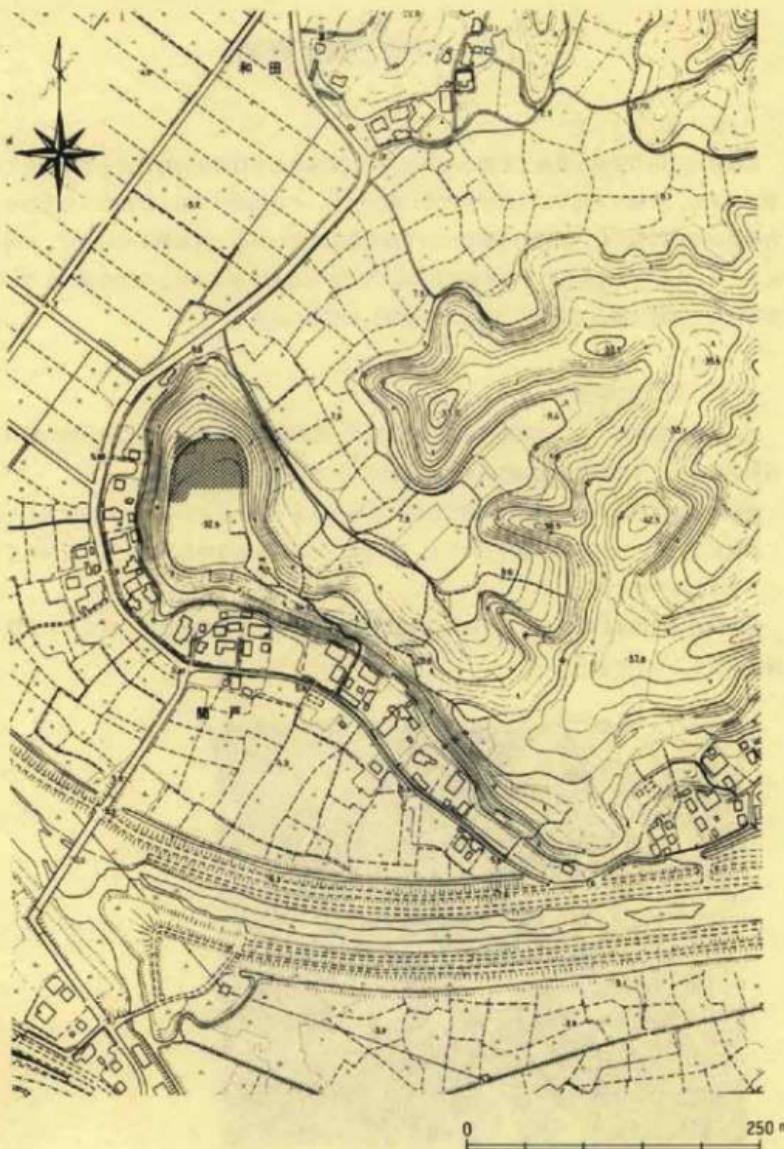
調査に至る経緯については前掲書に述べてあるが、昭和54年度に予定された本遺跡の調査も、昭和55年9月までに用地問題の解決を見、同10月より本格的に開始された。

調査区は鉄道敷設予定の中央線（磁北に対してN-11.5°-E）を中心に 20×20 mの大グリッドを設定し、A……Mまでの番号を付けた。各大グリッドは 5×5 mに区画し、1…16までの小グリッドに分けた。

発掘調査は11月4日より、トレンチによる確認調査を始め、同月中旬までにかなりの遺構の存在を知ることができた。



第1図 遺跡地形図



第2図 遺跡周辺図

本調査は重機等による表土除去から始め、11月中には遺構の検出をほぼ終了した。遺構の精査は古墳跡から行うこととし、12月4日には201号跡に着手した。古墳跡は9基にのぼり、これによって多数の住居跡が破壊されていることがわかった。

昭和56年1月7日よりは、住居跡の本格的な精査を開始した。調査は覆土観察用の土堤を残し、分層的に掘り下げ、層位ごとに遺物の取り上げを行った。重複の著しい部分では縦横に小トレンチを設け、新旧を確認しながら調査を進めたが、018号跡のようにかなりの時間を要すことも多かった。3月23日までには最後の070号跡の一部を残し、空堀のための清掃に取りかかり、合せて先土器時代の確認用グリッド（ 2×4 m）も10か所掘り進め、同月31日までにはすべての作業を終了した。

2節 遺構

1項 住居跡

・001号跡（第3図）

調査区東南隅、J04 Gr.を中心位置する。002号跡の北壁とは、わずか10cmの間隔を有すのみで、東南隅の床面下には065号跡がある。なお北東半部は208号跡（古墳）により破壊されている。

覆土は35~40cmの厚さで、1層暗褐色土と黒色土。2層黒色土でローム粒若干。2層ローム粒比較的多い。3層暗褐色土でローム粒多く、焼土粒若干。4層ローム粒の流れ込み。1、2層は軟弱な土層で、全体に自然堆積といえよう。

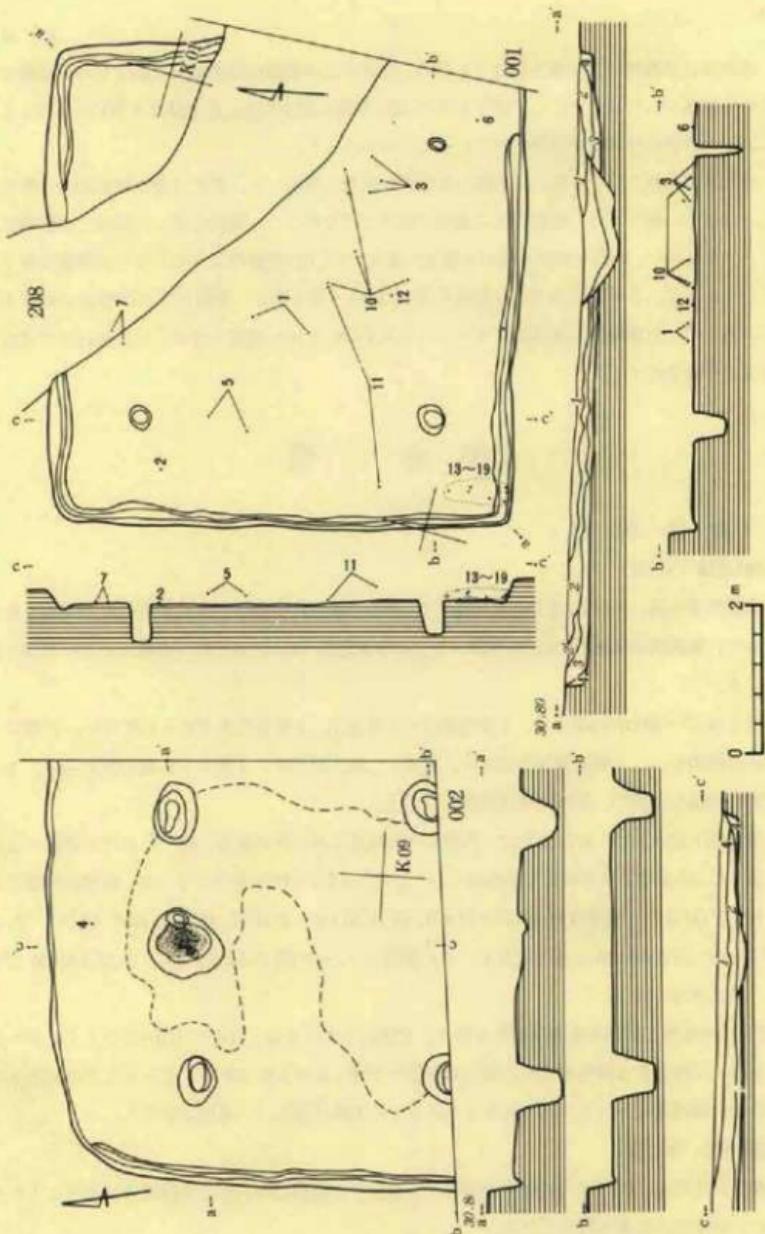
遺構は1辺650cmの正方形で、西壁の方向はほぼN-Sである。壁下には浅い壁溝がほぼ周囲する。床面はかなり軟弱で凹凸著しい。主柱穴はP₂~P₄が検出できたが、再度の精査にも拘らずP₁はない。規模はP₃が16×24cm、深さ65cm、P₂が径40cm、深さ40cm、P₄は径30cm、深さ50cmとまちまちで、その配置はP₂~P₃間375cm、P₃~P₄間400cmである。炉は見当らない。

遺物は208号跡と重複する北東部分を除き、全体的に散在する。なかでも10・11のように2~3mも離れて接合する資料があり、層位も中層~下層とまちまちである。2・6など単独出土のものは、南西隅に一括してみられた土玉とともに本跡に最も近い遺物であろう。

・002号跡（第3図）

調査区東南端、J08 Gr.を中心位置する。重複する遺構はないが、東壁部分は削平により失われ、南壁部は調査区域外となる。

覆土は35cm程の遺存で、大きく3層に分けられるがいずれも黒色土で、1層から3層の順



第3図 001・002号跡実測図

にローム粒が多くなり、4層はローム粒の流れ込みである。

遺構は 720×660 cm の隅丸方形の平面と推定でき、長軸はN—8°—Eを示す。壁は垂直に近く掘込まれ、西壁下には「V」字形断面の比較的深い壁溝がみられる。床面は4柱間内が固く踏み締められ、凹凸は少ないが、全体に東に傾斜する。主柱穴はP₁が 80×60 cm、深さ50 cm、P₄が 70×50 cm、深さ60 cm の短軸方向への梢円形で、他もP₁と同規模と考える。主柱穴間の距離はP₃—P₄が340 cm の他360 cm とほぼ正方形に配置される。

炉(第35図)は主柱穴の中間(指標0.5)に位置し、 110×85 cm の梢円形を呈す。火床は炉底のみにみられ、加熱の影響は最高6 cm にまで及ぶ。火床の周辺の三方には浅い窪みがある。

遺物は比較的少なく、完形品に近いものはない。

• 003号跡 (第4図)

本跡はその殆どを東側斜面で削りとられている。覆土は赤味の暗褐色土である。

遺構は、わずかに胴の張る隅丸方形を呈し、西壁で約450 cm を測り、N—20°—Eを示す。壁は高さ10 cm 程しかないが、検出部分全体に幅15~20 cm、深さ5 cm 程の壁溝が囲繞する。床面は主柱穴(P03)部分に硬質面がみられる他は、小さな凹凸が著しい。主柱穴は深さ54 cm で、この他に西壁中央直下に同規模のP₃がみられる。

また北西隅には径45 cm、深さ60 cm のビットがあり、中には正立位の大形壺(1)がありさらにその中に倒置状態で2が出土した。本跡に伴うか否か不明である。

なお床面全体に炭化材、焼土が散布し、被災跡である可能性が強い。

• 004号跡

F07 Gr. 内に位置する。遺構は南半分削平され不明だが、1辺370 cm の隅丸方形であろう。床面は凹凸著しいが堅さはある。他に何らの施設もなく、住居跡とは思われない。

• 005号跡 (第4図)

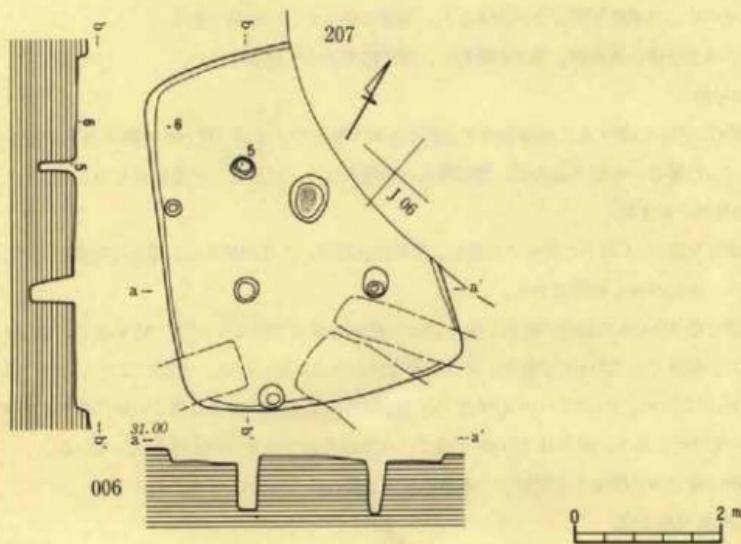
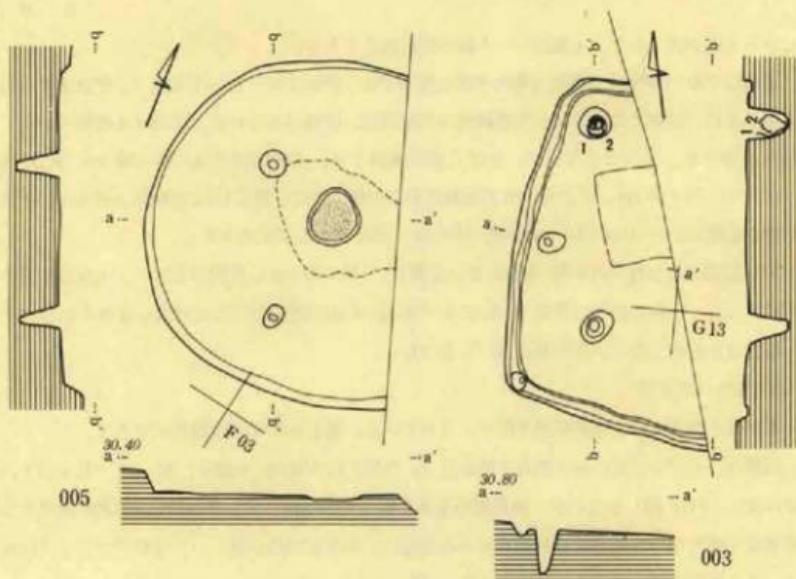
調査区北東端、C14 Gr. 付近に位置し、東半分は斜面により消失する。覆土は暗褐色土で、上層はローム粒が多く砂質である。

遺構は径470 cm のほぼ円形の可能性があり柱穴を結ぶ方向はN—21°—Wを示す。壁はやや傾斜し、最高でも25 cm である。床の堅面は炉の周辺に限られる。主柱穴はともに径35 cm で、P₃が54 cm、P₄が69 cm の深さである。炉は(第35図)住居のほぼ中央にあり、 95×95 cm の梢円形を呈す。凹みは10 cm と浅く、火床は底面中央で4 cm 程焼化している。

遺物は覆土内に散在する程度で、本跡に伴うと思われるものはない。

• 006号跡 (第4図)

調査区南東部、J05・06 Gr. 内に位置する。北東部分は207号跡(古墳)により破壊され南壁側には擾乱がある。また西壁中央部分には土壌が重複するが、上面には貼床がみられる。覆土の



第4図 003・005・006号跡実測図

厚さは20cmにも満たず、黒褐色土で、下層はローム粒を含む。

遺構は480×375cmの隅にやや丸味のある長方形を呈す。西壁の方向はN-38°-Wだが主柱穴の配置は7°-E振れている。床面は全体に軟弱で、わずかに炉の周辺に堅面が残る。主柱穴はP₁を除き検出された。いずれも径30cm~40cmで深さは一定していない。配置はP₂-P₃間175cm、P₃-P₄間170cmとほぼ方形であることが特異である。この他に南西隅に径30cm、深さ37cmのピットが、西壁直下にも小ピットがみられるが、性格は不明である。炉(第35図)は70×55cmの梢円形の浅い凹みで、底面にのみ火床がみられるが、あまり焼けていない。

遺物は覆土中に散布する程度で、P₃の覆土内から紡錘車が出土した。

• 007号跡 (第5図)

調査区東部、F10 Gr.を中心位置する。

207号跡の墳丘内にあり、北東隅は古墳周溝により破壊される。

上面は削平が著しいため20cm程しかなく、とくに北東部分は壁も残らない。覆土は暗褐色土と褐色土である。

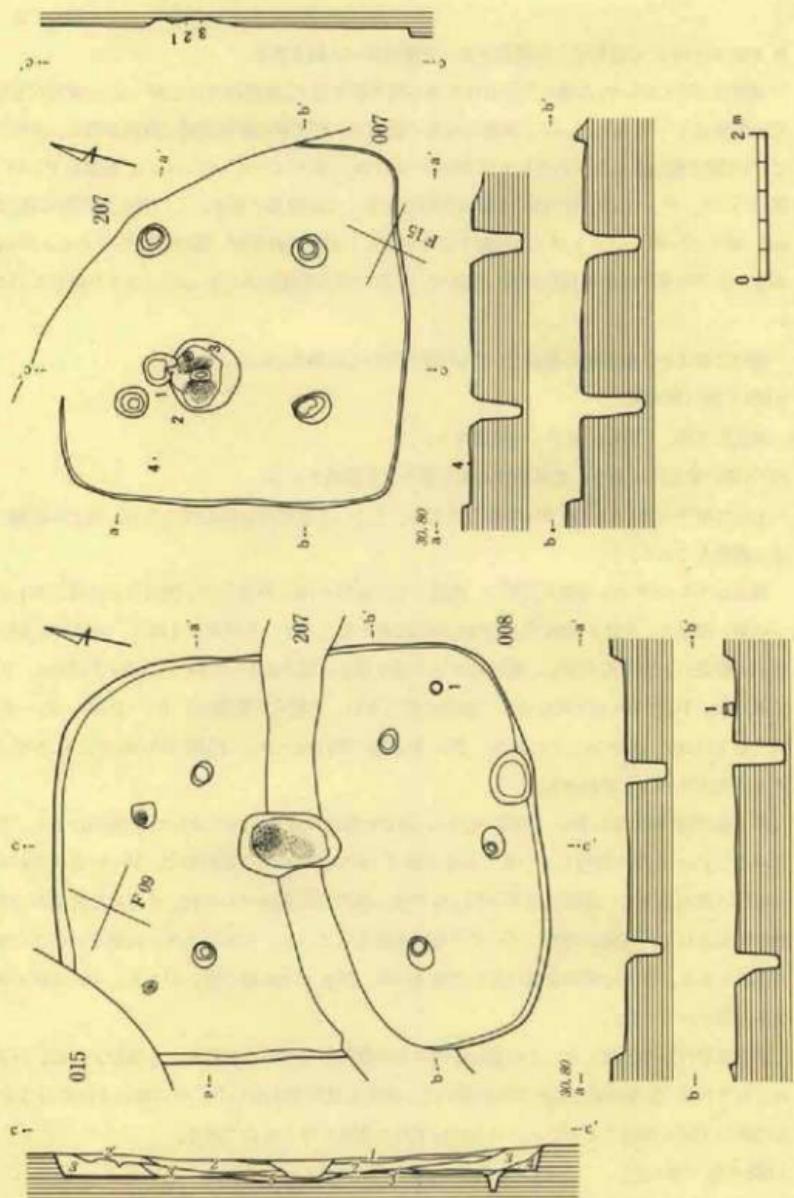
遺構は470×490cmの隅丸方形で、西壁の方向はN-10°-Wを示す。床面は炉の周辺がわずかに堅い程度で、全体に軟弱で、凹凸も一部にみとめられる。主柱穴は4本で、いずれも50×40cm前後の上面円形を成し、断面はロート状を呈す。深さはP₁で68cm、P₂で73cm、P₃で85cm、P₄で70cm異なるが、極端な差はない。主柱穴の配置は、P₁-P₂間、P₂-P₃間とも210cmと整然としているが、P₃-P₄間が240cm、P₄-P₁間225cmで、P₄がやや外方に突出することがわかる。

炉(第35図)の位置はP₁-P₄間中心から30cm程北に寄り、かつ40cm程内側にある。図でみるとP₄にかなり接近している。炉の本体は100×90cmの不整円形で、10cmの深さがある箱形の窪みである。底面には35×25cmの浅い梢円形の窪みがみられ、火床はこの窪みの両側に形成される。火床は発達していて5cm程焼化している。火床の北縁の両側には小さな落ち込みもある。さらに炉の北側に接して径40cm、深さ15cm程の窪みがあり、中には灰・焼土が充填されていた。

遺物は炉内から出土した。1の墳は炉内にある梢円形の窪みの北縁をとり囲むように、2・3はそれぞれ東・西の火床上にわずかに浮いて、倒れた状態で出土した。その他に4の器台はP₄と西壁の中間に倒置していた。これらはいずれも本跡に伴うものである。

• 008号跡 (第5図)

調査区東部のほぼ中央、F08、09 Gr.内に位置する。遺構の中央を東西に207号跡の古墳周溝が横切り、北西隅は015号跡により破壊される。



第5図 007・008号断面図

覆土は30~35cm遺存し、上から1層暗褐色砂質土。2層暗褐色土でローム粒若干含む。2'層暗褐色土。3層暗褐色土と褐色土。3'層3層にローム粒を含む。4層褐色土でローム粒を多く含む。5層黒色土で焼土粒を多く含む層である。3層は比較的硬質でやや特異な層だが、全体に自然堆積と考えられる。

遺構は670×550cmの南北壁がやや丸味をもつ隅丸長方形で、N-16°-Wを示す。壁はやや傾斜して掘り込まれているが、しっかりしていた。床面は全体にやや軟弱で、均一な堅さである。また住居跡の中央に向けてわずかに傾斜するが、あるいは拡張された可能性もある。主柱穴は床面規模に比べ小さく、浅い。 P_1 、 P_2 は35×25cmの楕円形、 P_3 、 P_4 はやや大きな断面ロート状のものである。深さは P_1 から順に、55cm、70cm、60cm、50cmである。その配置は P_1-P_2 間260cm、 P_2-P_3 間275cm、 P_3-P_4 間290cm、 P_4-P_1 間235cmと歪みがあるが、方形に近い。長軸上の南壁より60cm離れて P_5 がある。深さ25cmでわずかに外傾斜する。 P_5 の東側に接するように60×45cm、深さ16cmの楕円形の窪みがあるが、貯蔵穴であろう。

炉はほぼ中央(指数0.92)にあり、207号跡で一部こわされる。140×90cm、深さ15cm程の不整形で、火床は7cm程にまで焼化していた。この他に P_1-P_4 の外方に径20cm程の火床部分がみられる。

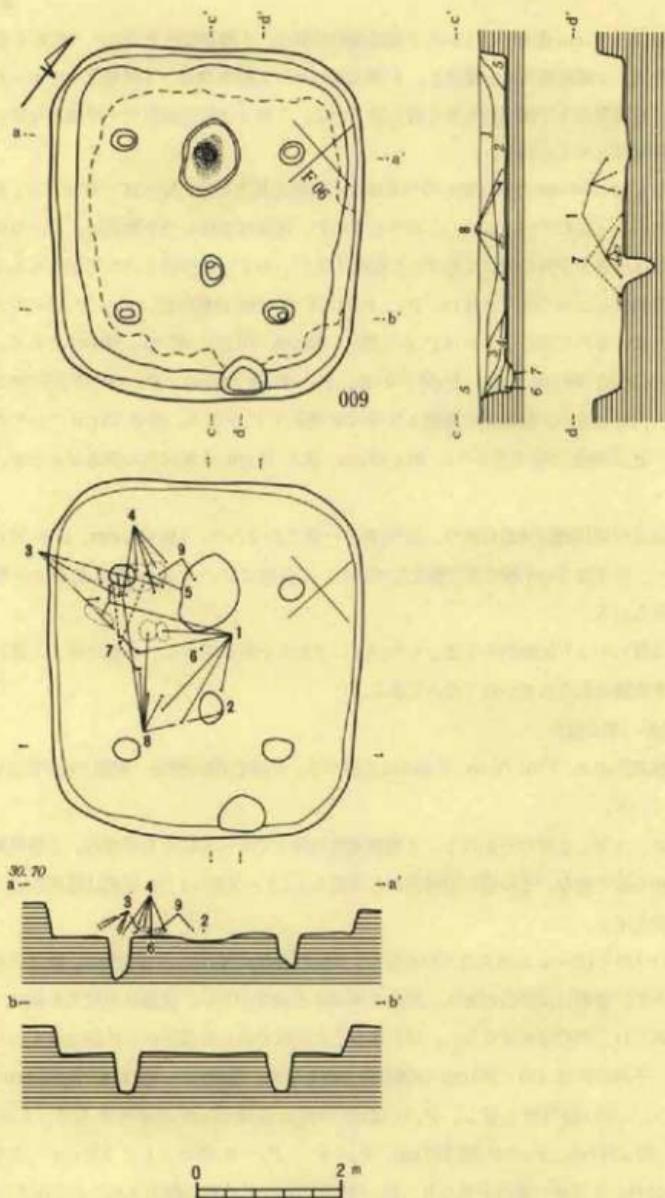
遺物は覆土中より比較的多く出土したが、いずれも小片に過ぎず、本跡に伴うと思われるものは、南東隅に正立していた1のみである。

・009号跡(第6図)

調査区東部中央、F05、06Gr.を中心位置する。北部で010号跡を、東部で066号跡を切って作られている。

覆土は、大きく2層に分かれる。1層暗褐色砂質土でローム粒を若干含む。2層黒褐色土でローム粒を若干含む。その他に南壁側からの流入土(3~5層)は上から順に暗褐色土から褐色土へと変化する。

遺構は470×435cmの隅丸長方形を呈し、長軸の方向はN-35°-Wを示す。壁は垂直に近い掘り込みで、壁面には凹凸があり、最高で45cmと遺存が良い。床面は主柱穴外側まで全体に踏み固められ、凹凸はあまりない。図の床面上に実線で示した部分から外側はほんのわずか高くなり、その形状は415×365cmの隅丸長方形を呈す。主柱穴はいずれも35×30cm前後の短軸方向へ長い楕円形を呈し、 P_1 の42cmの他はほぼ55cmの深さである。その配置は P_1-P_2 間220cm、 P_2-P_3 間210cm、 P_3-P_4 、 P_4-P_1 間はともに230cmと正方形に近い。 P_5 は他の住居跡の場合と異なり、 P_2-P_3 間のかなり内側に検出されたが、深さ(40cm)や外傾斜するなどの特徴は共通性がある。 P_5 は60×50cmの不整形で、深さは10cmと浅い。



第6図 009号跡実測図

炉（第35図）は110×80 cmの梢円形で、深さは10 cmある。火床は底面全体にみられ、かなり発達している。底面中央にはさらに梢円形の小さな窪みがある。

遺物はかなりの量が出土した。その多くは西半部の2層中にみられ、床面よりわずかに浮いているものが多い。ことにP₄と炉の間にかたまって出土した3・4・7・9等は住居廃棄後まもない時期に一括投棄された状態を示す。1・8はさらに2 m以上離れて接合する資料もあり、全体に土器の様相は一致するため、いずれも本跡と近い時期と考えて大過ない。

• 010号跡（第7図）

調査区東部、E04・F01 Gr.を中心位置する。遺構の中央を南北に206号跡（古墳）周溝が横切り、南東隅は009号跡で破壊される。北部では011号跡を切って構築されている。

覆土は20 cmにも満たない。1層暗褐色砂質土。2層黒色土でローム粒を若干含む。3層暗褐色土でローム粒を多く含む。4層褐色土。2層は南一部のみにみられる特異な層である。

遺構は600×525 cmの梢円形を呈し、長軸の方向はN—61°—Wを示す。壁はやや軟弱で傾斜がある。床面は全体に軟弱で、凹凸が著しい。主柱穴はP₁・P₂が径25 cm、深さ30 cm前後、P₃・P₄が径40 cm、深さ70 cm前後と均一でない。その配置はP₁—P₂、P₃—P₄間が310 cm、他は195 cmで、長軸方向よりわずかに西に振れる。P₅は径20 cm、深さ37 cmで外に向かって傾斜している。その位置は主柱穴間をわずかに南へずれ、指数は0.46である。

炉は床面のほぼ中央（指数1.0）に位置するが、206号跡によって上面が削平されている。比較的大きく、深い炉であったろう。

遺物は比較的多く、中央部分に集中して出土した。その多くは3層中にみられ、とくにP₄付近のものは投棄されたと思われる状態である。また西壁直下の中央床面に接して甕（2）が出土したが、これは1・10～12とともに本跡に伴うと考えられる遺物である。

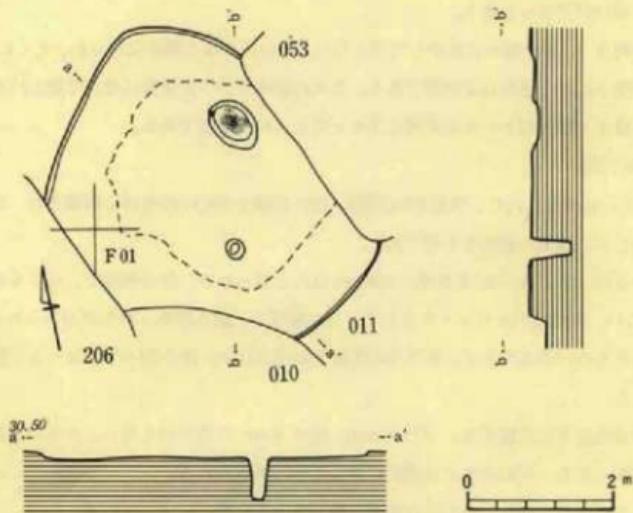
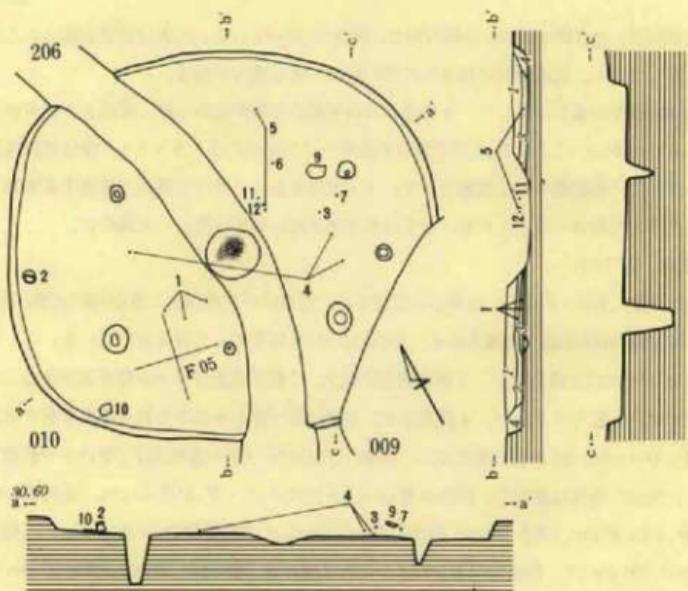
• 011号跡（第7図）

C13 Gr.を中心検出された。東側を053号跡、西～南側を206・010号跡に破壊され、かつ上面の削平も著しく、遺構の形状も不明である。

遺構の大きさは、図のa—a'を参考に450 cm以内と思われる。壁は軟弱で、高さもわずか5 cmに過ぎない。床面は炉とピットを含む2×3 m範囲で、踏み固められた面がみられる。主柱穴と思われるものはみあたらず、南半分の床面上に径25 cm、深さ58 cmのピットが検出されたのみである。

炉（第35図）は北寄りに位置する。80×55 cm、深さ8 cmの梢円形を呈し、火床は底面にわずかに残る程度である。炉の中央には南北に並んで小穴がみられる。

遺物は殆どないが、図示したものは床面に接して出土した。



第7図 010・011号跡実測図

• 012号跡（第8図）

調査区南端中央、II0・11 Gr. 内に位置する。遺構の中央を南北に202号跡（古墳）周溝が走り、南半分は調査区外である。

覆土は30cm程遺存し。1層黒褐色土でローム粒比較的多く含む。2層黒褐色土。3層暗褐色土でローム粒、ローム塊を多く含む。4層ロームの流れ込み土で、3・4層ともしまりの強い層である。

遺構は東西幅500cmの隅丸長方形と思われ、長軸はN—7°—E前後を示す。床の堅い面は西半分にのみみられ、その範囲は壁下にまで及び、凹凸もあまりない。主柱穴で完掘できたのはP₁のみである。上面の径55cm、中間で径30cmのロート状を呈し、深さは76cmである。他に206号跡内にP₁を検出したが、推定の深さは85cmである。炉その他の施設は破壊または未掘である。

遺物は少なく、本跡に伴うと判断できるものはない。

• 013号跡（第8図）

I06 Gr. 内に位置し、012号跡や、古墳周溝により破壊される。

上面はほぼ完全に削平され、さらに、耕作による数条の溝があるため、遺存は最悪である。

遺構は、炉を中心に堅質の床面が拡がる。主柱穴は3本まで確認できた。P₁は径25cm、深さ21cm、P₂は径30cm、深さ38cmで、P₃は012号跡床面下より検出された。その配置はP₃—P₁間270cm、P₁—P₂間が190cmで縦長の特異な形状である。

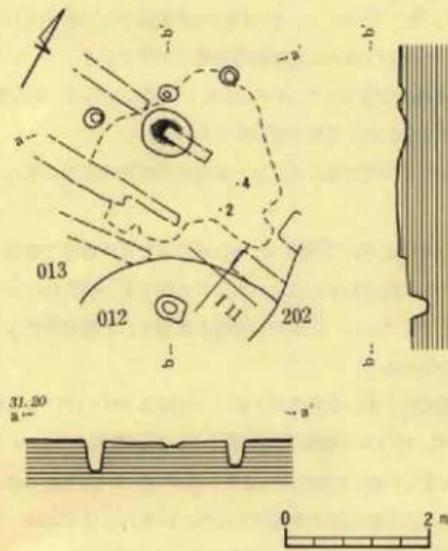
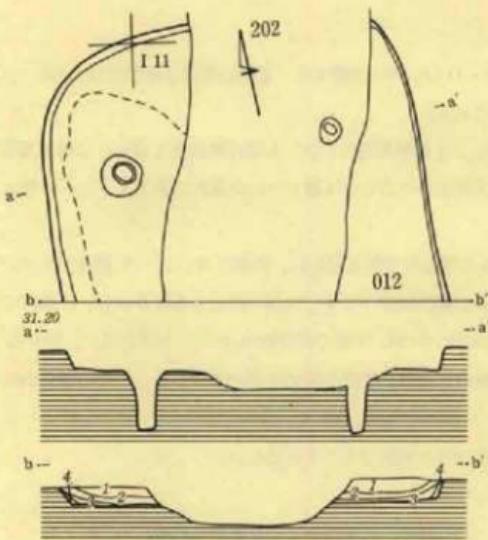
炉は75×60cm、深さ10cmの楕円形で、火床はかなり発達している。炉の北縁に深さ7cmの凹みがあり、その中には炭化粒および焼土粒が多くみられた。

遺物は堅い床面上に散在する程度であるが、2・4などが比較的床面に接して出土した。

• 014A号跡（第9図）

調査区南部の中央、I03・04 Gr. 内に位置する。014B号跡とは南西部で重複する。調査の過程でB号跡を発見したが、A号跡がわずかに床が高いにも拘らず、明瞭な貼床を検出することはできなかった。覆土は2層に分かれ、上層が暗褐色と黒色土、下層は黒色土で壁の周辺には暗褐色土でローム粒を含む層がある。

遺構は北西隅部分が不整に張り出した隅丸長方形で、規模は580×470cmと推定した。東壁の方向はN—25°—Eを示す。壁はやや軟弱で、東側で28cm、西側で15cmの高さが残る。床面は比較的軟弱で凹凸も著しいが、主柱穴内には堅い面がみられる。北部の床面は西に向かって最大8cm程傾斜している。主柱穴は3本検出された。いずれも径25cm、深さ60~68cmと均一で、P₁はB号跡の炉を切っている。その配置はP₁—P₂間270cm、P₂—P₃間300cmで、東壁に比べ約10°北へ振れている。なおP₄は精査の結果検出できず、設置されなかつた可能



第8圖 012・013號跡測圖

性が強い。なおP₁—P₂間中央より西にずれて径30cm、深さ37cmのピットがあるが本跡に伴うものと考える。

炉（第35図）は北に偏って位置する（指標0.63）。140×90cmの長楕円形で、深さ10cmの箱形を呈す。火床は底面に細長くみられ、中央で7cm程焼化している。またB号跡内に検出された炉は円形で火床のみを残すが、本跡に伴うと考える。

遺物は比較的多く出土した。1、2は床面中央から西側に床面に接して散在し、他は床面から10cm程浮いて一括出土した。図示したものはすべてA号跡に関係するものであろう。

・014B号跡（第9図）

西半部は202号跡（古墳）周溝により破壊され、東半部はA号跡により削平を受ける。

遺構は約350cmの短軸長の楕円形に近い平面形で、長軸はN—65°—Eを示すと思われる。床面は炉の周辺のみに堅い面がみられる。主柱穴は2本残る。P₁は深さ55cm、P₂は同35cmで、その間隔は210cmである。炉（第35図）は75×75cmの円形で、浅い皿形の凹みである。火床は底面中央にみられ、あまり発達していない。

本跡に伴うと断定できる遺物はない。

・015号跡（第9図）

調査区中央、E08・12Gr.を中心位置する。遺構の中央を206号跡（古墳）周溝が縦断するが、床面まで達していない。また東隅で008号跡を、西へ北部で020・016・017号跡を切って構築される。

覆土は45~50cm遺存し、遺跡通有の暗褐色砂質土を除き、4層からなる。1層黒褐色土でローム粒を多く含む。2層暗褐色土で黒色土、ローム粒、焼土粒を若干含む。3層暗褐色土でローム粒を多く含む。4層黒褐色土。5層黒色土で、4層はとくに粘性が強い。

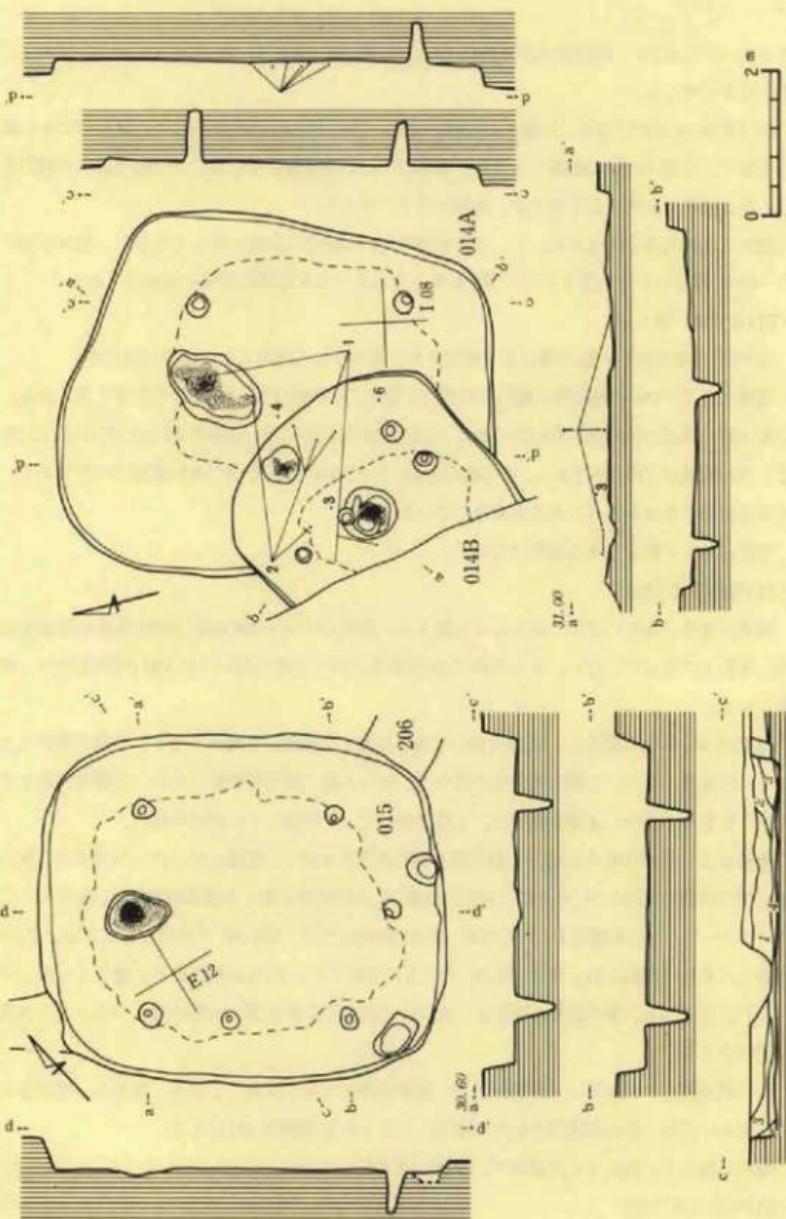
遺構は530×440cmの四辺とも胸の張る隅丸長方形を呈し、長軸はN—45°—Wを示す。床面は全体に硬質で平坦だが、とくに主柱穴内は堅い。主柱穴は4本とも径25~30cm、深さ50~55cmと均一で、その配置はP₁—P₂間が10cm短かい他は、270cmとほぼ方形となる。P₁は長軸上にあり（指標0.5）、深さ55cmで外方に傾斜する。P₂は南壁東寄りに壁にくい込んで作られ、径45cm、深さ15cmを計る。さらに南北隅にも深さ20cm程の凹みがあるが、性格は不明である。

炉（第35図）は85×70cmの楕円形で、底面全体に火床が発達している。底面の一部はさらにわずかに凹む。炉の位置は主柱穴間中央よりやや外側（指標0.48）にある。

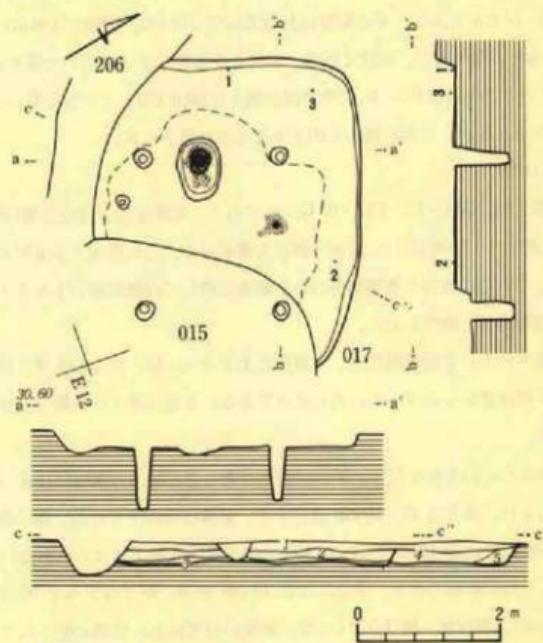
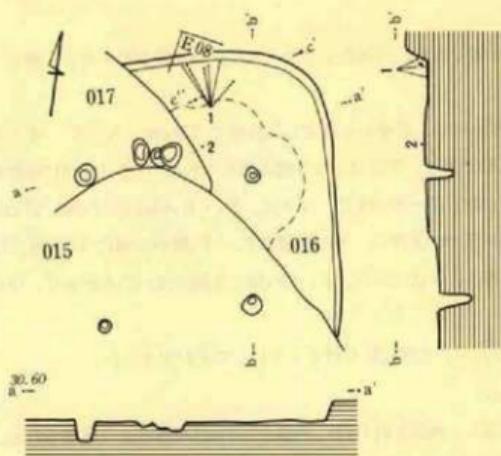
遺物は覆土中に散在するに過ぎず、本跡に伴うものはない。

・016号跡（第10図）

E08 Gr.内に位置し、大半を015・017号跡に切られ、北東部分のみが遺存する。覆土は017号



第9図 014・015号跡実測図



第10図 016・017号跡実測図

住居跡

跡断面図の4、5層である。黒褐色土でローム粒、焼土粒を若干含み、壁近くでローム粒が多くなる。

遺構は隅丸方形を呈し、東壁から推定して長軸で520cm、N—6°—Wと考える。壁は軟弱で、高さ30cm程である。床面はかなり踏み固められていた。なお017号跡床面とはほぼ同一面である。主柱穴は径25~30cmで、深さは、P₁・P₂が各々37cm、27cmと浅いのに対し、他は推定して60~65cmと深い。その配置はP₁—P₂間から順に175cm、210cm、215cm、235cmと不整である。炉はないが、P₁—P₂間に3個の浅い凹みがあり、中には黒灰が詰まっていた。

遺物は殆んどないが、北壁に貼り付くようにして1が出土した。

・017号跡（第10図）

E07 Gr.内に位置し、西部を015号跡、南壁を206号跡周溝により破壊される。覆土は1層暗褐色砂質土、2層暗褐色土でローム粒をやや多く含む、3層黒色土でローム粒が多い。

遺構は推定で460×420cmの隅丸長方形を呈し、長軸はN—58°—Wを示す。床面は中央に向けて盛り上がるようで、凹凸も著しいがかなり良好である。主柱穴は径25cm前後と小さいが、深さは70~80cmと深い。その配置は長軸方向で210cm、短軸で190cmである。

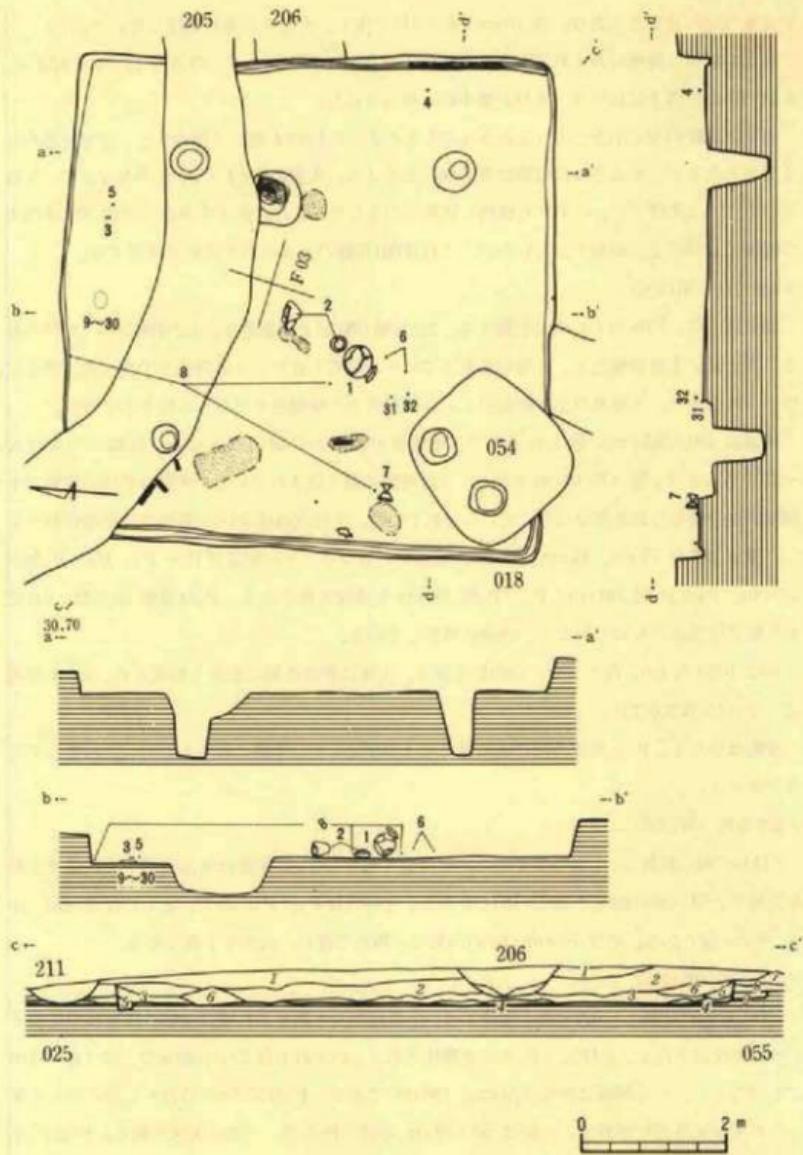
炉は85×60cmの梢円形で、皿状に凹み、中央より北側はさらに円形に落ち込む。火床は3cm程焼化している。位置はP₁—P₂間やや南に偏る（指標0.65）。この他にP₁—P₂間中央に柄鏡形の火床がみられるが、床面に接して出土するものは壁下に多い。

・018号跡（第11図）

調査区中央部北側、B14・15、F02・03 Gr.内にある。北側を205号跡（古墳）周溝で、南西隅を054号跡で破壊され、中央部分には206号跡の周溝が走る。他に重複する6軒の住居跡をすべて切って構築している。複雑な重複関係のため調査に際しては確認用のトレントを縦横に入れため、一部掘り過ぎた箇所もある。

覆土は、1層黒色土。2層暗褐色土。3層黒色土でローム粒、焼土粒を多く含む。4層軟弱なロームで、5層は壁からのロームの流れ込みである。6層は焼土の堆積で、3層とともに被災の跡を物語る。

遺構は1辺660cmの方形を呈し、炉の位置から考えると軸の方向はほぼW—Eを示す。壁は垂直に掘り込まれ、高さは40~50cm遺存する。壁溝は東壁下で極端に幅の狭い「V」字形断面を呈し、西壁下では幅15cmの浅いものとなる。南・北壁下にはみられない。床面は被災のため乱れて、全体に軟弱である。主柱穴は径60cm前後、深さはすべて85cmである。その配置は主軸方向に380cm、他は370cmで、隔壁の対角線上に整然と配されている。また南西隅には50×45cm、深さは推定40cmの箱形の凹みがあるが、054号跡に伴う可能性が強い。



第11図 018号跡実測図

炉は東柱間の北寄りにあり、径 70 cm 程の円形で浅く、火床もあまり発達していない。

焼土の堆積は隨所にみられるが多くは床面より 5~6 cm 上にあり、厚みも 15 cm を超える。東壁南半の壁溝上にはワラ、木材が集中的に検出された。

遺物は比較的多く出土した。このうちでも 8 のように 4.5 m も離れて接合する、投棄を思わせる資料もあるが、殆んどはほぼ原位置を保つと考える。大形の壺(1・2)は中央付近で、7 は西壁下、5 は北壁下で、いずれも横倒し状態で出土した。また北壁下中央からは約 20 cm 四方の範囲に 22 個の土玉が集中していたが、これは 001 号跡の土玉の出土状態と共通する。

・019号跡（第12図）

調査区中央、E10・14 Gr. 内に位置する。211号跡(溝)が上面を走り、022号跡を切って作られる。覆土は、1 層暗褐色土、2 層暗褐色土でローム粒若干含む、3 層黒色土で炭化粒、焼土粒、ローム粒を含む、4 層黒色土と暗褐色土、5 層褐色土と暗褐色土でローム粒を若干含む。

遺構は 480×385 cm の隅丸長方形で、短軸壁がわずかに胴張りとなる。長軸の方向は N—37°—W を示す。壁は約 40 cm を測り、ほぼ垂直に掘り込まれている。床面は全体に硬質で土同様に踏み固められた部分は南、北に分かれていた。主柱穴は径 30 cm 前後でやや楕円形を呈し、深さは各々 70 cm、45 cm、53 cm、58 cm と異なる。その配置は P₁—P₂、P₃—P₄ 間が 230 cm、P₂—P₃ 間 240 cm、P₄～P₁ 間 250 cm とほぼ方形である。P₅ は長軸上(指數 0.54)にあり他の住居跡のものと異なり、内側に傾斜している。

炉は 100×70 cm、深さ 7 cm の卵形を呈す。火床は炉の西側に細長く形成され、5 cm 程焼化していた(指數 0.73)。

遺物は少なく、P₂ と東壁の間に床に接して 1 が出土した。本跡に伴うものは、この他に 7 だけであろう。

・020号跡（第12図）

E11 Gr. 内に位置し、上面の削平のため壁は全く遺存しない。床面は検出当初中央に盛り上がり氣味で、堅い面の範囲は 300×180 cm ある。主柱穴は P₂、P₃ のみで、ともに径 25 cm、深さ 30 cm 程である。炉は 70×60 cm の円形で、極めて浅い。火床も不良である。

・021号跡（第13図）

E09 Gr. 内に位置し、022号跡と重複する。上面は殆んど削平され壁はない。床面は中央部に 1 m 四方程残される。主柱穴は P₁ を除き検出された。いずれも径 20 cm 前後で、深さは 30 cm にも満たない。その間隔は各々 170 cm、180 cm である。P₅ は深さが 33 cm と他に比して深く、わずかに外方に傾斜する。炉は 50×40 cm の深い凹みで、一部に火床が残る。炉と P₅ を通る線を長軸と考えると、その方向は N—41°—W を示す。

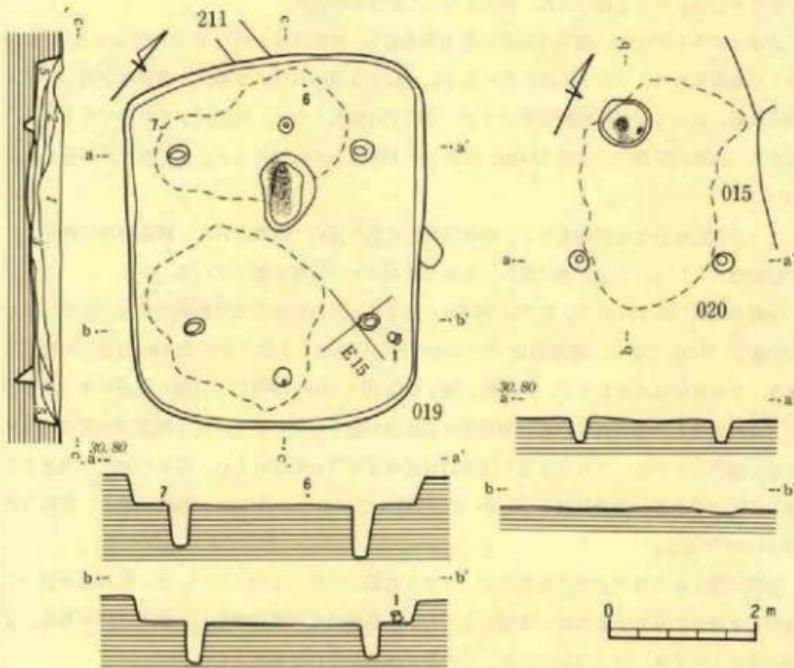
• 022号跡 (第13図)

調査区中央、E09・10 Gr. 内に位置する。南東部は019号跡に、南壁は211号跡(溝)により破壊され、上面の削平のため021号跡との関係は不明である。覆土は褐色土が主である。

遺構は約490 cm の円形に近く、炉の位置から主軸はN-10°-Eを示すと思われる。壁は軟弱で、高さは10~15 cm 程である。床面は主柱穴間及びP₅付近がかなり硬質で遺存は良いが、南側で凹凸がある。主柱穴は4本検出された。P₁、P₂は径30 cm、深さ45 cm、他は径35~40 cm、深さ60 cm である。その配置はP₁-P₂間から順に220 cm、185 cm、235 cm、190 cmと不整である。P₅は柱穴間中央よりかなり外側に位置し、深さは40 cm を測る。

炉は中央より北側に位置し、推定指数は0.7を示す。75×55 cm の楕円形で、底面はさらに50×35 cm の皿状の凹みとなる。火床は全体にみられるが、あまり発達していない。

遺物は稀少で、本跡に伴うと思われるものはない。なお図の北西壁上には、穿孔された土器(第55図15)が直立して検出された。性格は不明である。



第12図 019・020号跡実測図

住居跡

・023号跡（第13図）

E01・02 Gr. 内に位置し、北側を024、025号跡により切られ、西側で064号跡を切っている。覆土は1層暗褐色砂質土。2層暗褐色土でローム塊を多く含む。3層暗褐色土で焼土、炭化粒を若干含む。4層黒色土でローム粒を含む。

遺構は約5mの不整円形で、深さ20cm程である。検出当初は住居跡と思われたが、床面はソフトロームと黒色土の混在する軟弱な面であり、付帯すべき施設はなにもない。遺物は殆んどない。

・024号跡（第13図）

調査区北部中央、E01 Gr. 内に位置する。211号跡（溝）が上面を走るが、他に重複する住居跡はすべて切って作られる。

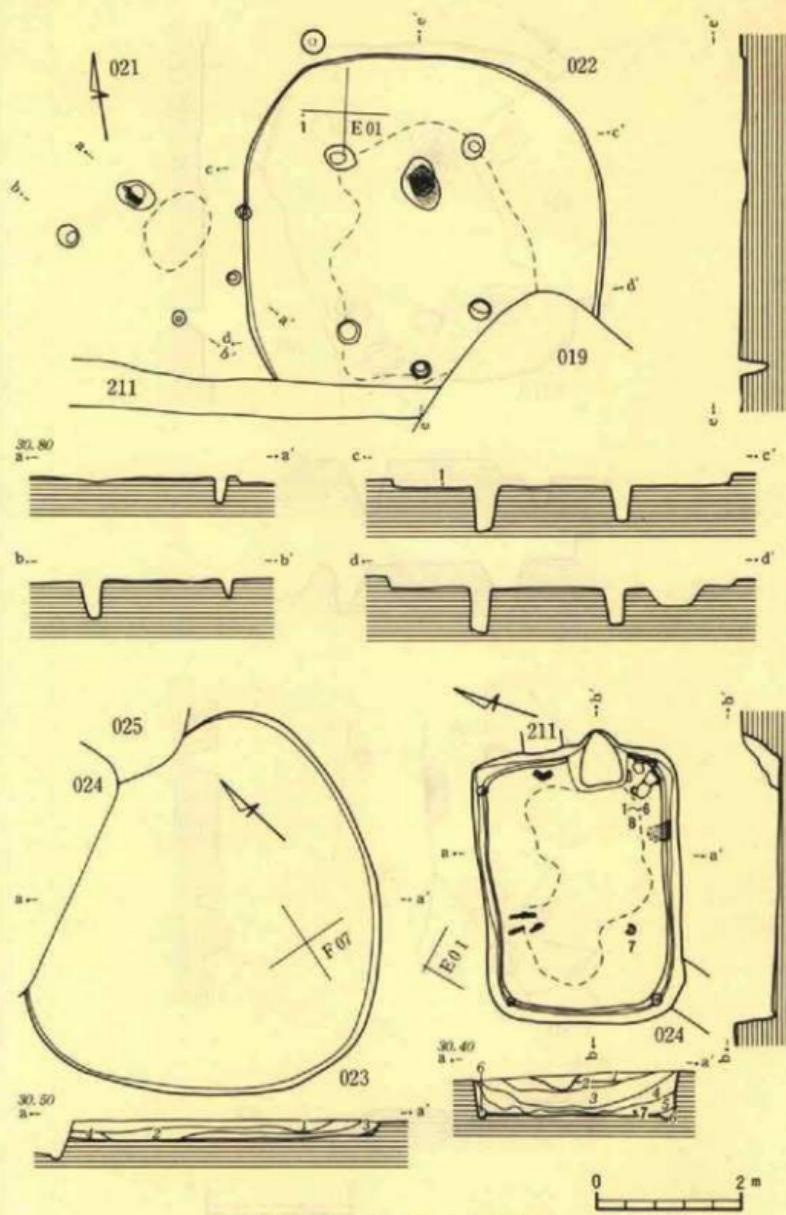
覆土は、1層黒色土。2層黒色土でローム粒若干含む。3層暗褐色土でローム粒若干含む。4層暗褐色土でローム粒多く含む。5層褐色土でローム塊多く含む。6層褐色土で炭化粒を含み軟弱である。また床面に密着して炭化粒、焼土粒が多く分布している。これにより被災の際、5層を中心とした土を投げ入れ、消火したことがうかがえる。

遺構は375×275cmの極端な綫長の長方形を呈し、長軸はN-72°-Eの方向を示す。壁は中段まで傾斜をもち、下方は垂直に掘り込まれ、高さは50~60cmを残す。壁溝は全周し、基本的には幅の狭い「V」字形断面を示すが、三隅では幅広となる。床面はやや軟弱で小さな凹凸がある。四隅の壁溝内には径15cm、深さ10~13cmの小穴がみられるが、主柱穴か否か断じがたい。

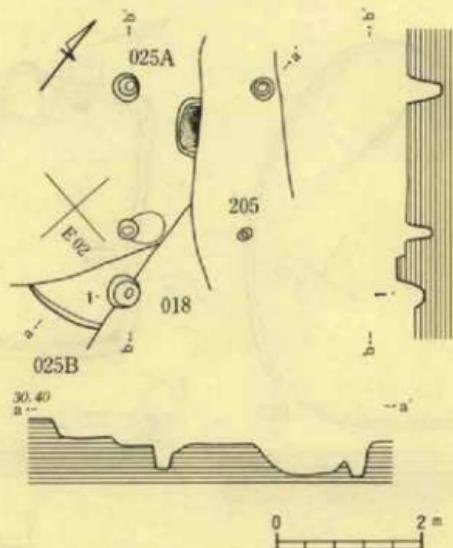
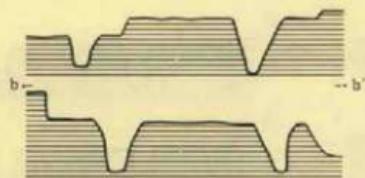
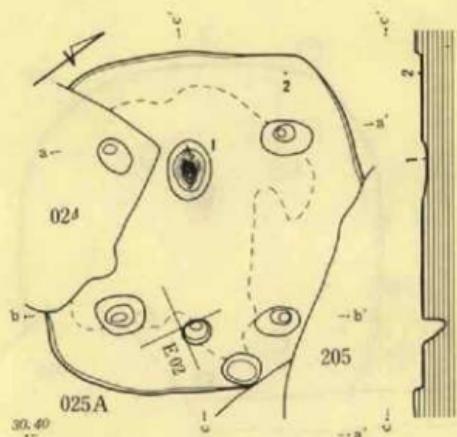
カマド（第38図）は東壁南寄りに、壁を三角形に切り抜いて構築された。構築材は灰色粘土に山砂を混入したものを主に袖に使い、天井はさらにローム塊を加えている。

全長90cm、幅80cmで、高さは50cmに達する。焚口部分の天井懸架は落ち込んでしまったが幅は30cmである。燃焼部は40×35cm程の広さで、上面には径28cmの掛口が複元できる。なお火床はみあたらず、燃焼部、袖下には70×45cmの横円形の掘り込みがあり、黒色土とローム塊が充填されている。煙道部には山砂が貼り付けられていて、煙道口や煙道の上昇角度を操作している。これによると煙道口は火床より7cm高められ、23×13cmの大きさを測ることができる。煙道は長さ50cmで、中段までが40°、上方で70°の角度がある。煙出口は径13cmである。

遺物は覆土中には殆んどみあたらず、カマド右脇に一括して出土した。甕、瓶は組み合って横倒しとなり、その下から壺が2個出土した。小形甕はその奥に横転し、直下に壺がある。支脚を含め1~6までは完形品である。この他に床面中央に7が出土した。



第13圖 021・022・023・024號跡測圖



第14図 025A・B号跡実測図

• 025 A号跡（第14図）

B13 Gr. を中心に位置する。南、北の一部を024・205号跡で破壊される。覆土は 30 cm 程遺存し、暗褐色土層で、壁際にローム粒、ローム塊が多く含まれる。

遺構は 460×430 cm の隅丸方形で、長軸の方向は N—55°—W を示す。床面は全体にやや軟弱で凹凸もない。主柱穴は 70×45 cm 前後の楕円形で、いずれもロート状を呈し、底面では径 15 cm 程となる。深さは 65~75 cm を測る。その配置は P₁—P₂間が 250 cm、他は 230 cm とほぼ方形となる。P₃は柱穴間中央に位置し（指標 0.1）、明らかに外方へ傾斜する。東壁北寄りには 55×45 cm、深さ 15 cm の浅い皿状の凹みがある。

炉（第35図）は柱穴間中央より内側（指標 0.68）にあり、80×60 cm の楕円形で、深さ 7 cm 程の底面中央にはさらに凹みがある。火床は底面全体にみられる。炉の中には多量の炭化粒が遺存した。

遺物は少ないが、炉中より壺頸部が破損して出土し、北西隅には 2 が直立していた。

• 025 B号跡（第14図）

025 A号跡の南東部に位置する。その殆どを A号跡や018号跡で破壊され、南隅壁がわずかに残るのみである。

遺構の規模は不明であるが、炉からみて N—47°—W を示す。南壁は高さ 25 cm が遺存し、床面は非常に堅緻であった。主柱穴は推定で深さ 45~50 cm と考える。その配置は P₁—P₂間から順に 200 cm、160 cm、195 cm、180 cm である。P₃は P₃—P₄の延長線上にあり深さは 35 cm を測る。炉は柱穴間内側にあり、火床はかなり発達していた。

なお A号跡内の柱穴や炉上には部厚い貼床があり、逆に 026号跡の炉は貼床下から検出された。このことにより、026→025 B→025 A号跡の順序が明らかとなった。

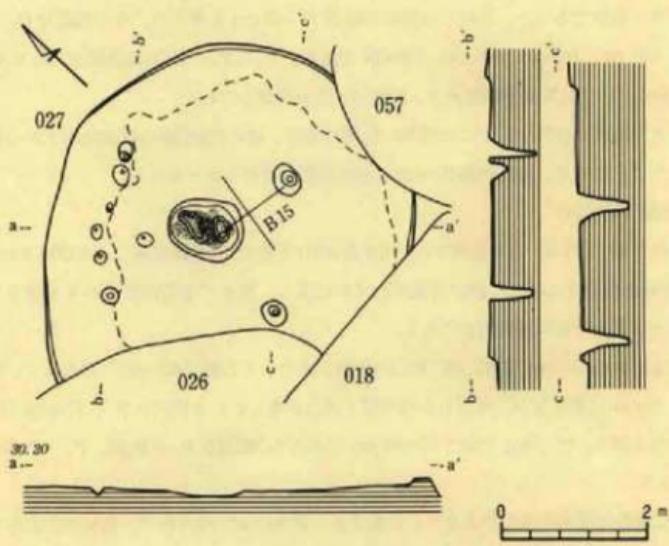
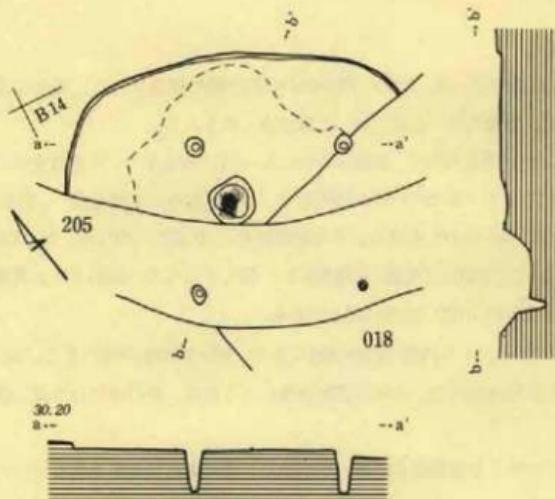
• 026号跡（第15図）

調査区北部、B14 Gr. 内に位置する。南半部は018号跡や205号跡周溝により破壊される。北部で027号跡と重複するが、本跡の床面がわずかに低く、覆土にも貼床を思わせる硬さはなかった。覆土は赤味の強い暗褐色土である。

遺構は縦軸で 480 cm 前後の楕円形の可能性があり、その軸で N—51°—W を示す。壁は北隅で高さ 10 cm に過ぎない。床面はかなり堅く凹凸が著しい。主柱穴は P₁、P₂が径 25 cm、深さ 55 cm を測り、他も推定で深さ 55~60 cm であろう。配置は P₁—P₂間、P₄—P₁間とも 205 cm である。

炉（第36図）は床面中央や北寄りに位置する。70×65 cm の円形で、皿状の底面中にはさらに小さな凹みがみられる。火床は不良である。

遺物は全体に散在するが、とくに炉の周辺に床面に接する土器が多い。



第15図 026・027号踏実測図

・027号跡（第15図）

調査区北端に近く、B10・11・14・15 Gr. にまたがって位置する。南側を018・026号跡に、西隣を057号跡により破壊される。覆土はわずか 10 cm しか残らず、褐色土層である。

遺構は 490 cm 前後のほぼ円形で、柱穴の配置からみると N—35°—W を示す。床面はほぼ全体に堅く、凹凸はあまりない。主柱穴は南側の P₂、P₃ が径 40 cm 前後のロート状で、他は径 20 cm と小さい。深さはいずれも 60 cm 程である。その配置は P₁—P₂ 間、P₃—P₄ 間が 225 cm、P₂—P₃ 間 180 cm、P₄—P₁ 間 190 cm であるが、わずかに菱形に歪む。また P₄—P₁ 間には浅い皿状の凹みが数個認められ、真黒色土が充填していた。

炉は柱穴間内側の床面中央に位置し、105×85 cm の楕円形を呈す。底面には細長い凹みが 2 個所にみられる。火床は底面全体に発達している。遺物は殆んどない。

・028号跡（第16図）

調査区北東端、B7・11・12 Gr. 内に位置する。205号跡（古墳）周溝により北半が破壊される。覆土は 10 cm 程が遺存し、粘性の強い暗褐色土である。北から西にかけてはさらに削平され不明である。

遺構は推定で 530×470 cm の楕円形を呈すと思われ、長軸の方向はほぼ N—40°—E を示す。床面は全体にやや軟弱で、北に向けてわずかに傾斜する。主柱穴は 4 本とも確認できた。径 25～30 cm、深さは 60 cm 前後を測る。その配置は P₂ が異状な位置にあるため全体に台形となる。P₁—P₂ 間から順に 180 cm、205 cm、225 cm、215 cm である。P₃ は長軸上、南壁近くにあり、深さ 32 cm で外側に傾斜する。P₄ は P₁—P₂ の延長線上、壁から 50 cm も離れて検出された。60×50 cm の楕円形で、深さは 25 cm と浅い。

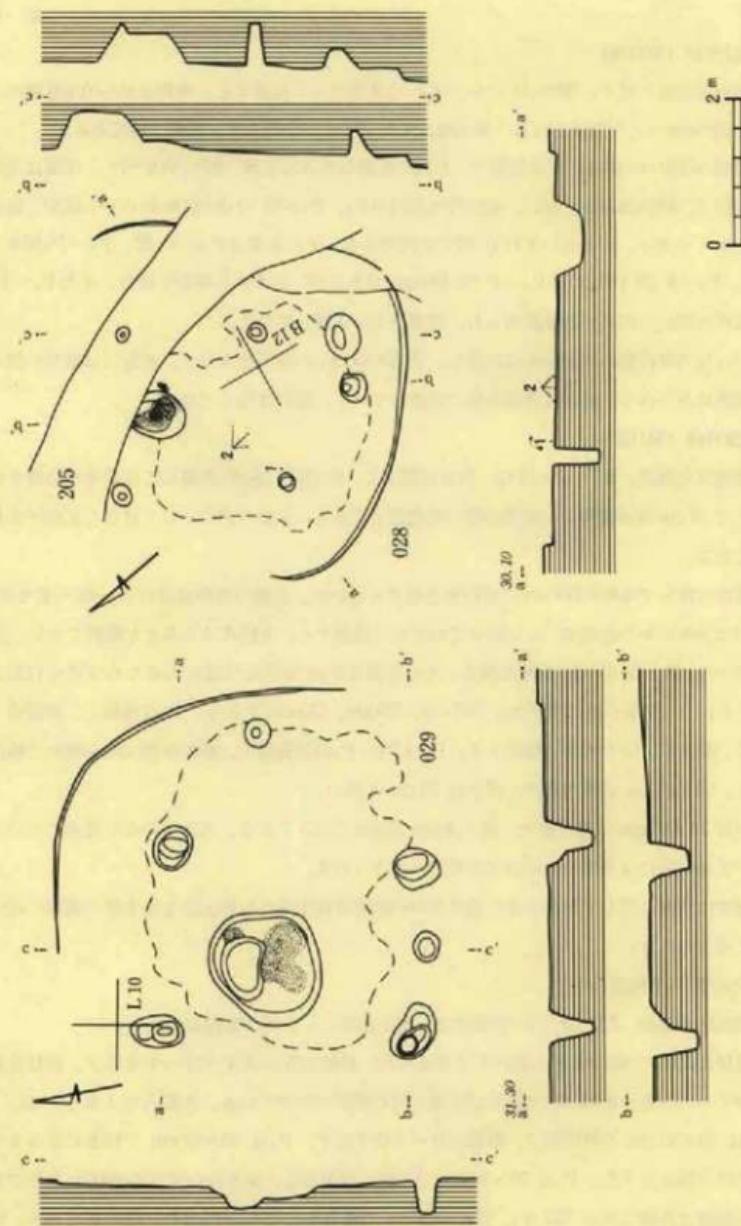
炉は 75×60 cm の楕円形で、深さ 8 cm の皿状の凹みである。火床はかなり発達していた。なお炉の右脇には火床のみのわずかな凹みがみられる。

遺物は床面に接して散在するに過ぎないが床面ほぼ中央から出土の 2 は本跡の廃棄に近い時期と考えられる。

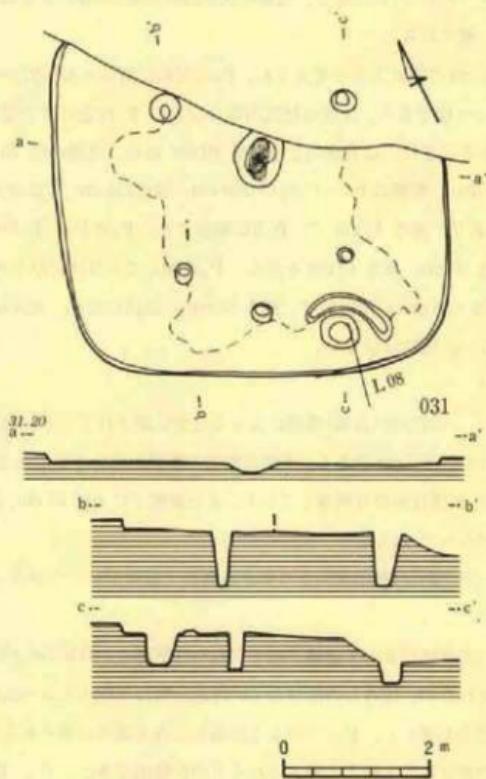
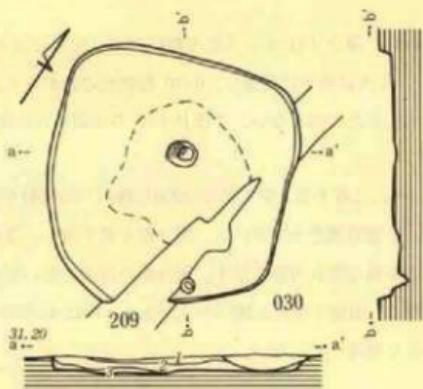
・029号跡（第16図）

調査区南西端、L10 Gr. 内に位置する。削平が著しく、西、南壁は全くない。

遺構は長軸で 640 cm 程の楕円形と考えられ、長軸の方向は N—10°—E を示す。壁は北東隅がわずかに残る。床面は柱穴間及び東壁方向に堅面が伸びている。主柱穴は 4 本である。P₁、P₂ は 60×50 cm の楕円形で、断面はロート状を呈す。P₃ は 80×50 cm で底面に至るまでに 3 段程の段を有する。P₄ は 70×40 cm で北側に段がある。深さはいずれも 60 cm 前後である。その配置は長軸方向が 325 cm、他は 245 cm で長方形となる。P₄ は柱穴間中央にあり、深さ 45 cm で、垂直に掘り込まれている。他に東壁中央付近に深さ 25 cm の小穴がみられる。



第16图 028・029号跡実測図



第17図 030・031号跡実測図

住居跡

炉 (第36図) 170×155 cm、深さ 15 cm の大形不整円形で、北半にはさらに 110×70 cm、深さ 10 cm の凹みがある。火床は南半に発達し、6 cm 程焼化の跡がみられる。

遺物は破片がわずかに出土したに過ぎない。3はP₁付近の床面からの出土である。

• 030号跡 (第17図)

調査区南西端、L07 Gr. 内に位置する。中央部には209号跡(方形周溝)が走る。覆土は 20 cm 程遺存し、1層暗褐色土。2層暗褐色土でローム、焼土粒を若干含む。3層黒色土である。

遺構は1辺約 330 cm の不整な隅丸方形を呈す。床は炉の周辺に堅い面がみられるが、全体に軟弱である。主柱穴ではなく、南壁下中央に浅い小穴がある。炉は 45×35 cm の梢円形でわずかに凹んでいる。火床は余り発達していない。

• 031号跡 (第17図)

調査区南西、L03・04 Gr. 内に位置し、北部は202号跡(古墳)周溝により破壊される。覆土は褐色土に近い軟かい層である。

遺構は横軸で 535 cm の隅丸方形と考えられ、P₃などの位置から N—27°—E を示す。壁はやや軟弱で、高さ 15 cm 程である。床面は柱穴内側及び P₁、P₄付近にまで堅い面が及び、全体的に小さな凹凸がある。主柱穴は北側の 2 本が径 40 cm 前後、南側が径 20 cm で、深さは P₃を除き 70 cm と深い。配置は P₁—P₂間が 240 cm、他は 215 cm でほぼ方形となる。P₄は P₁—P₂の延長線上、南壁から離れて作られ、径 50 cm、深さ 40 cm を測る。P₄を囲んで半月状に貼り付けの土堤がある。

炉 (第36図) は 100×85 cm の梢円形で、深さ 10 cm の皿状に凹む。火床は南北に細長いが、殆んど焼化していない。遺物は少ない。

• 032号跡 (第18図)

H13 Gr. 内に位置し、202号跡(古墳)周溝によって完全に壊されている。北東隅の壁の立上がりがみられるが、わずかに 5 cm である。床面は軟弱で本来の床か不明である。炉は 60×45 cm の梢円形で、浅いが、火床はかなり発達していた。また東壁下に 50×30 cm、深さ 15 cm のピットがあるが所属は明らかでない。

遺物の出土はないが、202号跡周溝内より弥生後期の土器片がいくつかみられる。

• 033号跡 (第18図)

032号跡とともに202号跡によって破壊、削平された住居跡で、H16 Gr. 内に位置する。当初、すでに火床が確認されたが、床らしい面ではなく、付近一帯は黒色土とローム塊の混在する軟弱な面である。また凹凸も著しく、ピットのような落ち込みも隨所にみられる。

その中でも炉を中心にして主柱穴と考えられるものが検出できた。P₁、P₂は 50×40 cm の梢円形で、現状での深さは 50 cm を測る箱形の柱穴である。他は周溝内にあり、推定の深さは

70 cm 程であろう。配置は P₁—P₂間から順に 370 cm、280 cm、340 cm、320 cm と不整である。なお P₁、P₂の覆土は中央に黒色土・ローム塊とわずかながら炭化材がみられ、ともに中段位から隕各 1 個が出土した。炉は中央にあり、かなり発達した火床のみが残る。

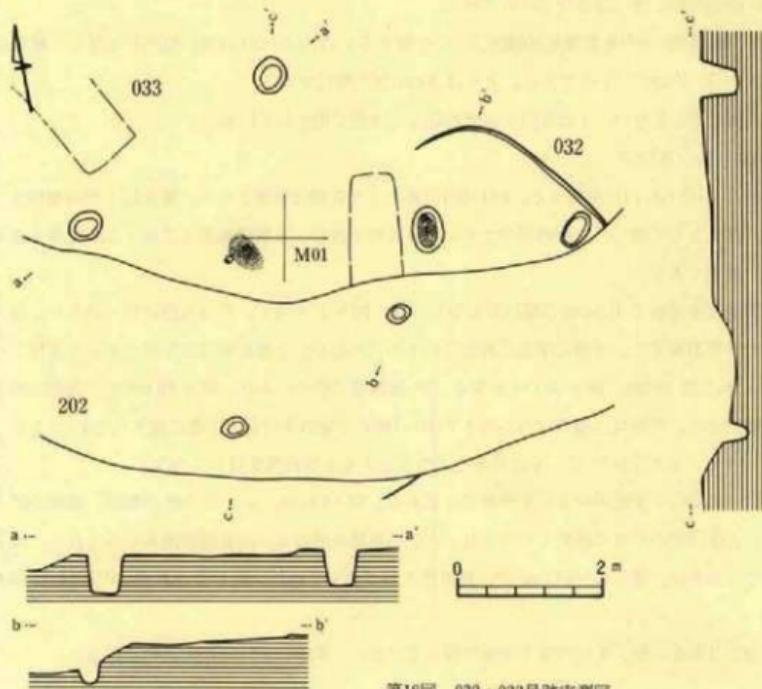
遺物は小破片が散在するに過ぎず、本跡に伴うものはない。

• 034号跡（第19図）

調査区南部の中央付近、202号跡（古墳）内にあり、H04-08 Gr. 内に位置する。北側を横切溝で破壊され、036、037号跡を切って構築される。覆土は暗褐色土でローム粒を若干含む。

遺構は 340×330 cm 前後の不整な隅丸方形を呈す。住居の軸は不明だが N—45°—W付近であろうか、壁は高さ 15 cm 程が残る。床は全体に堅い。主柱穴は P₁が擾乱内の他は、径 30～40 cm の円形で、4 本とも深さは 55 cm と一致する。配置は P₁—P₂間から順に 140 cm、160 cm、170 cm、205 cm と不定であるが、これは住居平面形に近い重みでもある。

炉（第36図）は床面中央やや P₁に寄っている。70×55 cm の椭円形で、10 cm の皿状の凹みで、火床は殆んど残らない。炉の北縁には深さ 13 cm の小穴がみられる。



第18図 032・033号跡実測図

遺物は少なく、覆土内に混在する状態である。

・035号跡（第20図）

調査区南端、I09 Gr. を中心に位置する。202号跡（古墳）墳丘下にあたる。覆土は 45 cm 程あり、1 層暗褐色土。2 層黒色土で炭化粒を若干含む。3 層暗褐色土でローム粒を若干含む。4 層黒色土。5 層褐色土でローム粒を多く含む。なお上面には暗褐色土（a・c 層）にはさまれた灰白色粘土層（b 層）がみられた。これは新しい時期の道路跡と考えられる。

遺構は 610×540 cm の整然とした隅丸長方形で、南・北壁はわずかに胴張り気味である。長軸の方向は N—3°—W を示す。壁は垂直に掘り込まれる。床面は四隅を除き全面的に堅く、凹凸が著しい。なお内側には 510×440 cm の隅丸長方形の拡張前の床面がみられ、その外側はわずかに段を残す。主柱穴は P₁ を除き 55×40 cm の楕円形を呈し、4 本とも深さ 65 cm のロート状となる。覆土は褐色素粒土である。その配置は P₁—P₂ 間から順に 250 cm、260 cm、230 cm、265 cm である。P₃ は長軸上（指標 0.5）にあり、径 35 cm、深さ 50 cm の大形で明らかに外方へ傾斜する。P₄ は南壁にくい込んで作られる。70×60 cm の方形で深さ 20 cm を測る、他に南壁両隅に浅い凹みなどがみられる。

炉（第36図）は中央北寄り（指標 0.75）に位置する。120×85 cm の浅い楕円形を呈し、縁辺には深さ 5~10 cm の小孔がある。火床は 8 cm 以上焼化する。

遺物は殆んどない。1 は北側から流れ込んだ状態で出土している。

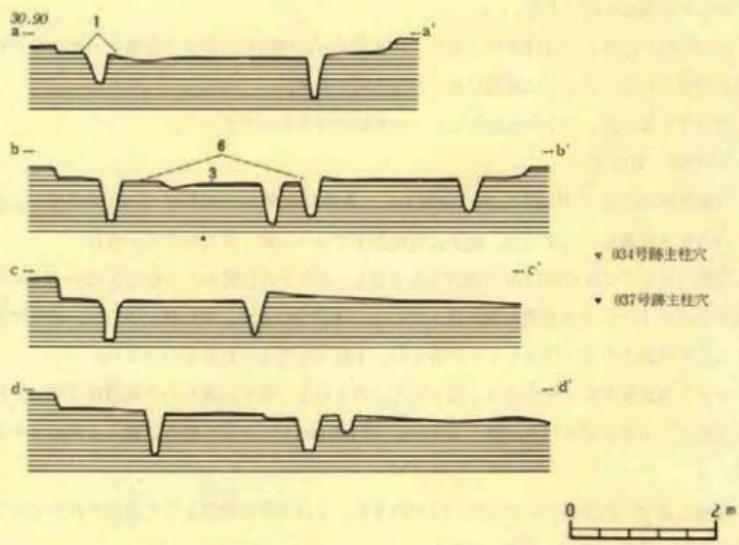
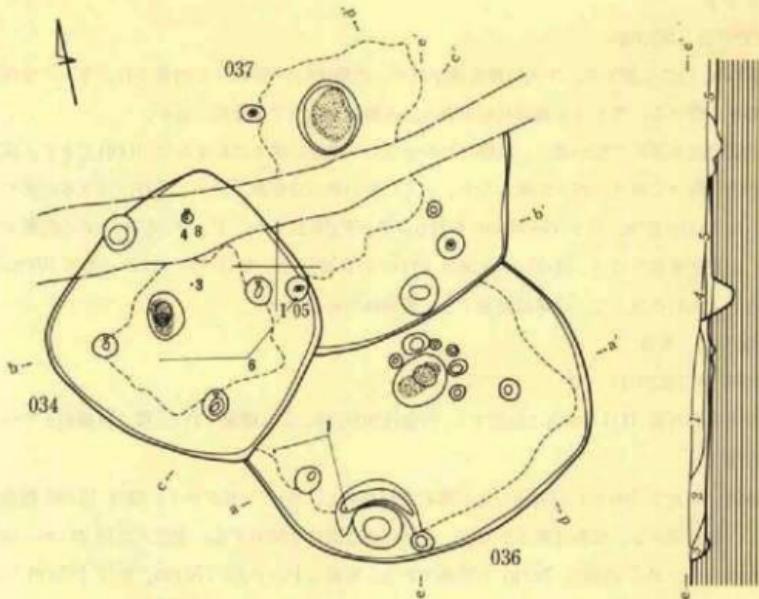
・036号跡（第19図）

同じく I05 Gr. 内に位置する。034・037号跡により北側は破壊される。覆土は 1 層暗褐色土でぼろぼろとして硬い。2 層暗褐色土でローム粒若干含む。3 層暗褐色土でローム粒を多く含みやや軟弱である。

遺構は東西軸で 465 cm の楕円形を呈し、N—70°—E を示す。壁は垂直に掘り込まれ、高さ 20 cm 程遺存する。床面は中央に向けてわずかに凹むが、全体に硬質で平坦である。主柱穴は P₁のみで径 30 cm、深さ 55 cm を測る。P₂ は西壁下中央にあり、深さ 40 cm で、外側に向けて傾斜する。南隅には幅 30 cm、高さ 7 cm の極めて堅い半月形の土堤に囲まれて P₄ がある。径 60 cm、深さ 30 cm で、中には黒色土を主とする土が自然堆積していた。

炉（第36図）床面中央よりやや東寄りにある。85×65 cm、深さ 12 cm の卵形、皿状の凹みで、火床は炉の中央に細長く形成される。炉の東縁を囲むように 6 個の凹みがみられる。大小の差はあるが、深さ 7~13 cm で、真黒色土がつまっていた。同じような例は 016 号跡にもある。

遺物は少ないが、1 が西壁下床面に接して出土し、本跡に近い時期の遺物である。



第19図 034・036・037号跡実測図

・037号跡（第19図）

I01 Gr. 内に位置する。中央に擾乱溝が走り、西側は034号跡により破壊され、さらに全体的に削平を受ける。覆土は4層暗褐色砂質土。5層暗褐色土で焼土粒を含む。

遺構は北半部分で壁がなく、規模はわからない。南壁の高さはわずかに10cmである。床面は中央に向けて盛り上がり気味となり、とくに炉の周辺は堅緻である。主柱穴は3本確認できた。径35cm前後、深さ45~50cmを測る。 P_2-P_3 間215cm、 P_3-P_4 間245cmの配置となる。南壁下東寄りには、径55cm、深さ20cmのP₅がある。炉は95×80cm、深さ10cmの橢円形、箱形の凹みで、火床は発達する。遺物は殆んどない。

・038号跡 欠番

・039号跡（第20図）

調査区南西部、H11 Gr. 内に位置する。西壁は202号跡により破壊される。覆土は褐色土でローム粒を含む。

遺構は南北で460cmの丸味のある隅丸方形を呈し、N-7°-Eを示す。壁は15cm程遺存するが軟弱である。床面は堅さがなく、全体に西に向けて傾斜する。主柱穴は径25cm、深さ40cmだが、P₂のみ深さ70cmと特異である。配置はP₁-P₃間170cm、他は185cmで、P₁の位置がずれている。P₅は軸線より東に大きくそれる。他にP₁付近に深さ30cmのビットがあるが所属は不明である。

炉（第36図）は床面のほぼ中央にある。70×50cmの橢円形の炉が2個重なった状況だが、新旧は認められない。ともに底面にわずかな火床を残す。

遺物は少ないが、炉中から出土した3は本跡に伴うものであろう。

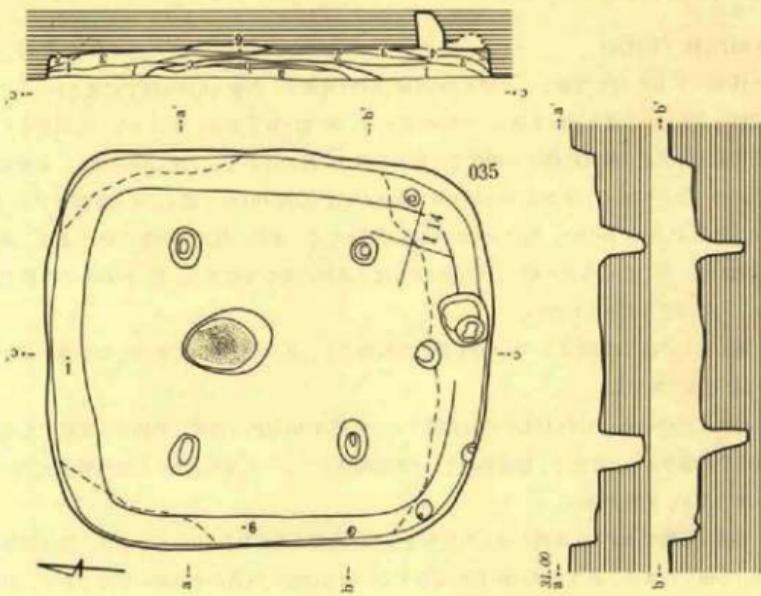
・040号跡（第21図）

調査区西端に近いH07 Gr. 内に位置する。調査の過程で、202号跡（古墳）周溝覆土上にかかる西半部を破壊してしまった。覆土は暗褐色土でローム粒、炭化粒を若干含む。

遺構は推定で320×360cmの横長方形を呈し、カマドの位置から主軸はN-35°-Eを示す。壁は東で高さ40cmあり垂直に掘り込んでいる。床面には焼土、炭化材がみられ、被災跡と思われる。南壁直下中央に浅いビットがあるが、主柱穴と考えられるものはない。

カマドは北壁中央に壁を大きく掘り込んで作られる。削平が著しいため遺存は悪い。袖は灰白色粘土で山砂が混入する。長さ100cm、幅120cmで、火床を壁外に置く大形のカマドである。

遺物はカマド燃焼部中央に支脚（3）が出土し、1は天井部補強として使用されたものである。東壁直下には礎（4、5）が検出された。



第20圖 035・039號跡實測圖

住居跡

・041号跡（第21図）

H 03・07 Gr. 内に位置し、北壁を202号跡（古墳）周溝で、西壁を040号跡で破壊される。

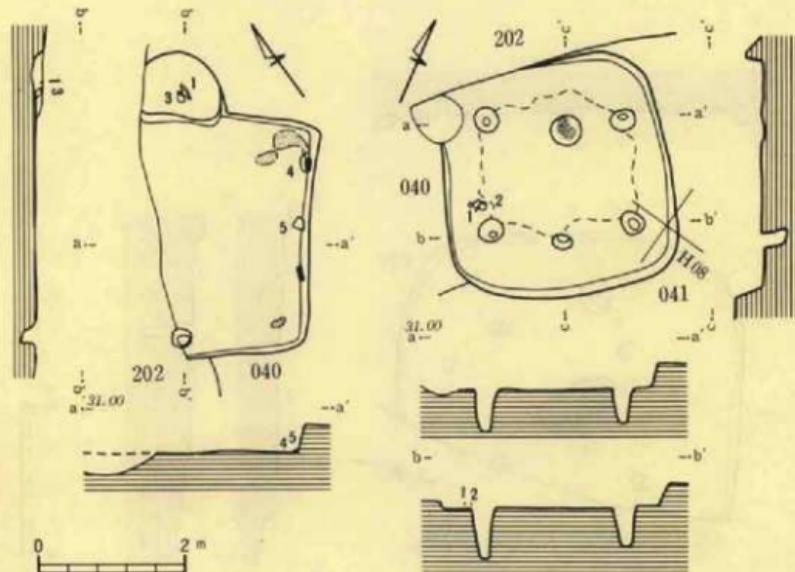
遺構は310 cm の隅丸長方形を呈し、炉の位置から、N-22°-Wを示す。壁はかなり傾斜をもち軟弱である。床面は柱穴内側のみ硬質で、東から8 cm 程の差をもって西に傾斜する。主柱穴はいずれも径30 cm で、深さは50~55 cm であるが、P₃のみ70 cm を測る。その配置はP₁—P₂間、P₂—P₄間が150 cm 、他は190 cm の長方形となる。南側の柱穴間中央にP₅がある。深さ32 cm で、明らかに外方へ傾く。炉（第36図）は北側柱穴間中央にあり、径40 cm の円形で浅い。火床は殆んどみられない。

遺物はP₃付近に床面より7~8 cm 浮いた状態で1、2がまとまって出土したが他にはない。

・042号跡（第22図）

調査区西端中央、D10・11 Gr. 内に位置する。南壁は201号跡（古墳）周溝で、北壁は大木の根跡で破壊される。覆土は1層暗褐色土。2層暗褐色土でローム塊を含む。3層黒褐色土でローム塊を含み、粘性が強い。

遺構は短軸で450 cm を測る隅丸長方形を呈し、長軸の方向はN-10°-Eを示す。壁は傾斜をもって掘り込まれ、高さは45 cm 程が遺存する。床面は柱穴内側がやや硬い程度であり、中央



第21図 040・041号跡実測図

に向けてわずかに凹むようである。主柱穴は径 25~35 cm と小形であるが、深さは 70 cm 前後を測る。配置は P₁~P₃間 260 cm の他は 245 cm で、ほぼ方形となる。南東隅近くに深さ 37 cm のビットがあるが所属は不明である。

炉（第36図）柱穴を結ぶ線上にある。95×85 cm の浅い楕円形で、底面中央はさらに細長い凹みがある。火床は 7~8 cm 燥化していた。

遺物は覆土中からわずかに出土した他、東壁下床面に数点の破片がある。

• 043号跡（第22図）

D14・15 Gr. 内に位置するが、201・042号跡により南壁を残して殆んど破壊される。覆土は暗褐色土で粘性が強い。

遺構は、北壁の一部が遺存するため、長軸で約 450 cm を測ることができる。その方向は N-15°-W を示す。壁は南西隅で高さ 40 cm が遺存する。床面は不明だが、かなり凹凸があったと思われる。主柱穴は一応 4 本確認できた。P₁は深さ 40 cm、他は推定の深さが、P₁ 45 cm, P₂ 65 cm, P₃ 55 cm と考える。配置は P₁-P₂間から順に 245 cm, 220 cm, 255 cm, 180 cm と一定しない。P₄は長軸線上（指標 0.57）にあり、深さ 30 cm で垂直に掘り込まれる。P₅は南壁下にあるが、深さはわずか 10 cm の凹みである。炉は042号跡貼床下から発見された。火床のみ遺存する。遺物は殆んどない。

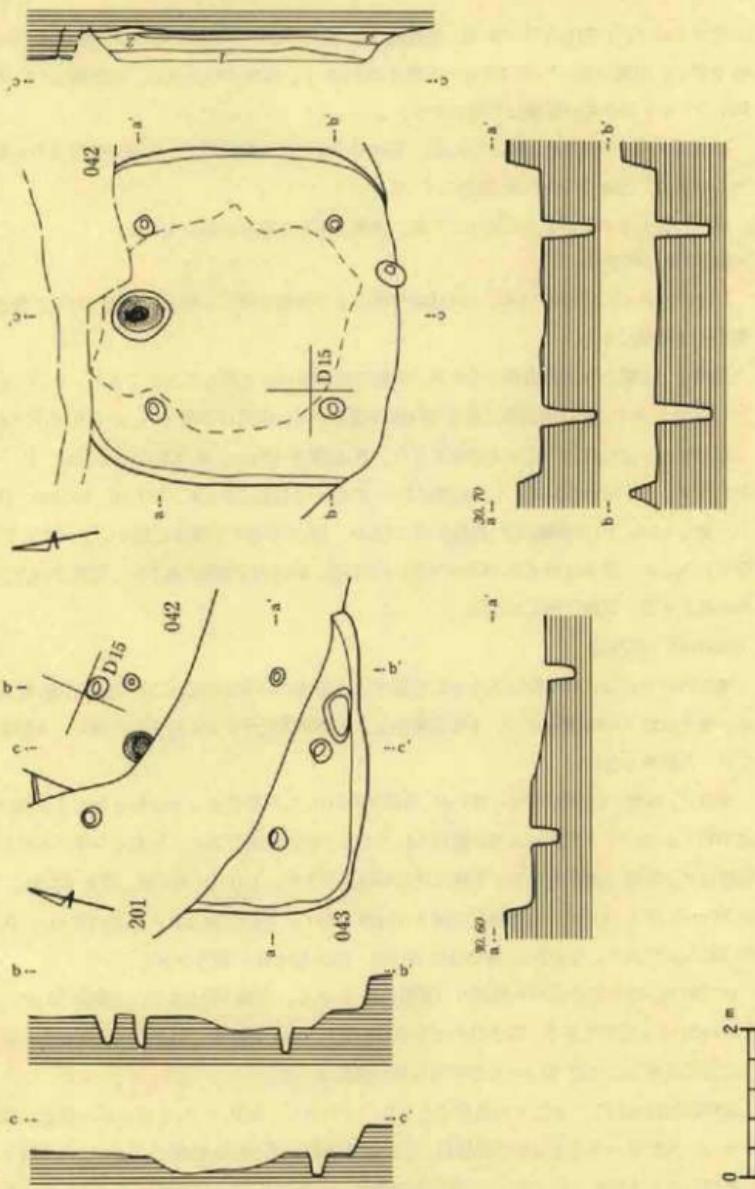
• 044号跡（第23図）

調査区中央付近、D07 Gr. を中心に位置する。遺構の中央を南北に201号跡（古墳）周溝が走る。覆土は約 25 cm 遺存する。1 層暗褐色土、2 層黒褐色土で炭化粒を若干含む、3 層褐色土でローム粒多く含む。

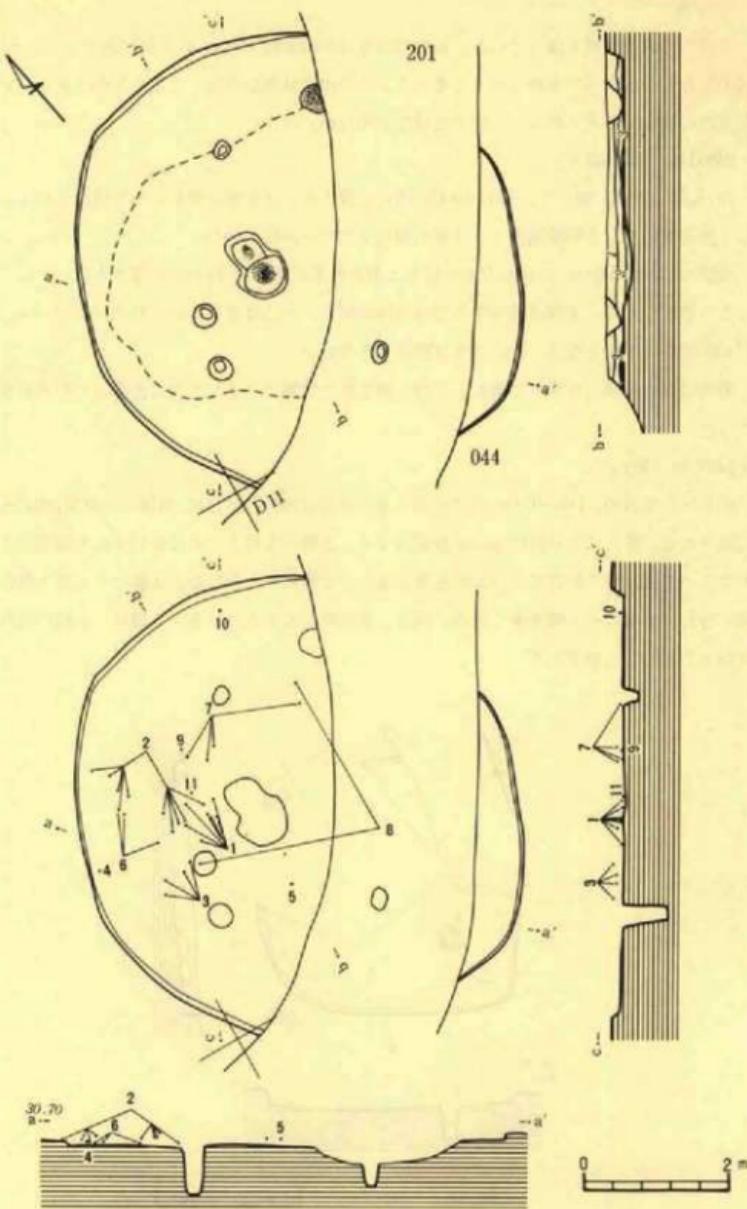
遺構は、東壁の遺存がかなり悪いが、615×600 cm の円形に近い平面形となろう。軸の方向は不明である。ソフトローム内に構築されたため、壁は軟弱である。床面も全体に不良だが、破線内は土間様の硬さを残す。主柱穴は 3 本確認できた。P₁は径 30 cm、深さ 62 cm、P₂は径 23 cm、深さ 24 cm、P₃は推定の深さ 53 cm を測る。その配置は P₂-P₃間 220 cm, P₃-P₄間 295 cm である。なお P₅ 北側には径 30 cm、深さ 65 cm の柱穴がある。

炉（第37図）は床面中央やや西寄り（指標 0.8）にある。長軸 100 cm で、南側幅 65 cm、北側幅 45 cm の不整形である。深さはわずか 5 cm 程度で、南・北部分にわかれて火床がみられる。この他に北東部には径 40 cm の範囲に火床が検出された。

遺物は床面に接してかなりの量が出土した。その殆んどは P₁-P₄を結ぶ線と西壁の間に集中する。大形壺のうち 1 は炉の左脇から直立のまま押し潰された状態で、2 はこれを覆うように横倒しのまま潰れて約 100 cm の範囲に四散する。3 は P₅付近に横倒しで出土した。壺（6・7）はこれらの間にやはり押し潰されていた。小形壺（4）は西壁に寄り掛って、5 は床面より



第22回 042・043号跡実測図



第23図 044号跡実測図

住居跡

やや浮いて直立状態を保っていた。石皿様の9は戸の北側80cmの床面に密着して出土した。図示したものはすべて本跡に伴うと考える。この出土状態からは、火災などの災害を受けて廃棄された場合が考えられるが、焼土堆積など明らかではない。

・045号跡（第24図）

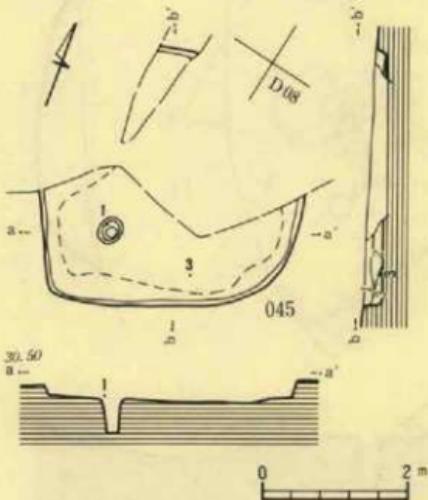
201号跡（古墳）墳丘下、D07・08 Gr. 内に位置する。北半部は擾乱により破壊される。覆土は1層黒褐色土、2層暗褐色土、3層暗褐色土でローム粒を含む。

遺構は350×350cmの隅丸方形を呈すと思われる。南壁で25cmの高さを有し、しっかりととした壁面である。床面は遺存する部分全体が堅く、凹凸は余りない。柱穴は径35cm、深さ47cmでロート状となる。他の3本は確認できない。

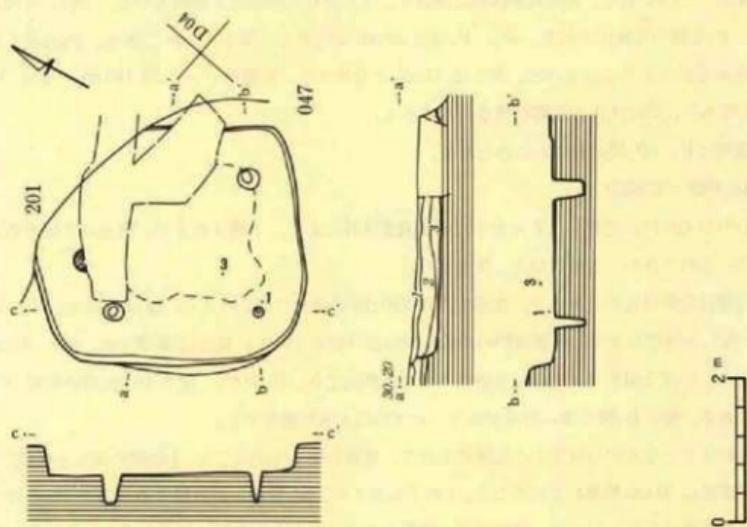
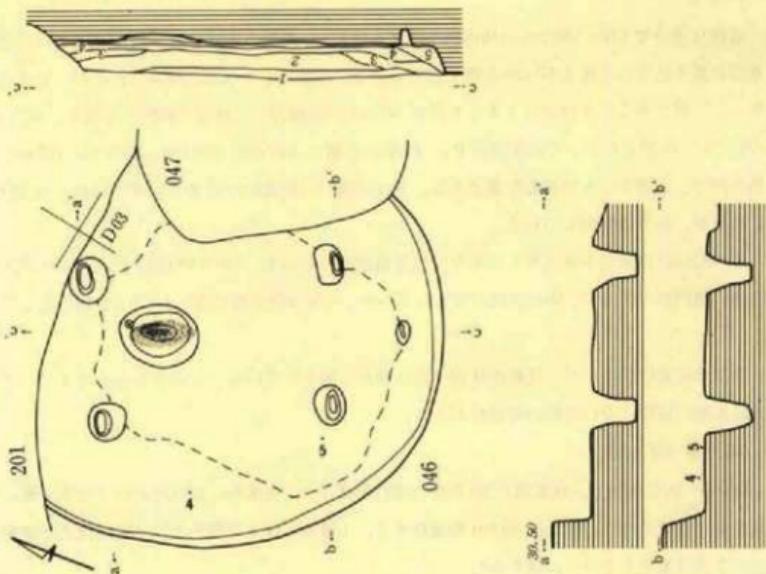
遺物は壺の頸部が柱穴上に横転して押し潰された状態で、また床面に密着して有角石斧が出土した。

・046号跡（第25図）

調査区北部西端、D02・03 Gr. 内に位置する。北部は201号跡（古墳）周溝に、東部は047号跡で破壊される。覆土は部分的に50cm程遺存する。1層～5層まであるがいずれも暗褐色土を主とする。1層はやや砂質でローム粒を多く含む。2層黒色土を含む。3層ローム粒と黑色土を多く含む。4層ローム塊を多く含み、焼土、炭化粒が若干みられる。5層ローム粒の流れ込みや浮き上がった土層である。



第24図 045号跡実測図



第25圖 046・047號跡尖測圖

遺構は推定で 620×580 cm の楕円形を呈すと思われ、長軸の方向は N-21°-W を示す。壁は垂直に掘り込まれ、高さ 60 cm を残す部分もある。床面は小さな凹凸がみられるが、全体的に堅く、平坦である。主柱穴は 4 本とも長さ 50 cm の短軸方向に伸びる楕円形を呈し、深さ 65 cm でロート状となる。その配置は P₁-P₂間から順に 340 cm, 200 cm, 320 cm, 195 cm の長方形で、遺跡中でも特異な配置である。P₃は長軸上（指標 0.7）にあり、深さはわずか 20 cm であるが、外方に傾斜している。

炉（第37図）は床面中央北寄りにあり、推定指標 0.73 を示す。110×90 cm、深さ 8 cm の比較的浅い楕円形の凹みで、中には灰がつまっていた。火床は底全面にみられ、5 cm 程焼化している。

遺物は非常に少ないが、比較的床面に近い層から出土している。このうちとくに 4・5・7・8 は本跡の廃棄に近い時期の可能性がある。

・047号跡（第25図）

D03 Gr. 内に位置し、北東隅を201号跡（古墳）周溝に、中央部から東壁にかけて大木の根の擾乱を受け破壊される。覆土は 35 cm 程遺存する。1 層はぼろぼろの褐色土。2 層褐色土と暗褐色土。3 層暗褐色土でローム塊を含む。

遺構は 370×340 cm の隅丸長方形を呈し、長軸の方向は N-30°-W を示す。壁は垂直に掘り込まれ、凹凸がある。床面は全体的に硬質で、とくに柱穴内側は土間様となる。主柱穴は擾乱内の P₁を除いて検出された。P₂, P₄は径 30 cm の円形で、深さ 42 cm である。P₃は杭を打ち込んだ痕のように小さいが、深さは 42 cm と合致する。配置は P₂-P₃間 185 cm、他は 200 cm である。炉は火床の北端が残るのみである。

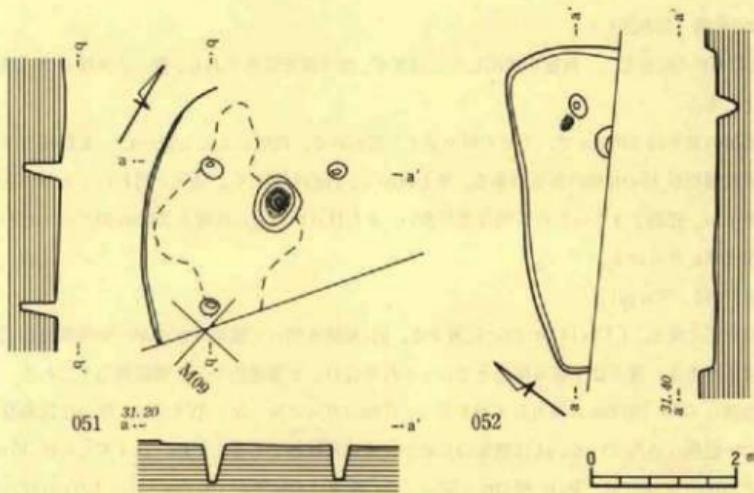
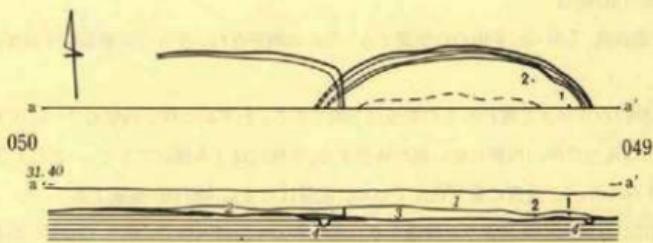
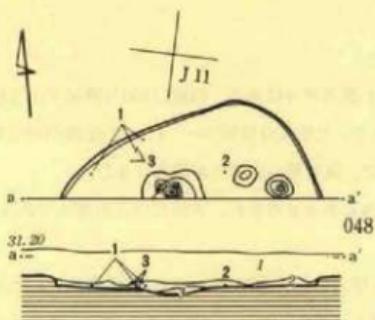
遺物は P₂-P₃間にわずかにみられる。

・048号跡（第26図）

J10-11 Gr. 内に位置し、その大半は南側調査区外にある。1 層は表土で、覆土は 2 層黒色土でローム粒を含む、3 層は焼土、灰を含む。

遺構は北壁付近だけあるが、推定で東西 350 cm の隅丸方形を考える。壁は軟弱で、高さ 10 cm 程しか遺存しない。床面は炉の周辺に堅い部分がみられる。柱穴は径 30 cm、深さ 70 cm を測る。炉は 2 個ある。主となる炉は半分のみ検出でき、径 80 cm、深さ 10 cm の不整形の凹みである。他に P₁横に浅い凹みがあり、わずかに火床が遺存する。

遺物は主となる炉の周辺から北壁にかけて、床面に接して出土した。1 は壁に接して横転し、その底部は 70 cm 程離れて出土した。1 の下から 3 が、2 も横倒しの状態であった。これらはいずれも完形にはならないが、調査区外に残存するはずであり、本跡に伴うものとして間違いないだろう。



第26圖 048~052號踏查測圖

• 049号跡（第26図）

J01 Gr. 内に位置し、北壁を除き殆んどが調査区外にある。西壁は050号跡床下から検出された。1層は表土、黒色土の3層が覆土である。北壁部分は幅10~14 cm の壁溝がめぐり、深さは平均10 cm 程である。床面はやや軟弱で、硬質面の北縁のみ確認できた。

遺物は殆んどないが、1の残存部分は区外にあると思われ、本跡に伴う可能性である。

• 050号跡（第26図）

I12 Gr. 内に位置するが、北壁をわずかに検出したに過ぎない。049号跡の壁溝上に貼床を作っているため、新旧関係が明らかである。覆土は黒色土でローム粒を多く含む。遺存する壁は3 cm 程にすぎず、西側は削平されて不明となる。遺物はない。

• 051号跡（第26図）

調査区南西隅、L08 Gr. を中心に位置する。殆んど削平され、さらに東南半部は調査区外となる。

遺構は楕円形を呈すと思われるが規模は不明である。わずかに残る西壁も3~5 cm 程の高さに過ぎない。床面は炉の西側に堅い面が遺存する。主柱穴は3本確認できた。いずれも径25~30 cm、深さ50 cm で、垂直に掘り込んでいる。配置はともに180 cm 前後である。

炉（第37図）は床面中央北寄りに位置する。85×75 cm の楕円形で、深さ12 cm の皿状の凹みである。火床は底面に細長く遺存するが、余り良好でない。炉の北縁には深さ10 cm 程の小孔がみられる。

• 052号跡（第26図）

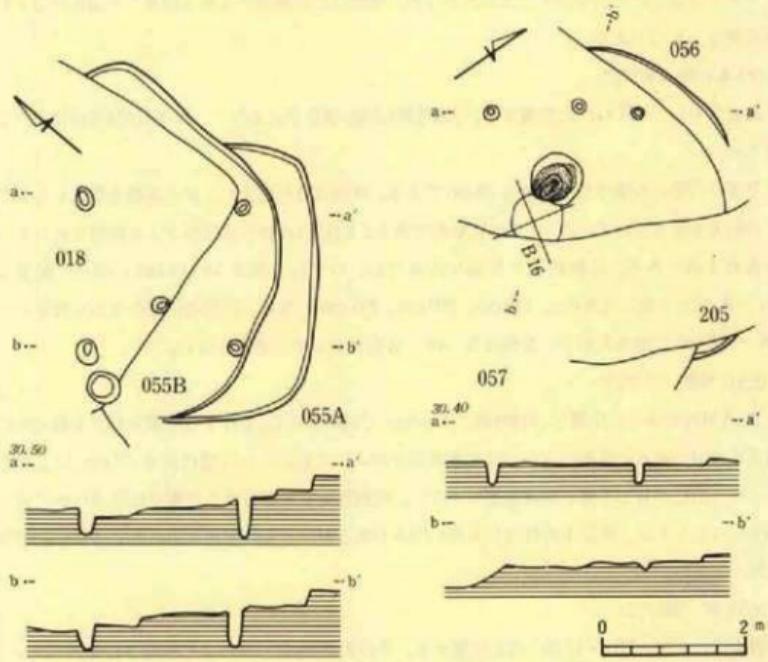
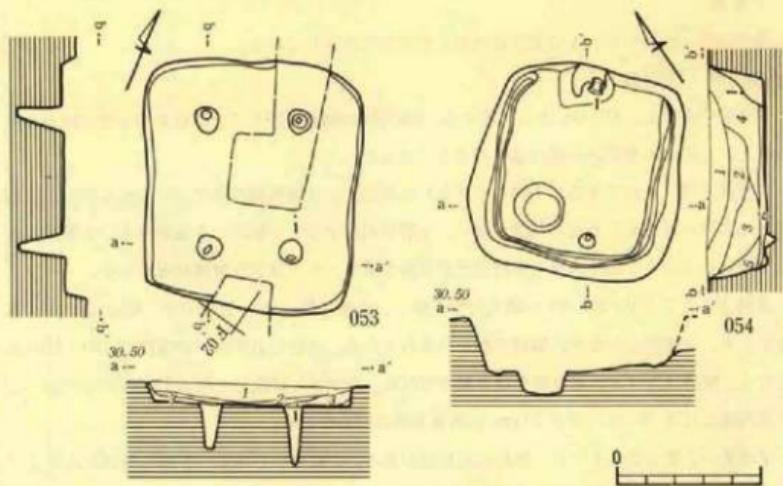
L12 Gr. 内に位置し、西壁を検出したに過ぎず、他は調査区外である、覆土は赤味のある暗褐色土である。

西壁の長さは430 cm で、不整方形を呈すと思われる。西壁によるとN-45°-E前後を示す。壁は軟弱だが15 cm 程の高さがある。床も軟かく、凹凸も著しい。柱穴と思われるものが区端にあるが、完掘できいため不明な点が多い。また柱穴の周辺には深さ25 cm のビットとわずかな火床がみられる。

• 053号跡（第27図）

調査区北東部、C13・14 Gr. 内に位置する。011号跡を切って構築されるが、中央部分を南北に擾乱が走る。覆土は1層黒褐色土でローム粒を含む、2層黒色土、3層暗褐色土である。

遺構は325×290 cm の楕円長方形を呈し、長軸の方向はN-24°-Wを示す。壁はほぼ垂直に30 cm 程掘り込んでいる。床は擾乱のためか、全体に軟弱である。主柱穴は4本とも径30 cm、深さ60 cm 前後だが、P₃は80 cm と深い。その配置は長軸側が190 cm、他は120 cm 前後で長方形となる。炉やP₃は恐らく擾乱内に位置したであろう。



第27図 053~056号跡実測図

住居跡

遺物は殆んどないが、1の壺片は床面に密着して出土している。

・054号跡（第27図）

調査区中央付近、E02 Gr. 内に位置する。018号跡の調査に際して、これを切る住居跡が発見された。このため東壁の一部は掘り過ぎてしまった。

覆土は6層に大別できる。1層さらさらした黒色土。2層黒褐色土でローム粒を含む。3層黒色土でローム粒を若干含み粘性が強い。4層黒褐色土でやや軟弱。5層黒色土。6層黒褐色土で堅い。このように黒色土と黒褐色土が互層を成し、かつ急速な堆積状況を示す。

遺構は上面で220×200 cm の隅丸方形を呈し、主軸はN—45°—Eを示す。壁は55 cm の高さをもち、全体的にかなりの傾斜で掘り込まれている。このため床面での規模は180×170 cm となる。壁溝はカマドのある壁を除き認められる。カマドと対面して深さ12 cm の小穴が、また南西隅には径50 cm、深さ30 cm の所属不明の凹みがある。

東北壁の北寄りにはカマドと思われる施設がある。これはいわゆるヘドロと呼ばれる田土で作られた40×50 cm のもので、壁に密着している。焼土は全く認められないが、精査の結果、カマドに近似した形状を示すことがわかった。遺物はこの施設の上から出土した皿の他は、時期の異なるものである。

・055A号跡（第27図）

調査区中央、E03 Gr. に位置する。206号跡（古墳）墳丘下にあたり、大半は018号跡により破壊される。

遺構は南壁のみ遺存し、高さは20 cm である。床面はB号跡上に、ローム塊を混入した黒色土の貼床を敷きつめているが、全体に軟弱である。主柱穴は018号跡床面下より検出されたものを含め4本である。比較的小さな掘り込みだが、いずれも深さ55~60 cm と深い。配置はP₁—P₂間から順に220 cm、190 cm、200 cm、205 cm となる。柱穴の位置などから推定して、400×380 cm の隅丸方形で、長軸はN—40°—W前後を示す。遺物はない。

・055B号跡（第27図）

055A号跡貼床下に位置し、018号跡により殆んど破壊される。遺存する南壁もわずか数cmに過ぎず軟弱である。原型に近いのは北東隅部分のみでこれによれば壁の高さ20 cm 以上である。床は凹凸が著しく堅い面は確認できない。南西隅近くと思われる位置には径45 cm、深さ53 cm のピットが、床面中央付近にも浅い凹みがあるが、ともに所属は明らかではない。遺物は殆んどない。

・056号跡（第27図）

調査区北東部、B11・12 Gr. 内に位置する。その大半は057号跡により破壊される。

遺構の規模、平面形など不明である。壁は北側の一部が遺存するが高さ10 cm にも満たない

い。床面は057号跡と同一面であるため、不明である。主柱穴と考えられるものは2本である。ともに小形で、深さは25cmと浅い。その覆土はローム塊を含む褐色土である。

炉(第37図)は057号跡の炉と重複している。径70cmの円形で、底面中央には橢円形の凹みがある。火床は発達している。炉の位置は柱穴の配置から推定して、床面のはば中央と考えられる。

・057号跡(第28図)

調査区北東部、B11・12・15・16 Gr. 内に位置する。遺構の中央を205号跡(古墳)周溝が走り、同じく南西隅の上面を206号跡が走る。また北西部で027号跡を、北東部で056号跡を切って構築された。

覆土は約35cm程遺存する。1層黒色土。1層より黒味がかる。2層褐色土でローム粒を若干含む。3層褐色土でローム塊を多く含む。5層黒色土でローム粒多く含む。

遺構は700×600cmの四辺ともやや脇の張り出す隅丸長方形を呈し、長軸の方向はN—25°—Wを示す。壁は30~40cm、垂直に掘り込まれる。床面は全体的に硬質で、土間様の堅面の拡がりは柱穴内側をはるかに超えてみられる。主柱穴は4本とも確認できた。いずれも上面径45~50cmの円形を程すが、底面では長軸で25cmの橢円形となる。深さは65×70cmで南側の2本はロート状に掘り込まれる。その配置はP₁がわずかに内側へずれるためか、P₁～P₂間から順に290cm、350cm、320cm、320cmの不整な台形となる。P₃は長軸上(指數0.59)にあり深さ22cmと浅い。南壁直下にわずかに離れて、径45cm、深さ10cm程のP₄がある。

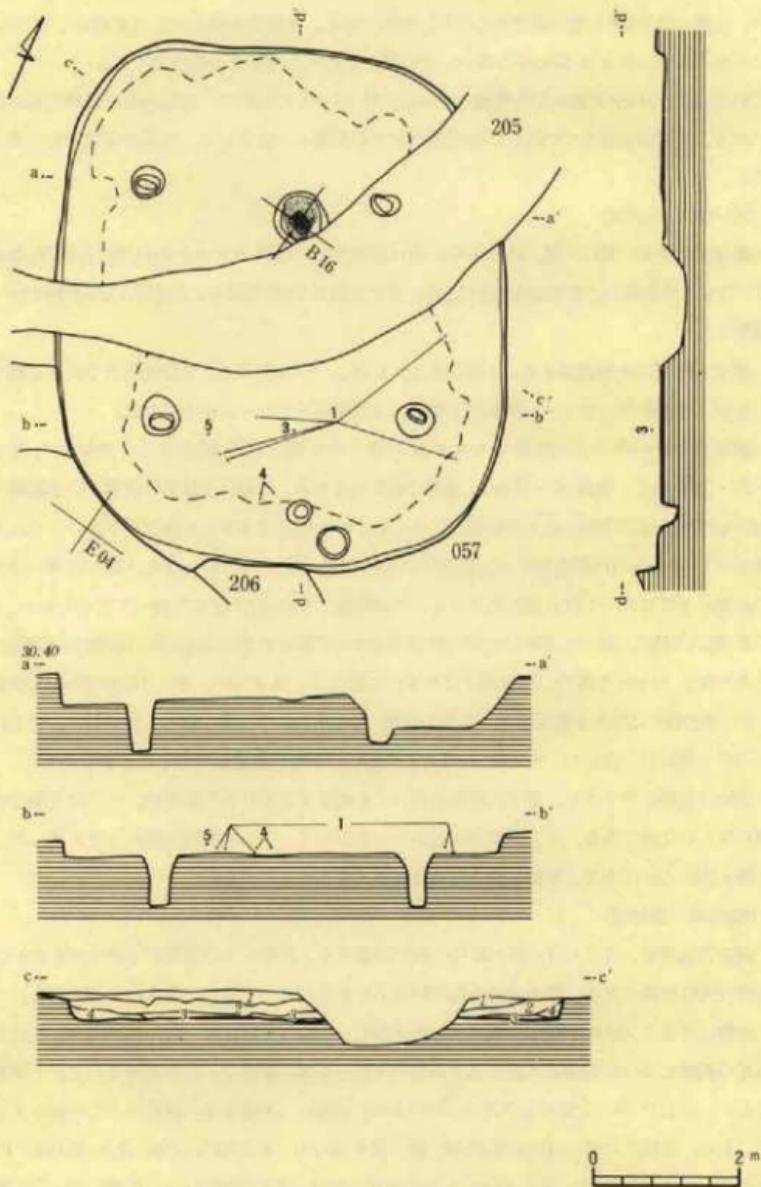
炉(第37図)は柱穴を結ぶ線上からやや内側(指數0.68)で、東に寄って作られる。径65cmの円形と思われ、浅いが、火床は5~7cm焼化し、かなり発達していることがわかる。

遺物は規模の大きさや、覆土の遺存が良いにも拘らずあまりみられない。とくに北側では皆無に等しい状態である。1は南側の床面からやや浮いて、3mの範囲に拡がって出土した。他も覆土内からの出土で、本跡に伴うものはないと考える。

・058号跡(第29図)

調査区北西端、A02・03・06・07 Gr. 内に位置する。北壁および遺構の中央上面を203・204号跡(古墳)周溝が走る。覆土は暗褐色の砂質土を主として、下層では焼土粒を若干含む。

遺構は推定で410×370cmの隅丸長方形を呈し、長軸の方向はN—38°—Wを示す。壁は遺存の良い西壁で40cm程垂直に掘り込まれる。床面は全体に硬質で、柱穴内側はとくに土間様となる。しかしP₁から北隅にかけては10~15cmも凹み、床面全体の傾斜もここに集中するようである。主柱穴はP₁、P₂が径20cm弱、深さ50cm、P₃が径25cm、深さ55cm、P₄が長さ35cmの橢円形で、深さ40cmとまちまちである。その配置はP₁—P₂間、P₃—P₄間が170cm、他は180cmのはば方形となる。P₃は長軸上(指數0.64)にあり、わずか15cmと浅



第28図 057号跡実測図

いが、外方へ傾斜する特徴を有す。

炉(第37図)は柱穴を結ぶ線上わずかに内側にある。85×60 cm の梢円形で、底面中央には梢鏡状にさらに凹みがみられる。掘り込み全体は浅いが、火床はかなり発達している。炉の北縁には深さ 7 cm の凹みがある。

遺物は比較的多く出土した。これらはいずれも床面に近い位置を保ち、このうち図示した殆んどは床面密着の状態である。炉の北西側には 5 が横倒しのまま押し潰され、その中からは 7 が検出された。またこれらの周辺から 2・3 が出土し、12 は水平に置かれていた。8 は恐らく直立のまま潰れたと思われる。4 は炉内から出土のものに、70~80 cm 離れた位置の破片が接合する。また南壁から転げ落ちた状態で 9・10 が出土した。これらはいずれも本跡に伴うと考えて大過なからう。

・ 059 A 号跡 (第29図)

調査区北西端に近く、A11 Gr. 内の 059 B 号跡南東隅部覆土内に炉の火床と思われる部分が検出された。ただし、上面の削平等のため、他に施設は見当たらず、住居跡とはしがたい。

・ 059 B 号跡 (第29図)

A06・07 Gr. 内の 204 号跡(古墳)墳丘下にある。覆土は褐色土である。

遺構は 340×340 cm の丸味の強い隅丸方形を呈し、炉の位置からみて、ほぼ N—S を示す。壁はかなり傾斜をもち、軟弱である。床面は柱穴内側に限って堅面が残り、全体には中央が盛り上がり気味となる。また C 号跡の覆土上に 5~7 cm 程のローム、焼土粒を多く含んだ暗褐色土の貼床を施している。主柱穴は P₁・P₂ が径 40 cm、他は径 25 cm 程で、深さはいずれも 30 cm 程である。その配置は P₁—P₂ 間から順に 150 cm、165 cm、160 cm、180 cm と一定しない。P₃ は長軸上(指数 0.46)にあり、深さはわずか 18 cm しかない。炉は柱穴を結ぶ線上の中央(指数 0.5)にある。55×45 cm の卵形で浅いが、火床はかなり発達していた。

遺物は稀少で、唯一東壁下から出土した 1 が、本跡に近い時期のものであろう。

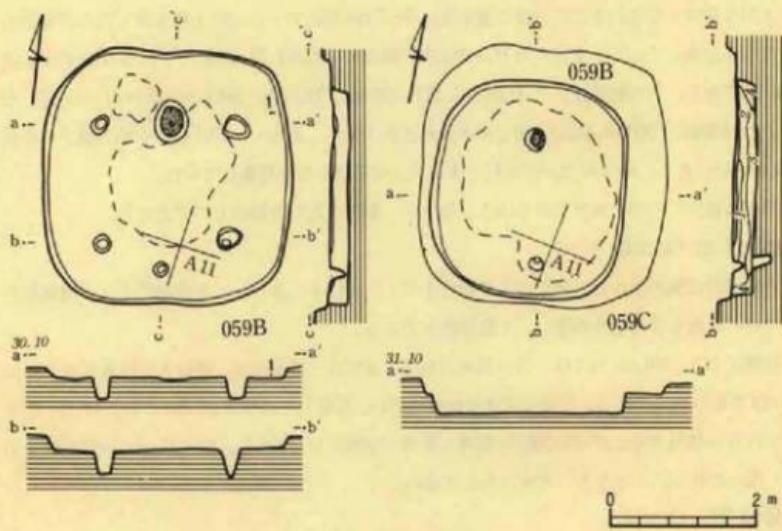
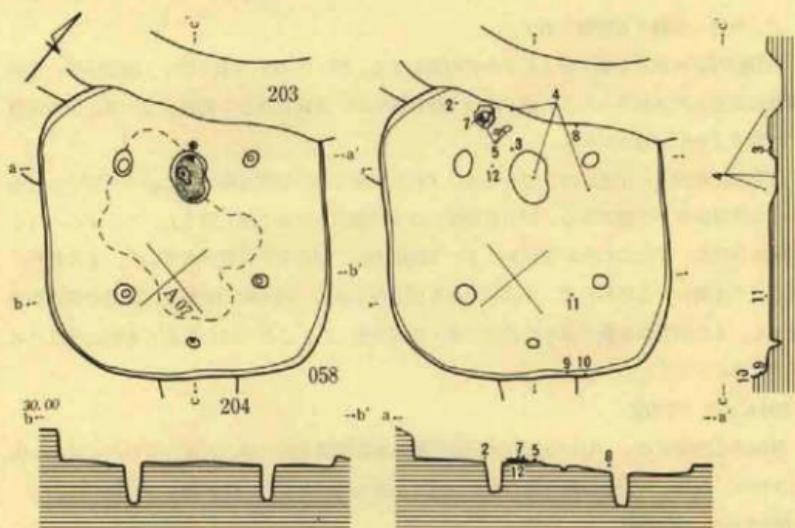
・ 059 C 号跡 (第29図)

B 号跡内に検出された。覆土は 1 層褐色土でローム粒多く含む。2 層黒褐色土。3 層黒褐色土でローム塊を含み粘性が強い。4 層黑色土である。

遺構は 275×250 cm の丸味の強い隅丸方形で、ほぼ N—S を示す。壁は A 号跡床面をさらに 25 cm 程掘り込んでいる。床面は全体に比較的堅い。長軸上には深さ 25 cm の P₃ があり、明らかに外方へ傾斜する。炉(第37図)は北寄り中央(指数 0.5)にある。43×32 cm の梢円形を呈し、浅い皿状の凹みとなる。火床は殆んどない。

・ 060 A 号跡 (第30図)

調査区南西部、H14・15 Gr. 内に位置する。202 号跡(古墳)周溝を切って構築されるが周溝調



第29圖 058・059號跡実測図

査の際一部を破壊してしまった。覆土は1層黒色土。2層黒褐色土。3層黒褐色土でローム粒を含む。4層褐色土である。

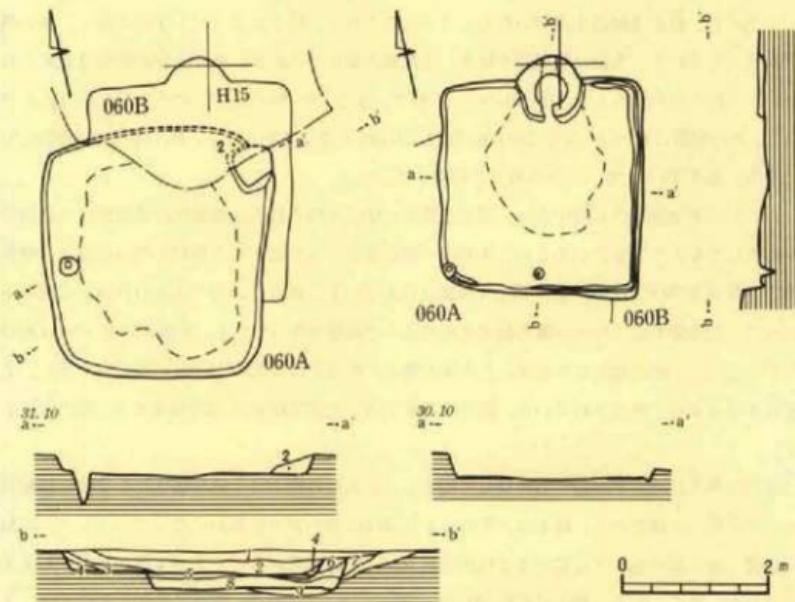
遺構は320×290cmの不整な隅丸方形を呈し、長軸の方向はN—11°—Eを示す。壁は20~25cm遺存し、やや傾斜をもって掘り込まれる。床面は中央部分にはB号跡の覆土上に作られた貼床(5層でローム塊と粘土)がありこの部分はわずかに凹みとなる。西壁下中央には深さ42cmのピットがある。

北東隔壁を利用してカマドが作られる。長、幅とも60cm前後で、黄灰色粘土が構築材である。半分程を破壊してしまったため構造は不明だが、壁を切り込んでいないようである。カマドの左脇には、流れ込んだ状態で、完形の坯(2)が出土した。

・060B号跡（第30図）

同じく202号跡周溝内にある。その上面は調査に際して削平してしまっている。覆土は6層黒色土。7層黒色土でローム粒を多く含む。8層黒褐色土とロームで硬い。

遺構は1辺280cmの方形を呈し、カマドの位置から、主軸はN—10°—Eを示す。壁は推定で50cm程掘り込んでいたと思われる。東～南壁にかけては直下に壁溝がある。「V」字形に



第30図 060号跡実測図

掘られ、10 cm 程の深さがある。床面は中央から東側には古墳周溝底面を埋め戻したローム塊主体の貼床(9層)がみられ、カマドを中心に堅い面が遺存する。カマドに対面して南壁下に径15 cm、深さ 16 cm の小穴が、また南西隅には深さ 7 cm の凹みがある。

北壁中央にはカマドがある。良質の黄灰色粘土を主構築材とし、壁を円形に大きく掘り抜いて作られる。現状で長、幅とも 90 cm を測る。袖の内壁や火床はかなり発達していた。燃焼部は長 40 cm、幅 30 cm で、両袖とも基部での幅は 30 cm である。

・061号跡（第31図）

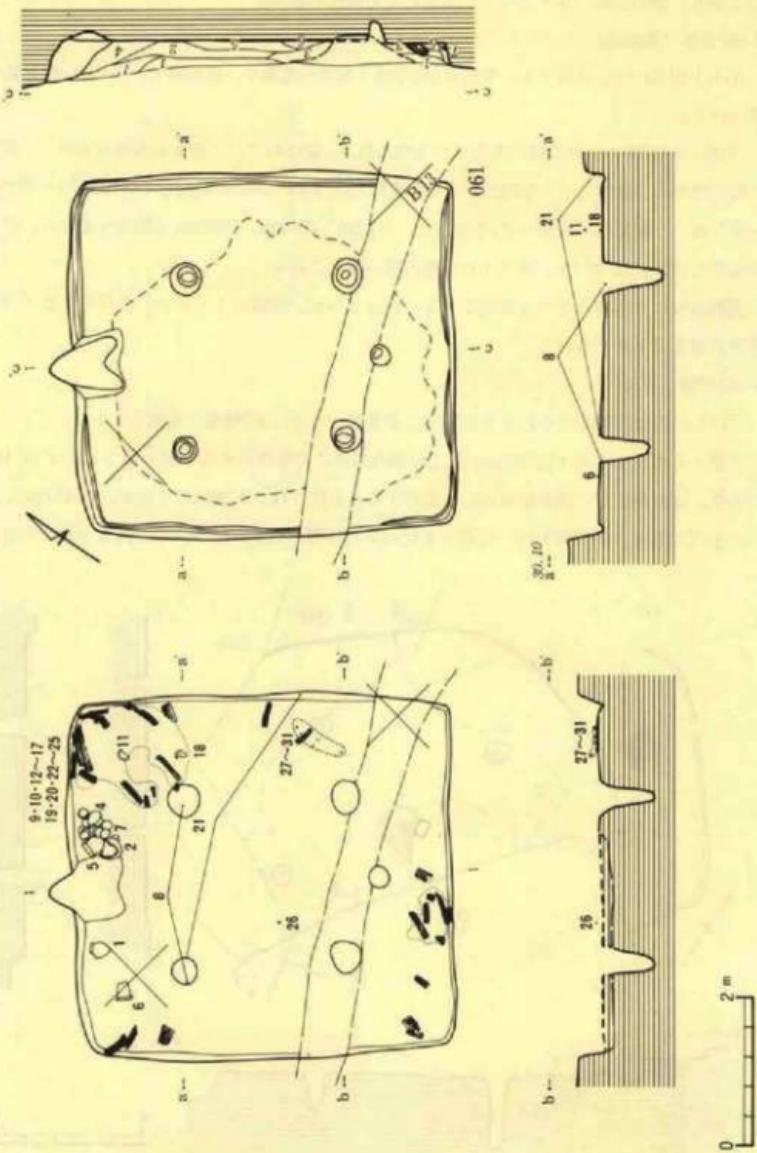
調査区北端付近のA12・16 Gr. 内に位置する。東側で062、063号跡を切って構築され、南側の一部は東、西に走る根切溝で破壊される。

覆土は約 40 cm 程遺存する。1 層黒色土。1 層粘土を若干含む。2 層黒色土で、ローム粒、焼土粒を多く含む。3 層暗褐色土でローム粒を多く含む。4 層黒色土で粘土を多く含む。5 層黒色土で炭化粒を多く含む。6 層焼土・ロームの堆積。7 層褐色土と炭化材である。1 層を除き、人為的な土捨の投棄と考えられる。これとともに床面からは多くの炭化材、焼土、わら灰などが検出された。とくに北隅や、南壁下にこれらが多い。ともに火災の痕跡である。

遺構は 520×490 cm の方形で、長軸の方向は N-35°-W を示す。壁は 40 cm 程ほぼ垂直に掘り込まれ、壁面は緩の小溝がいたるところにみられる。壁下には「V」字形に深く、狭い壁溝が全周している。床面は壁周辺を除き、土間様の堅面が拡がり、余り火災の影響は認められない。主柱穴はいずれも径 40~50 cm の円形で、深さ 70~80 cm で、ロート状に掘り込んでいる。その配置は P₁~P₄間で 230 cm、他は 220 cm とほぼ方形となる。P₁は長軸上(指数 0.3)にあり、深さ 25 cm で、やはり外方に傾斜する。

カマド（第38図）は北壁中央に、壁を三角形に切って作られる。構築材は黄灰色粘土に山砂を混入したもので、粘性があるが、天井の一部にはロームを混ぜた不良材も用いられる。構築の際、床面を 90×75 cm、深さ 15 cm 程掘り込んでいる。袖はこの掘り込みの斜面から積み上げられ、燃焼部下にはローム塊と粘土を埋め込んで基礎を作っている。燃焼部は径 45 cm 程の円形に近く、下面にはかなり発達した火床が残る。煙道入口は 35×15 cm の梢円形を呈し、上部は部厚な天井で保護されている。煙道は下部で 55°、上部で 75° の上昇角度をもち、煙出口は小さい。

遺物の多くはカマド右脇から一括して出土した。大形の甕(2)は上部が壊された状態で横転し、その奥に甕(5)が横たわる。鉢(4)は、それより 30 cm 程右寄りに斜めになって出土した。壺 14 個は甕と鉢の間に殆んど正位のまま検出されたが、その状態からして 3~4 個が重なったまま、埋没したと考えられる。甕(1)は左脇 30 cm の所に、さらに 30 cm 離れて甕(6)が横転する。また、東壁南寄りには床面に密着して土製勾玉が 5 個出土した。これらは明らかに本跡に伴うも



第31図 061号跡実測図

住居跡

のであり、他の土器（18・26など）も加わる可能性がある。

・062号跡（第32図）

A12・B09 Gr. 内に位置する。東側は205号跡（古墳）周溝や、根切溝で、南側は061号跡で破壊される。

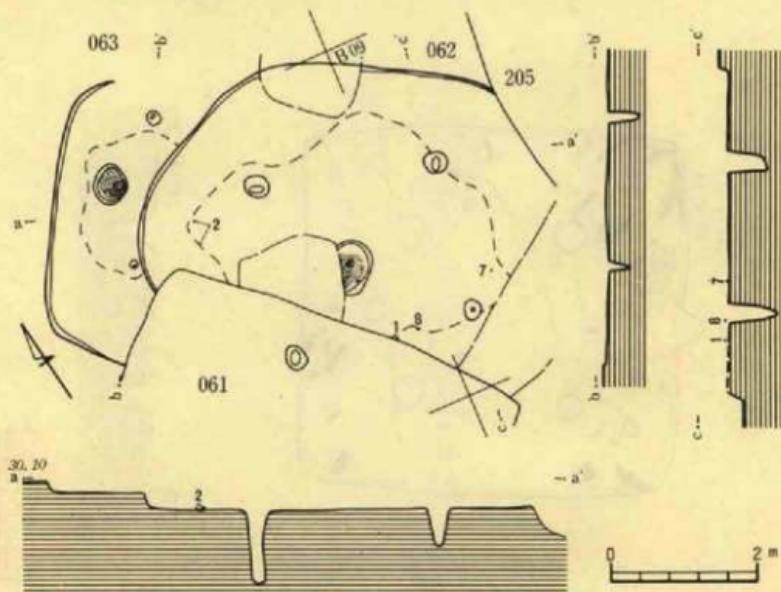
遺構は長軸600m前後の楕円形を呈すと思われる。壁はわずかに遺存する部分もある。床面は比較的軟かく、全体に小さな凹凸がある。主柱穴は径 25~30 cm の円形で、深さ 55~95 cm と一定しない。配置は最も深い P₁を中心、245 cm, 205 cm, 250 cm, 235 cm となる。炉は床面中央にあり、径 80 cm、深さ 6 cm 程の浅い凹みである。

遺物は少なく本跡に伴うと断定できるものはないが、南隅の 1・8 や、西部の 2 などは廃棄直後の混入品と考えられる。

・063号跡（第32図）

A12 Gr. 内に西壁部分をわずかに残すに過ぎず、大半は062号跡に破壊される。

西壁から推定すると 1 辺 360 cm 以上の隅丸方形の可能性がある。壁の高さはわずか 10 cm である。床は軟弱で、圓の破線内のみ遺存する。主柱穴は 2 本確認できたが、径 15 cm に満たない小穴である。炉（第37図）は柱穴を結ぶ線の外側にある。径 50 cm、深さ 3 cm の浅い凹



第32図 062・063号跡実測図

みであるが、火床は全体に発達している。

・064号跡（第33図）

調査区中央付近、E01・05 Gr. 内に位置する。その殆んどを201・024・023号跡で破壊される。

平面形、規模など全く不明で、壁も南側に 15 cm 程遺存するに過ぎない。床面は破線の範囲で堅面が確認された。主柱穴と思われるものはないが、024号跡内に復元すると深さ 70 cm のピットがある。P₄と考えられるものは深さ 18 cm、P₆は径 55 cm、深さ 20 cm を測る。炉は長さ 80 cm の梢円形と思われる。深さ 10 cm で、火床は殆んどない。

遺物は P₄周辺に 1 個体分出土したが、本跡に伴うと考える。

・065号跡（第33図）

調査区南東端、K01 Gr. 内に位置する。001号跡南東隅にあり、殆んど消失する。覆土は黒色土でローム塊を多く含み、床面上には焼土がみられる。

遺存する西隅から方形であることがわかる。壁下には壁溝も一部みられるが、床は軟かい。床に接して高環(1)が出土する。

・066号跡

F02 Gr. 内に完全に削平された遺構が検出された。恐らく 009、010号跡に切られると考えられる。主柱穴は径 20 cm、深さ 20~25 cm と小さい。3 本の配置は 170 cm の方形である。炉は径 50 cm で、火床は殆んどない。

・067号跡（第33図）

調査区西北部、A15 Gr. 内に位置する。南、北とも 201・204号跡(古墳)周溝に切られ、さらに大木の根により南半を破壊される。覆土は褐色土で山砂を含む。

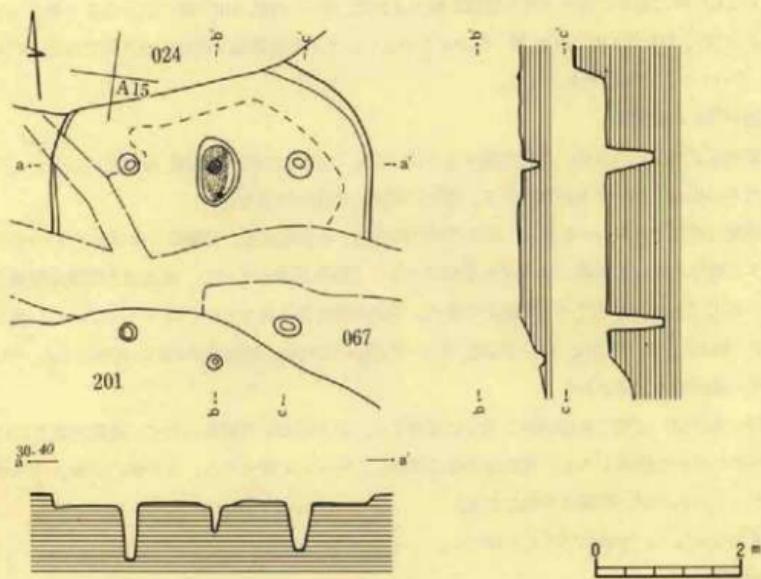
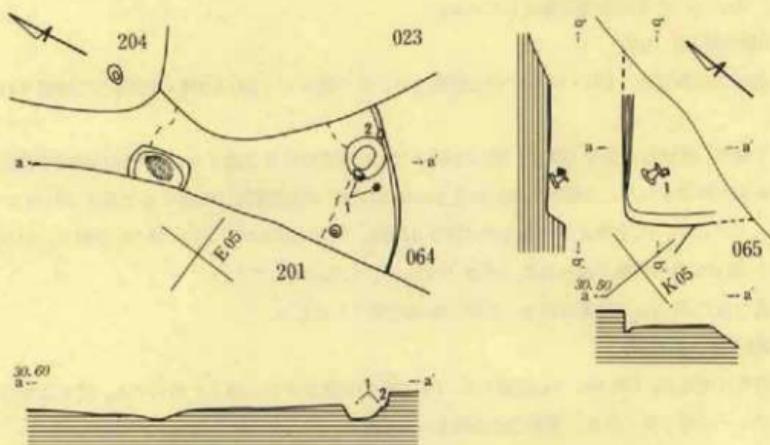
遺構は短軸で 420 cm を測り、形状は梢円形を呈すと思われる。長軸の方向は N—5°—E を示す。遺存の良い北東隅では 45 cm 程傾斜をもって掘り込まれている。床面は土間様の堅緻な面を検出できた。主柱穴は 4 本確認できた。平面の形は各々異なるが、径 30~35 cm で、深さは P₁ 65 cm、P₂ 80 cm、P₁—P₂間、P₂—P₃間が 220 cm、他は 230 cm の方形となる。P₅ はその底面のみ確認された。

炉（第37図）は柱穴を結ぶ線上中央に位置する。95×55 cm の細長い形で、底面北寄りにはさらにわずかな凹みがある。火床は全体に発達し、5~7 cm 燃火する。なお炉内に深さ 35 cm のピットがあるが、所属は不明である。

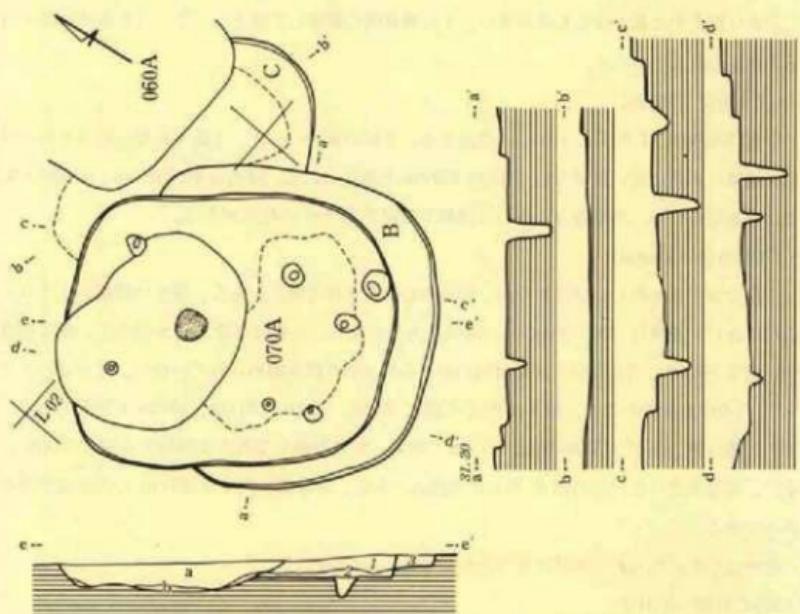
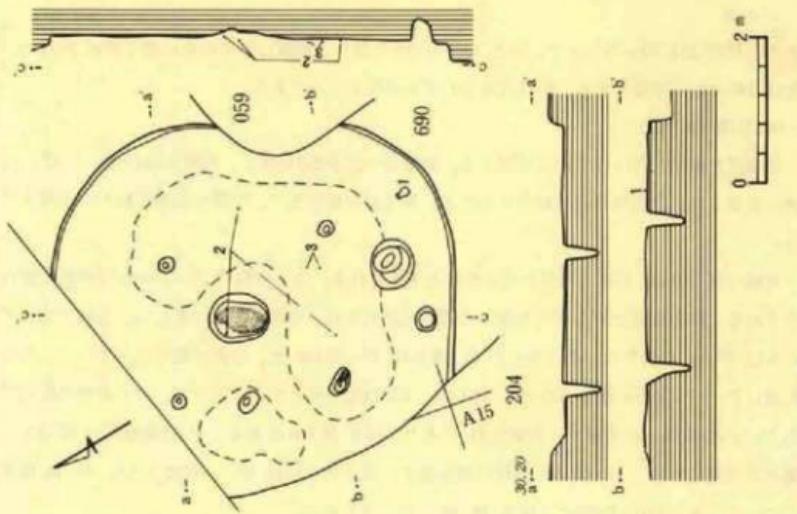
遺物は少なく、本跡に伴うものはない。

・068号跡

調査区南東、J02・03 Gr. 内に完全に削平された遺構が検出された。残るのは柱穴 3 本と炉で



第33図 064・065・067号跡実測図



第34図 069・070号井実測図

住居跡

ある。柱穴は径 20~25 cm で、深さ 30~40 cm を測る。配置は炉を中心と置く側が 280 cm、他は 140 cm と特異である。炉は火床をわずかに残すのみである。

・069号跡（第34図）

調査区北西部、A10 Gr. 内に位置する。東壁の一部を059号跡に、西壁は204号跡（古墳）周溝に破壊され、北西隅は台地縁辺にあたる。覆土は暗褐色土で、下層には焼土粒が若干混入する。

遺構は径 550 cm 前後の円形に近い形状と考えられる。壁は南側で 25~30 cm 程垂直に掘り込まれる。床の堅面は炉の周辺を除いて環状に認められ、全体に凹凸が著しい。主柱穴はいずれも径 20 cm に満たない小さなもので、深さは 45~50 cm と、垂直に掘り込んでいる。その配置は P₁—P₂ 間から順に 220 cm、195 cm、225 cm、185 cm と一定せず、やや菱形の配列である。P₃ は長軸上の南壁下（指標 0.8）にあり、深さ 30 cm を測る。P₄ は南壁から 50 cm も離れた位置にあり、70×60 cm の楕円形を呈す。深さは 25 cm で、一部はさらに 20 cm 程窪んでいる。また P₃—P₄ 間には深さ 28 cm のピットもある。

炉（第37図）は床面はほぼ中央（指標 0.93）にある。80×65 cm の卵形を呈し、深さは 6 cm に過ぎない。底面には不整形の小穴は縦列し、火床は余り発達していない。

遺物は覆土中に散在するものが多い。1 は南東隅に横転して出土し、2、3 も本跡に伴うか、その直後の流入であろう。

・070 A 号跡（第34図）

調査区南西隅、L 02 Gr. を中心に位置する。3 軒の重複のうえ、上面もかなり削平されていた。遺構は東西に長い隅丸方形で 420×350 cm と推定される。壁高は平均 10 cm、床面にも堅壁はみあたらない。西壁寄りに外方に傾斜する深さ 70 cm の柱穴がある。

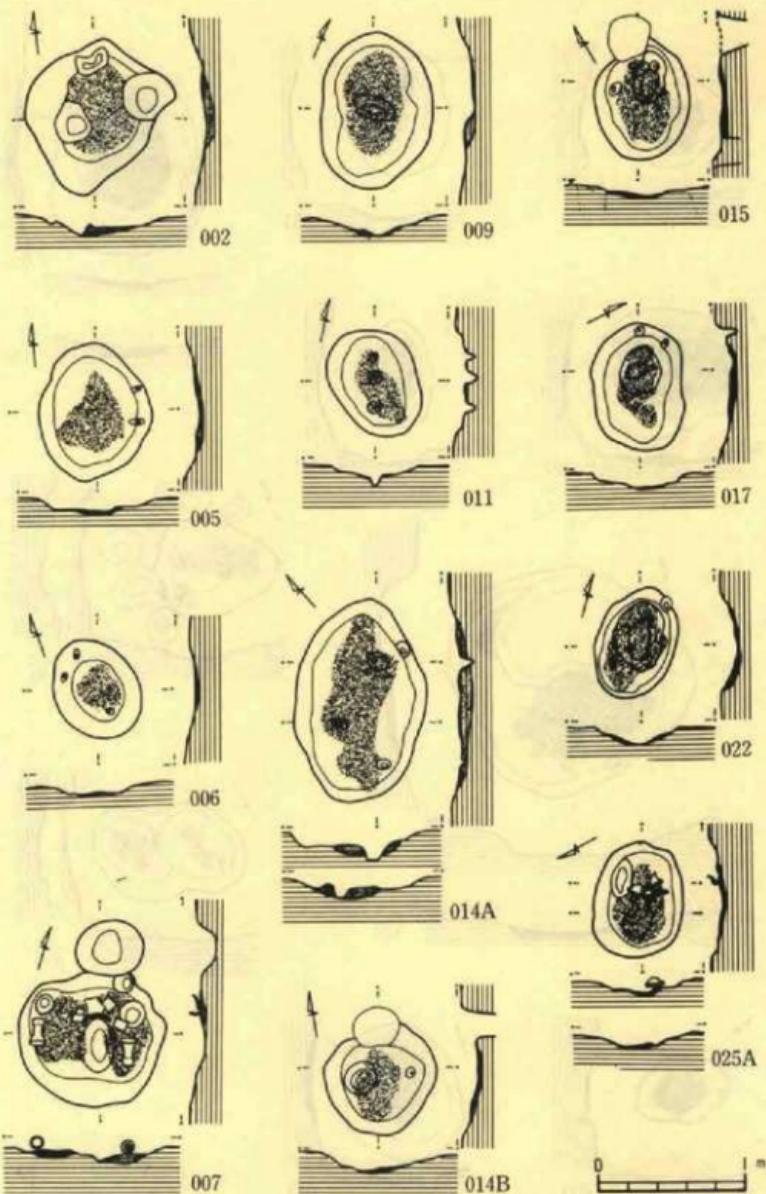
・070 B 号跡（第34図）

重複のうち最も新しい住居跡だが、炉を中心に焚火様の擾乱がある。覆土は暗褐色土でローム粒を含む。遺構は 450×365 cm の隅丸長方形を呈し、主軸はほぼ N—S を示す。壁は垂直で、最高 16 cm に過ぎない。床面は凹凸があるが、余り踏み固められていない。柱穴はいずれも径 25 cm 前後の小穴で、深さは P₁ から順に 40 cm、57 cm、25 cm、30 cm と不定である。その配置は東、西が 215 cm 他は 175 cm である。炉に対峙して外方に傾斜する深さ 35 cm の小穴、南壁東寄りに円形の深さ 20 cm の凹みがある。炉は擾乱内に径 45 cm の火床痕が残るのみである。

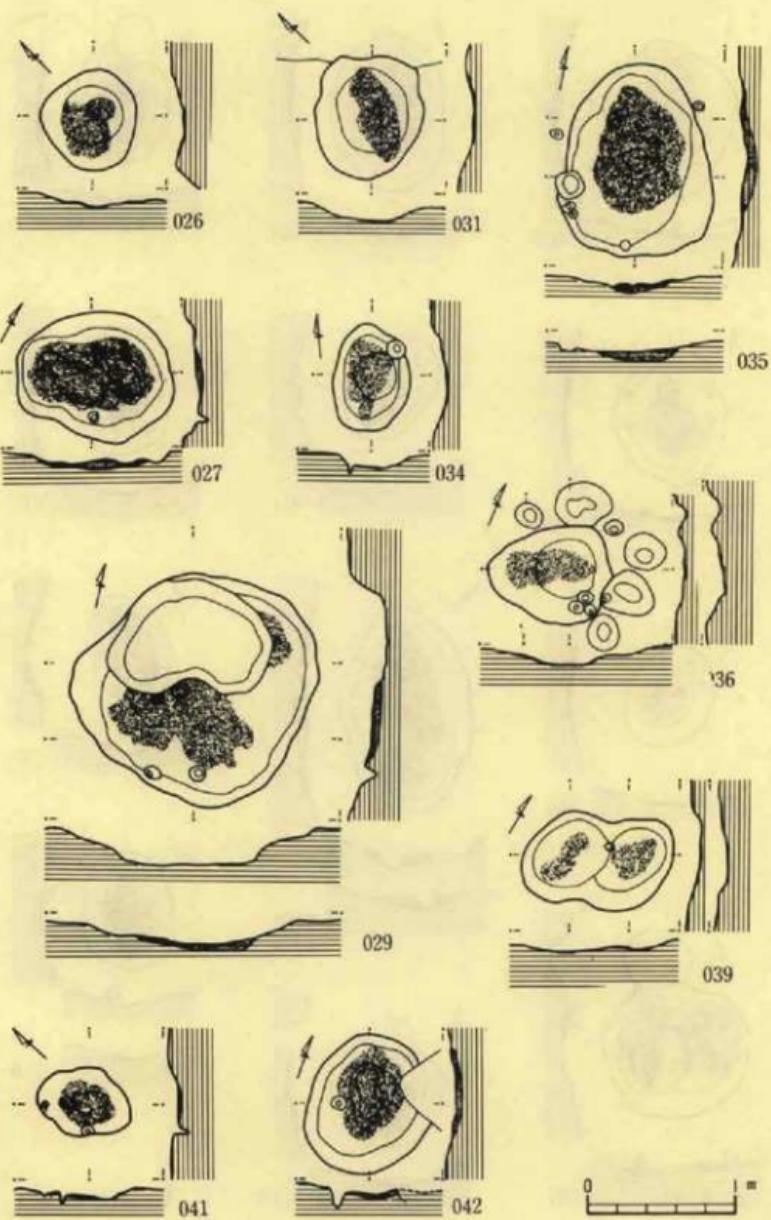
遺物は小片に限られ、本跡に伴うと断定できるものはない。

・070 C 号跡（第34図）

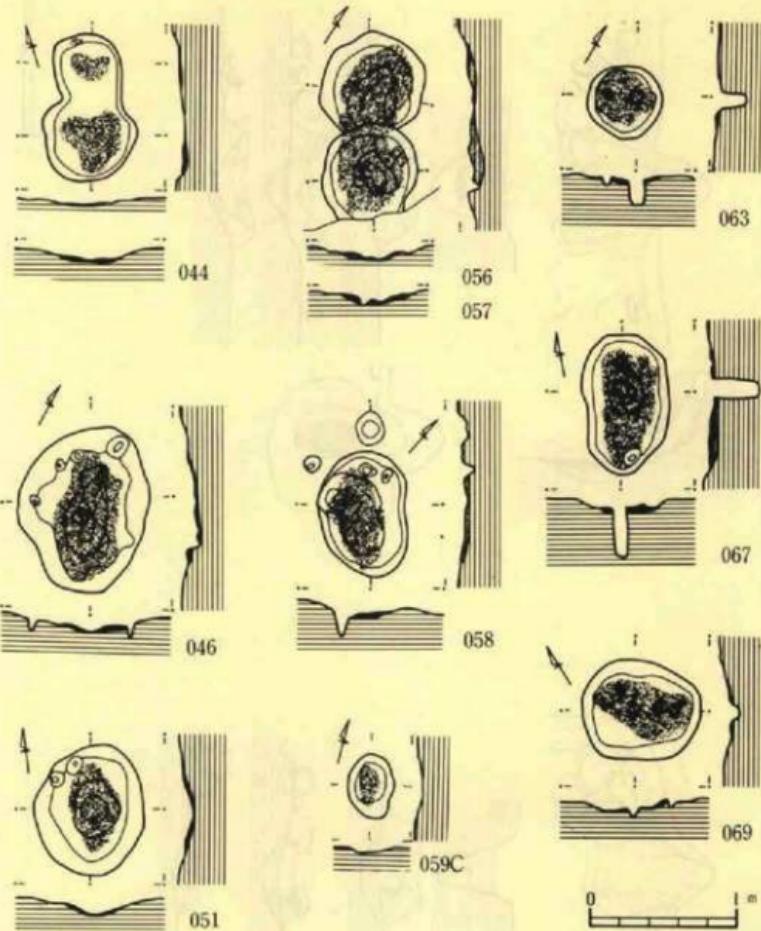
A 号跡東に拡がる床の壁面がこれに当たるが、他に付帯する施設は確認できなかった。



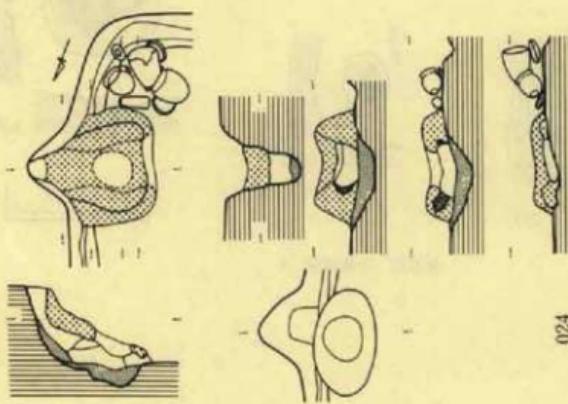
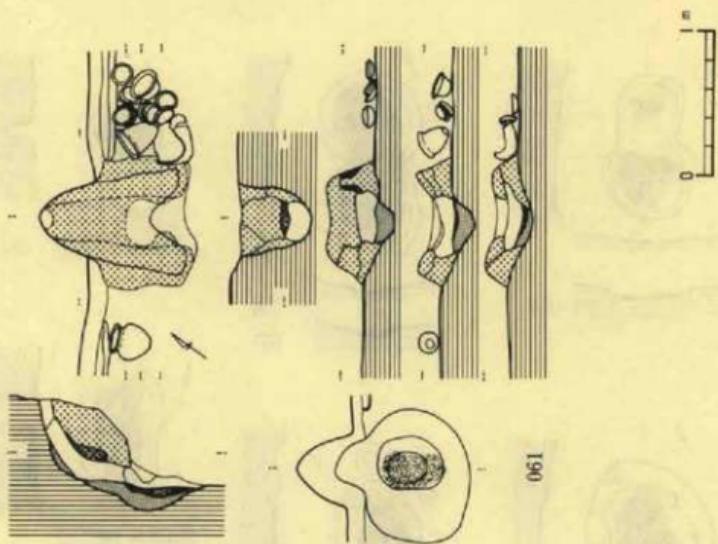
第35図 炉集成図(1)



第36図 炉集成図 (2)



第37図 炉集成図 (3)



第38図 カマド集成図

2項 古墳跡

・201号跡（第39図）

調査区北西部、D11 Gr.を中心として約1.2mの高さの土盛りが残っていた。調査の当初単なる塚と考えたが、トレンチに古墳の周溝跡が検出されたため、墳丘の一部の可能性がでてきた。墳丘は全体の4分の1にも満たず本来の形状は不明である。

墳丘断面の層序は極めて単純で、真黒色の旧表土上に、a層（暗褐色土でローム粒若干含む）を周囲に盛り上げ、中央にb層（暗褐色土とローム塊）、その上にc層（暗褐色土）を載せていく。墳裾から周溝までの間は幅2m程の「テラス」があったと思われるが、現状では北側のみに残る。

周溝は、西半分を欠くが、その外縁で径20.5mを測り、平均して幅2m、深さは北側で60cm、南側で40cmであり、全体に北側に傾斜する。周溝の覆土は3層に分かれる。1・2層とも黒色土で、下層で粘性を増し、3層は暗褐色土である。内部施設は不明である。

遺物は極めて少ないが、北側西部の台地傾斜により消失する直前の周溝内にわずかに浮いた状態で、集中して出土した。

・202号跡（第40図）

調査区南西部、H・I Gr.内に位置する。201号跡を除く他の古墳跡同様、周溝のみ遺存するに過ぎない。

周溝は外縁で直径26cmと本古墳群中最大である。幅は平均2.5mであるが、西側で幅を増し最大3.5mを測る部分もある。検出面での比高差は殆んどないが、北に向って20cm程傾斜するため、北側中央付近で深くなる他は50cmに満たない。周溝の覆土は1層暗褐色土。2層黒色土でやや粘性に富む。2層ローム粒を若干含む。3層黒色土とローム粒の混合土で、全体にしまりのある土層となる。遺物は破片が相当量出土するが、殆んど住居跡の破壊に際して流入したもので、本古墳に伴うと思われるものはない。

・203号跡

調査区最北端、A Gr.端に位置し、周溝全体の6分の1程度がかろうじて残るに過ぎない。古墳周溝であると考えたのは、位置的な点と、覆土が真黒色土であった点で、その規模・形状は明らかでない。

・204号跡（第41図）

調査区北端のA Gr.内に位置し、西半分は台地傾斜により消失する。

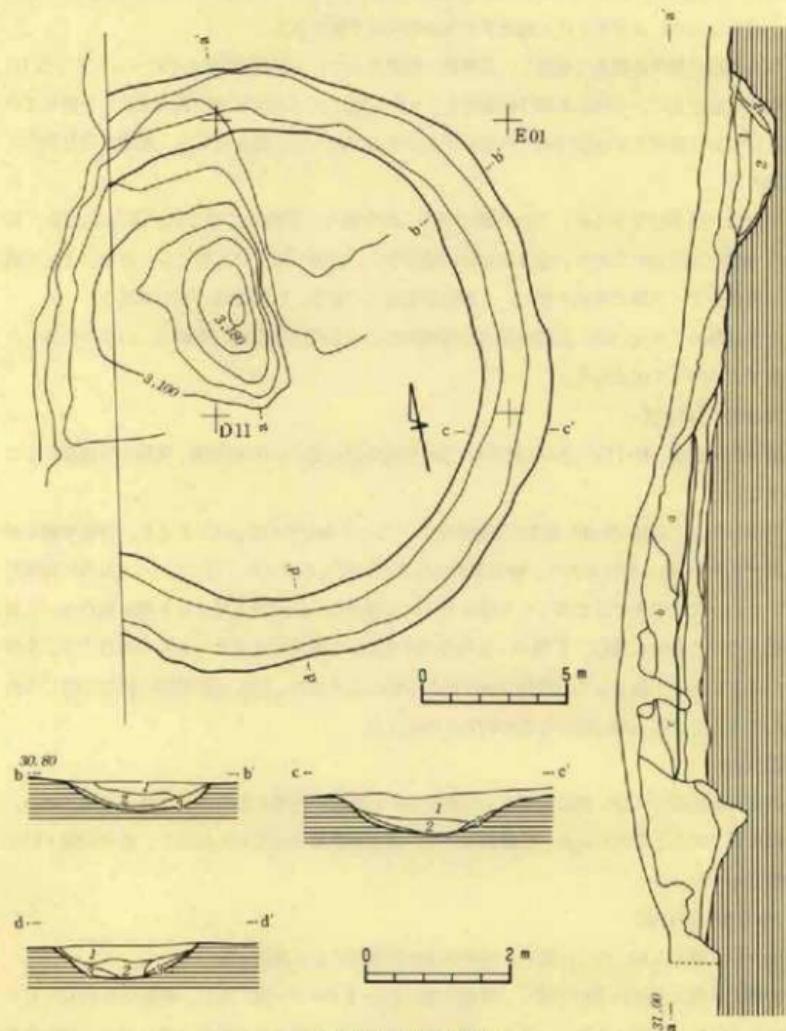
周溝の外縁で直径14.5mを測り、周溝の幅は1.2~1.8mと一定しない。断面の形状も「U」字状から「V」字状に変化し、深さは40~50cmである。調査前の現況は神社地で、神木数本

古墳跡

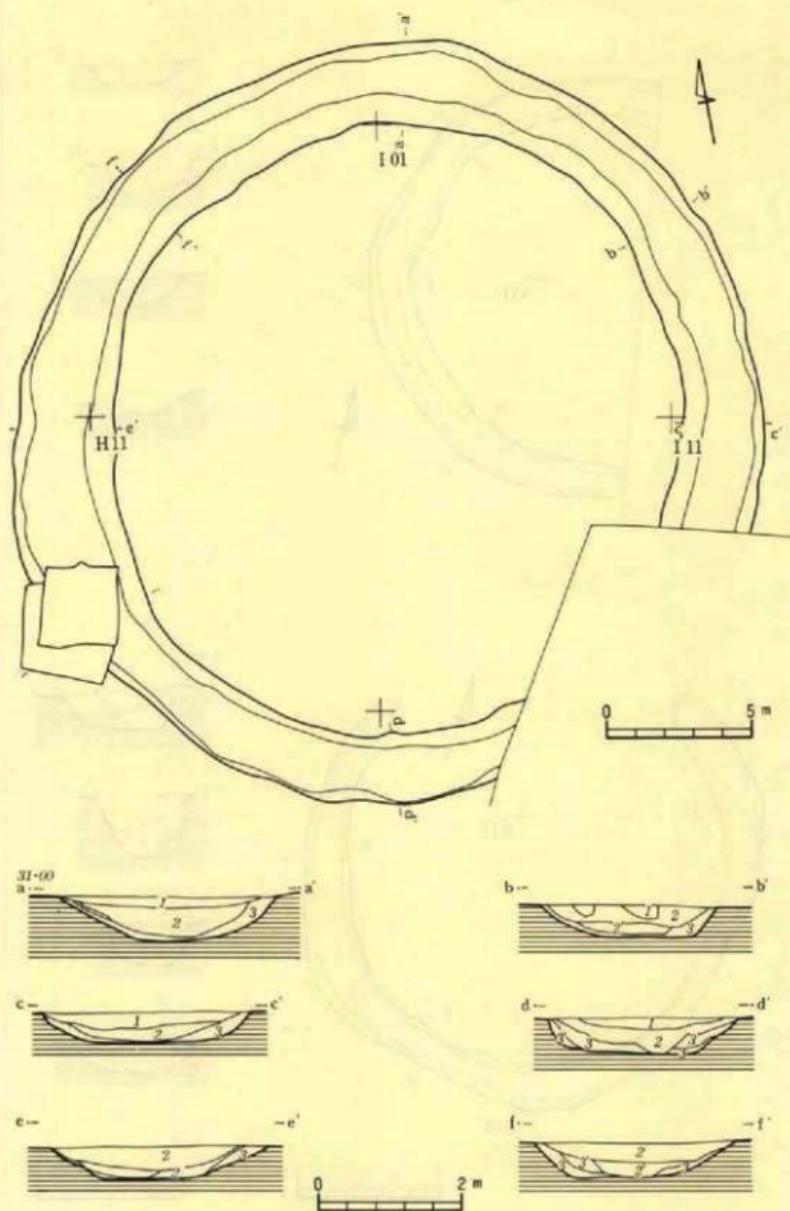
があったため、根による擾乱がとくに著しい。

・205号跡（第41図）

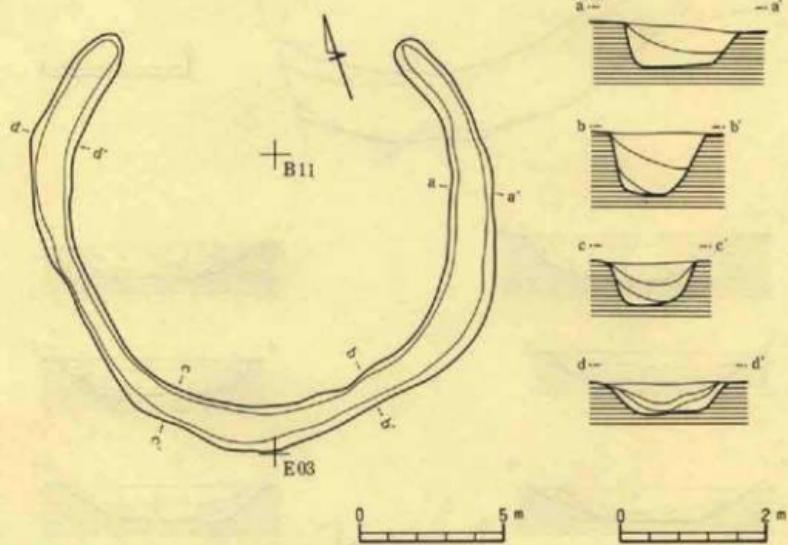
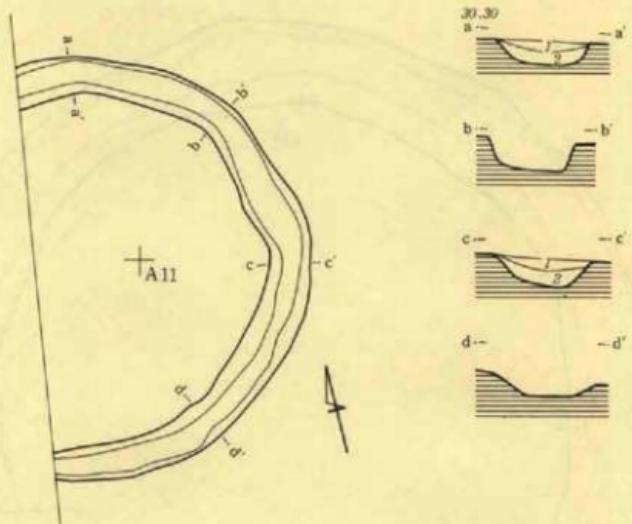
調査区北部、B Gr. 内に位置し、北側は台地傾斜により消失する。周溝の外縁で16.5mを測り、幅は平均して1.5mである。周溝の断面は箱形で、全体に深く、とくに東側では 50 cm 以



第39図 201号跡実測図



第40圖 202號路實測圖



第41圖 204・205號跡實測圖

上となる。覆土は1層黒色土。2層黒色土でローム粒を含む。3層褐色土である。本跡に伴う遺物はない。

・206号跡（第42図）

調査区中央、E Gr. 内に位置する。本跡は重複する住居跡よりいずれも新しいが、周溝が浅いため、南および北西部分でやや不明瞭である。周溝の外縁で直径12.5mを測り、幅は平均して1mに過ぎない。周溝の断面は皿状を呈し、深さは40cmに満たない。覆土は1層暗褐色土。2層黒色土でローム粒を含む。3層暗褐色土でローム粒を多く含む。遺物は殆んどない。

・207号跡（第42図）

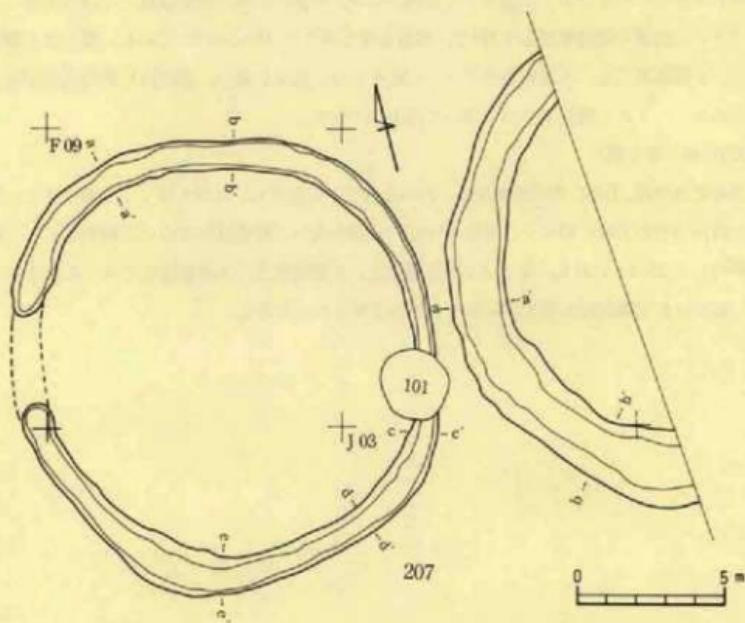
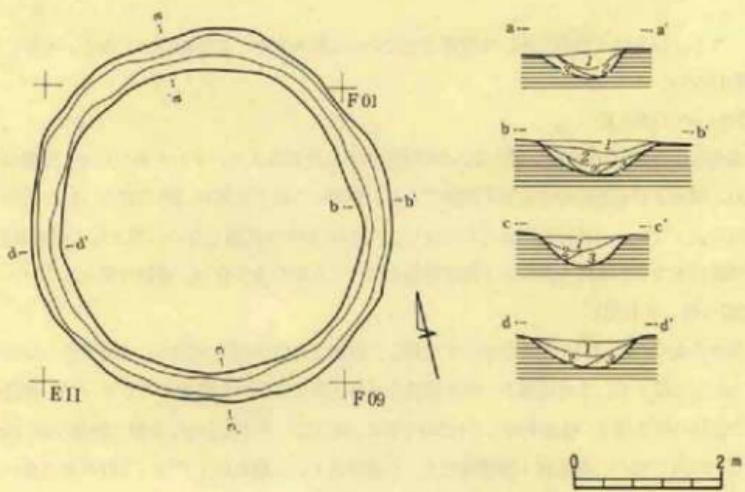
調査区東半、F・J Gr. にまたがって位置し、東側では101号跡に切られ、208号跡とはわずか70cmと近接する。また西側の一部は調査中の排土搬出路のため破壊してしまった。周溝の外縁で直径15mを測り、幅は平均して1.2mである。深さは一定でないが、北側で約20cm、西～南側で30cmと浅い。覆土は1層暗褐色土。2層黒色土。3層黒色土でローム粒を多く含む。4層褐色土でローム粒を多く含む。遺物は殆んどない。

・208号跡（第42図）

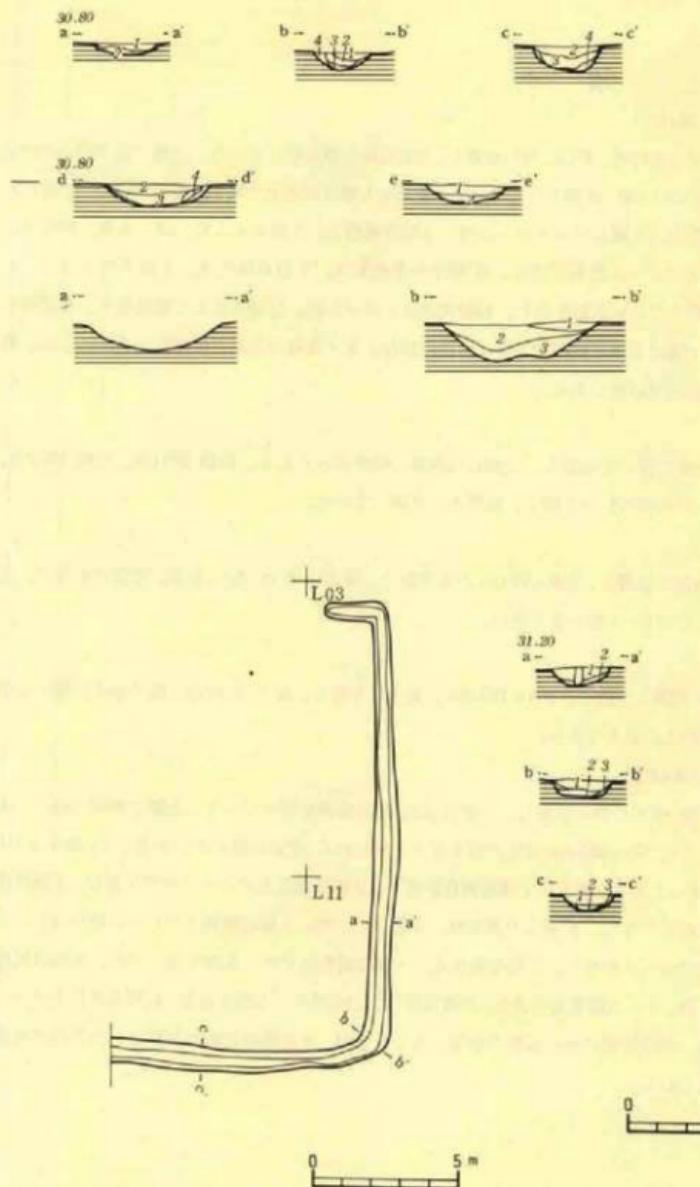
調査区東端に約4分の1程遺存するに過ぎない。周溝の外縁の規模は推定で16mを測ることができる。周溝の幅は平均して2mで、皿状を呈し深さは40～50cmである。覆土は1層暗褐色土。2層真黒色土。3層黒色土でローム粒を含み、粘性に富む。遺物は北側の遺存部端に集中するが、いずれも底面よりやや浮いて出土している。

・209号跡（第43図）

調査区西南端、L Gr. 内に位置する。西半分はすでに消失し、北側も浅く不明瞭である。周溝は1辺15.5mの方形にめぐり、幅は80cmにも満たない。断面は基本的には箱形を呈し、深さは平均して25cmである。覆土は1層暗褐色土。2層黒色土。3層黒色土でローム粒を多く含む。遺物は東南隅付近の覆土内に計1点が出土するのみである。



第42圖 206・207・208號跡測圖



第43図 207・208・209号踏査図

3項 土 壤

・101号跡（第44図）

調査区東部中央付近、F Gr. 内に位置し、207号跡周溝を切っている。上面で径 260 cm の正円形で、垂直に約 180 cm 挖り込んでいる。覆土は 1 層暗褐色土で黒色土を若干含む。2 層ローム粒と暗褐色土。3 層ローム・ローム塊。4 層暗褐色土。5 層ローム粒、ローム塊と黒色土。6 層暗褐色土でローム粒若干含む。6' 層やや赤色氣味。7 層真黒色土。8 層黒色土とローム粒。9 層褐色土でローム粒を含む。10 層褐色土とローム粒。11 層黒色土と暗褐色土。12 層褐色土である。土層は全体に軟弱で下層は粘性に富む。9・10 層の上面に炭化粒が多くみられ、最下部には 2 面の堅い面がある。

・102号跡

006号跡西壁に接して位置し、上面には同跡の貼床がみられる。長軸 280 cm、短軸 120 cm、深さ 70 cm の長楕円形の土壙で、褐色土が充填していた。

・103号跡

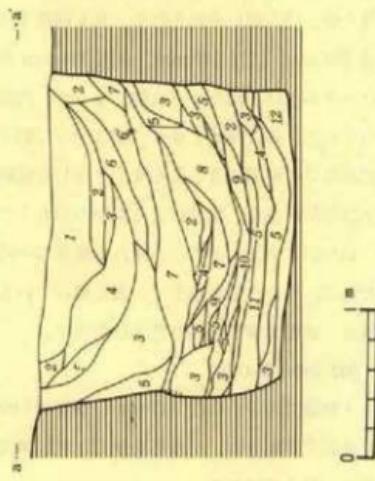
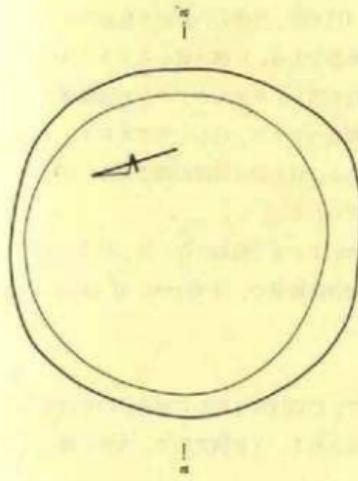
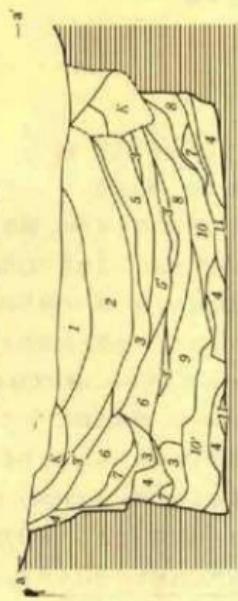
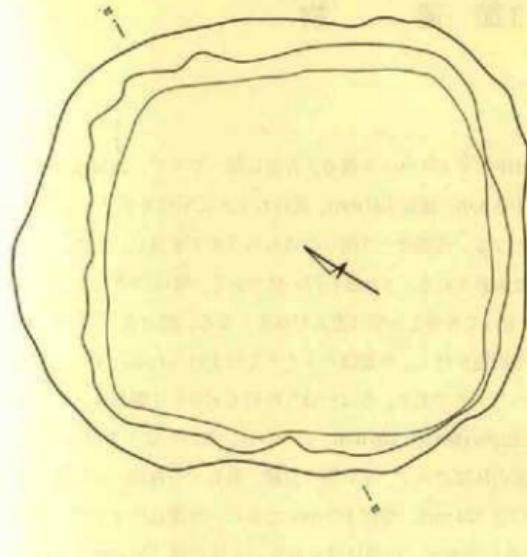
207号跡南端に位置し、150×70 cm の長方形で、深さは 30 cm 程である。壁面は垂直で、覆土は暗褐色土でローム粒を多く含む。

・104号跡

051号跡北西隅に位置し、200×100 cm の長方形を呈し、深さは 40 cm 程である。覆土は黒色土と暗褐色土の混土である。

・105号跡（第44図）

調査区中央、E Gr. 内に位置し、一部分は202号跡周溝を切っている。土壙の周囲は崩れ、本来の規模は 1 辺 270~280 cm の正方形を呈すと思われる。壁面は縦の凹凸が著しく、深さは 140 cm 以上であったろう。覆土は 1 層暗褐色砂質土。2 層暗褐色土でローム粒若干含む。3 層黒色土でローム粒若干含む。3' 層より黒氣味。4 層ローム塊。5 層暗褐色土でローム粒を含む。6 層暗褐色土でローム粒含む。7 層暗褐色土。8 層暗褐色土でローム塊を多く含む。9 層暗褐色土でローム粒、ローム塊を若干含む。10 層真黒色土。10' 層ローム塊を含む。11 層真黒色土でローム粒を含む。埋没初期にローム壁の崩落がみられるが、その後は比較的長期にわたり自然堆積したと考えられる。



第44図 101・105号跡実測図

3 節 遺 物

1項 住居跡

・001号跡（第45図）

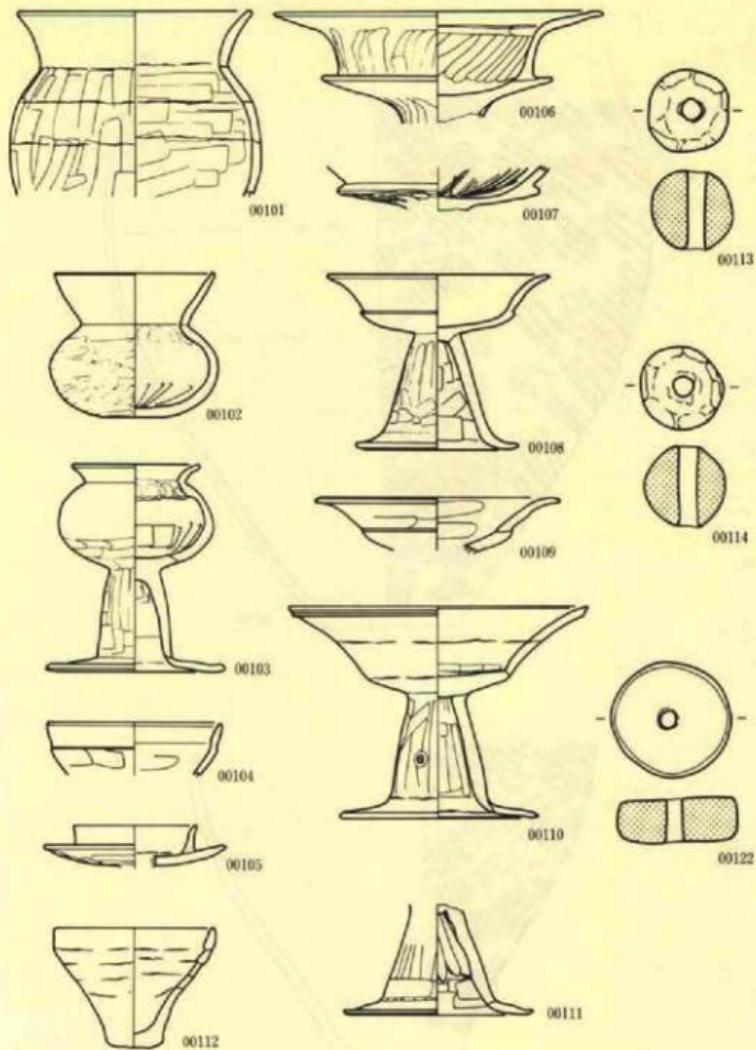
1は壺で口径 160 mm、胴径は中位で 174 mm を測る。外面は縦ヘラナデ、内面は横ヘラナデで比較的荒い。2は壺で口径 108 mm、器高 100 mm、底はわずかに平底を呈す。頭は「く」字状に開き、押し潰れた球形胴となる。外面はヘラ削りのちヘラナデを施し、全体に丁寧な造りである。外全面と内頸部まで赤彩される。3は脚台付の壺である。壺は口径 88 mm、器高 70 mm で、短かい口縁は丸味をもって外彫し、胴は歪んだ球形となる。脚は高 72 mm、底径 123 mm で、筒状の脚に、平らな円盤が付く。外面はヘラナデで仕上げられる。4は壺形を呈す口径 118 mm のもので、外面ヘラナデである。5はやはり壺形でおそらく脚台が付く。壺部は直立する口縁（径 85 mm）と皿状の盤（径 126 mm）に分かれ、荒いヘラナデを施す。

6～11は高壺である。6は大形の壺部のみで、平に開く口縁、直立する身部、これを受ける円盤状の底部とに分けられる。口径 224 mm、受部 163 mm である。外面はヘラナデ、内面は指頭で強くナデている。7もこれに同類で、円面は磨かれる。8は口径 154 mm、底部 110 mm、全高 120 mm である。壺部は退化した受部と、大きく外反する口辺部からなる。脚は未広がりのまま、底部でめくれ上がる形となる。脚は丁寧なヘラナデ、壺部もナデのようである。外全面、壺内面が赤彩される。9も同類で口径 171 mm、外面のみ赤彩が認められる。10は口径 209 mm、底径 140 mm、全高 144 mm の大形品である。壺部は底から大きく外反し、口唇はつまみ上げられたように鋭くなって、内面に段を残し、外面もナデのため沈線様の痕跡が認められる。脚は筒状となり、裾は平らに開く。脚はヘラナデ、壺もナデであろう。また脚の一個所には焼成前に透し孔を穿とうとした痕跡がある。11も10に同類の脚である。12は粘土紐巻上げの鉢形品で、指頭による整形ののちナデて作られる。

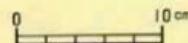
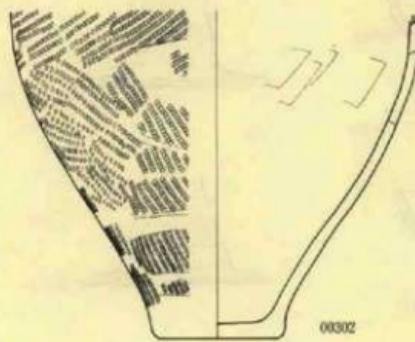
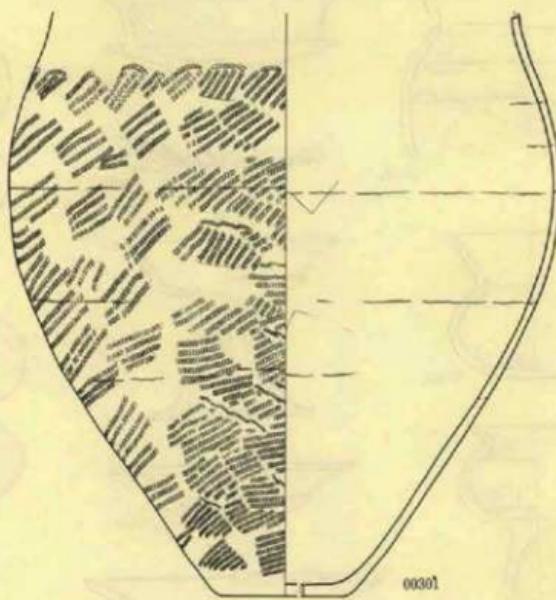
13～21は土玉である。いずれも直径 26～28 mm で、手で捏ねて作られ、孔は一方向から穿たれる。かなり密な胎土で、良く焼けている。22は纺錘車で、径 40 mm、厚 15 mm の盤状を呈し、表面は緻密な磨き仕上げを施す。

・002号跡（第47図）

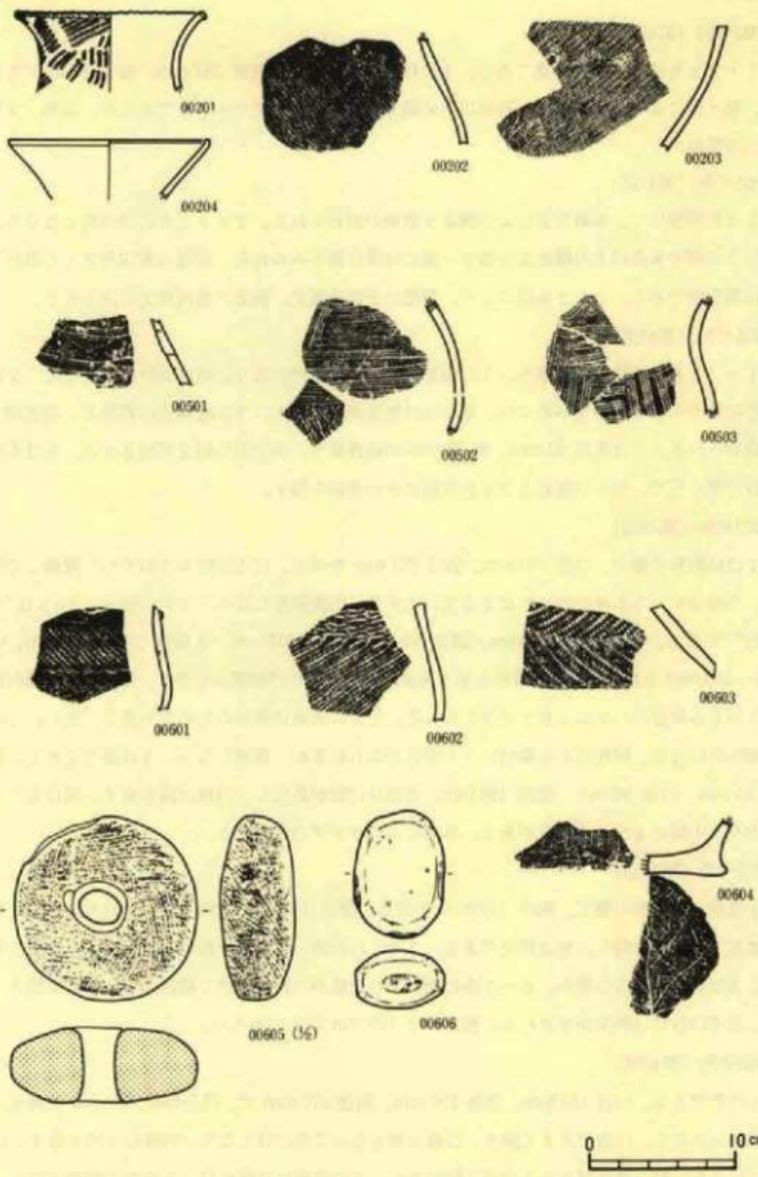
1は壺である。口径 127 mm、頭径 94 mm で、口辺はゆるやかに開く。口唇は横からのヘラ先刺突が施され、小波形を呈し、地に繩文が成される。3も繩文地で、大形の壺か。2は斜位のハケナデである。



第45圖 001號跡出土遺物實測圖



第46図 003号跡出土遺物実測図



第47図 002～006号跡出土遺物実測図

・003号跡（第47図）

1・2ともに上位を欠く壺である。1は残存高400mm、胴径382mm、底径86mmを測る。粘土帯による輪積成形で、肩部以下に縄文を施す。2はやや小さめであるが、器形、文様、胎土等酷似する。

・005号跡（第47図）

1は細頸壺片で、半截竹管による横走文数条が認められる。2・3とも広口の壺となろうか。2は3条櫛で8条以上の横走文を描き一部には縦区画もみられる。変型の重四角文とも思われ、胴は縄文地である。3も3条櫛により、頸部に上弦連弧文、胴部に重四角文が施される。

・006号跡（第47図）

1・2とも扁平球胴形の壺か。1は頸部に口辺帶の痕跡があり、地は羽状縄文となる。2は肩部に数条のS字結節文がめぐり、地には付加条縄文を施す。3は細頸壺の肩部で、羽状縄文が認められる。5は直径62mm、厚25mmの紡錘車で、表全面に縄文が施される。6は安山岩質の擦り石で、図の下端および左右両脇にその痕跡を残す。

・007号跡（第48図）

1は球胴形の壺で、口径190mm、胴径221mmを測る。口辺は短かくわずかに彎曲して開く。外面は6～7本単位のハケによる荒いナデで、内面頸部にはヘラナデが残る。2・3は“炉器台”である。2は器高133mm、頭径68mm、底径107mm、3は同じく、120mm、67mm、103mmを測る。扁平な球形を呈す頭部と、末広がりの脚部からなり、外面および脚内面は5～6本単位のハケによりナデツケられる。ともに表面は被熱のためやや荒く、脆い。3の内部中央には身、脚相方から篠竹による穿孔がみられるが、貫通しない。4は器台である。器高85mm、口径92mm、底径106mm。受部は口縁が直立し、内縁に段を有す。脚は太く未広がり、中に4つの透し孔がある。外面にはヘラナデの痕が残る。

・008号跡（第48図）

1は扁平球胴形の壺で、胴径180mmを測る。頸径143mmでゆるやかに立ち上がる。肩部にS字結節文を施し、地は縄文である。2もこれに近い器形と思われ、地はやはり縄文である。3は鉢または広口壺か。6～7条の櫛により口縁から頸にかけて縦区面、小波文を描き、同工具で口唇には刺突がなされる。推定口径160mm以上であろう。

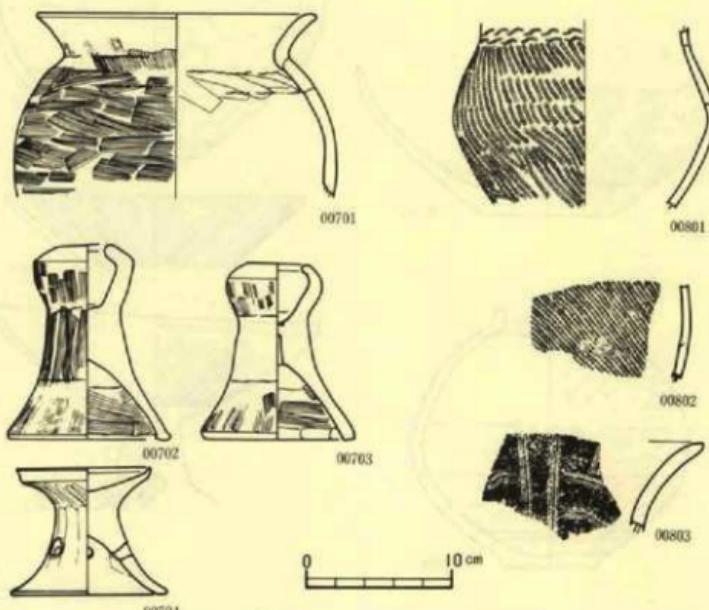
・009号跡（第49図）

1は壺である。口径183mm、頭径100mm、胴径270mmで、現存器高220mmを測る。頸は直立に近く、口辺で大きく開き、口縁は稜をもって受口状となり、内縁にも段を有す。口縁には2本一対の棒状浮文が5個所に貼付され、その表面には棒様具による刻みが施される。胴は下膨れの球形を呈し、頸部との接合部分には突帯をめぐらしている。外面の調整はハケに

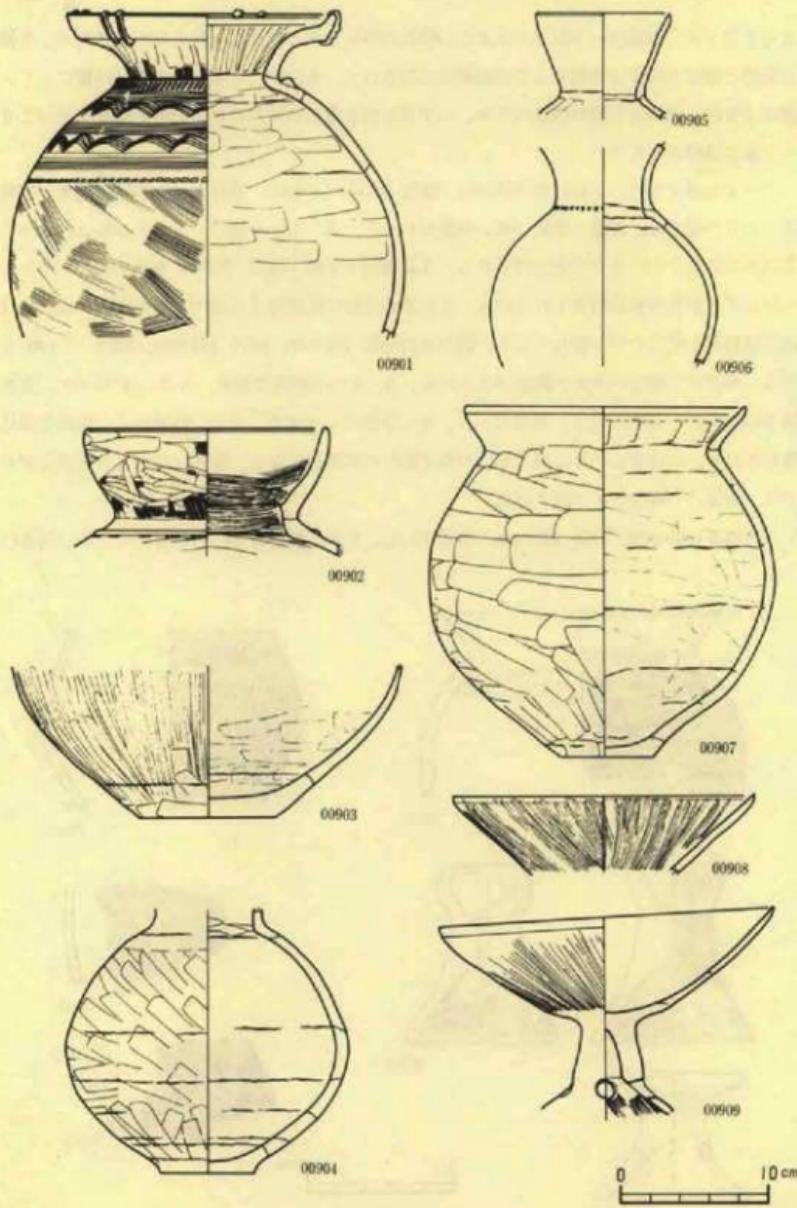
よるナデツケ、内面はヘラ削りのままで、頸の内外ともその後に磨き仕上げがなされる。文様は突帯と肩部下端に4条櫛による連続刺突が施される。その中、すなわち肩部に同櫛により、横走文3段、波状文2段が描かれるが、いずれも描き直しが行なわれたため、重なり合って6～7条の痕がみられる。

2～4も壺である。2は口径164mm、頸径123mmを測る。頸は「く」字状に開き、口縁近くより内彎する。肩部上端には低い突帯がめぐる。内、外とも強いハケナデが施され、外面ではさきにヘラ(?)ナデで仕上げられる。3は球胴下半部で底径92mmを測る。円、外ともヘラナデののち外面は磨き上げられる。なお表面全体に化粧粘土を塗付したようである。4は扁平球胴形を呈しやや下彫れとなる。胴のみの器高165mm、胴径192mm、頸径73mmを測る。外面は丁寧なヘラナデ調整がなされる。5・6は小形壺である。5は口径91mm、頸高56mmを測り、壺形となる。調整はヘラ、または指によるナデツケで、外面および内面頸部は赤彩される。6はゆるやかに開く頸、やや下彫れの球胴形となる。肩部上端には竹管刺突がめぐり、全体に丁寧なナデが施される。

7は器高235mm、口径193mm、底径63mmを測る壺である。口辺は「く」字に開き口



第48図 007・008号跡出土遺物実測図



第49图 009号墓出土遗物实测图

唇はひっぱり上げたように直立氣味となる。胴は球形を呈し、底部はやや突出する。胴全体に荒いヘラ削りが施され、内面は指頭ナデのままである。

8・9は坏部が鉢状を呈す高坏である。9は口径 230 mm、坏高 70 mm 前後で歪みが著しい。脚部は末広がって据で大きく開く。据との接合部には 12~13 mm の透し孔が4個穿たれる。被熱のためであろうか表面の調整は不明瞭だが、放射状のハケナデののち、8と同様の磨き仕上げがなされたと思われる。

・010号跡（第50図）

1は口径 245 mm の広口壺である。口縁には幅 16 mm の帯をめぐらし、口唇に撚糸文を施す。頸はゆるやかに開き、頸下端にはS字結節文を配す。なおそれ以下には地繩文を施すようである。2は朝顔形に大きく開く小形壺である。口径 170 mm、頸高 38 mm と特異な器形を呈し、口縁には 17 mm 幅の帯がめぐる。口縁帯には紐繩文を施し、さらに口唇には繩文原体を連続押捺す。頸部は中央に細繩文が横走し、地は撚糸文である。

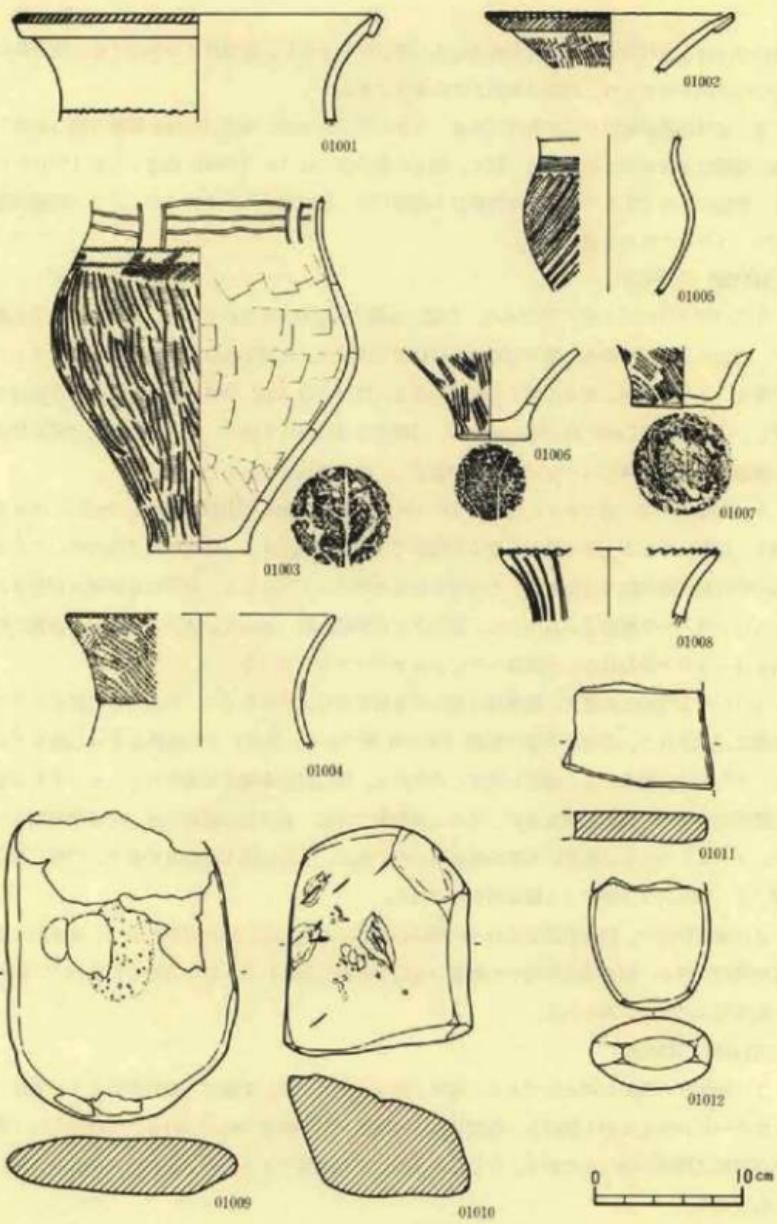
3は口縁部を欠く壺である。現存高 240 mm、頸径 156 mm、胴径 208 mm、底径 70 mm を測る。胴部は中から上半で最大となる長胴形で、底部は突出する。頸部には半截竹管による2本一対の縦区画が四方に配され、その間を横走文が2~3段めぐる。肩部には細繩文が施され、さらに2段のS字結節文がみられる。胴以下には間隔の粗い撚糸文が施され、単軸の表面の凹凸もはっきりと表われる。内面はヘラによるナデツケがなされる。

4は口径 182 mm の壺で、輪積痕を思わせる幅広の口辺帯がめぐる。口辺帯は口唇からすべて繩文が施される。5は小形壺で胴頭 116 mm 程である。肩部に8条細櫛による小波文があり、その上端は櫛先による連続刺突でしめられる。地は付加条繩文が施される。6・7とも壺の底部であろう。器形は異なるが、恐らく長胴形である。6は地に細撚糸を、7は細繩文をなす。3・6・7ともに底部に木葉の痕が明らかである。8は口径 152 mm の鉢で、口唇に指頭押圧が、頸部に3条櫛による縦条痕がなされる。

9は硬質砂岩で、図の表面中央のみに磨碎の痕跡がみられる。10は細粒砂岩で、金属的な切痕が隨所に残る。11も細粒砂岩やや軟質のもので砥石と思われる。12は花崗岩の磨石で、図の下端面のみに磨面がみられる。

・011号跡（第51図）

1は細頸壺の頸から肩上部である。地は丁寧なヘラナデで、文様は半截竹管による。頸部には2条一対の横走文が4段以上、肩部には下弦連弧文が2段まで認められる。2は器形は不明だが肩部文様帶が明らかである。少くとも3段の磨消繩文による山形文を表わすかなり大形のものである。



第50図 010号跡出土遺物実測図

• 012号跡 (第51図)

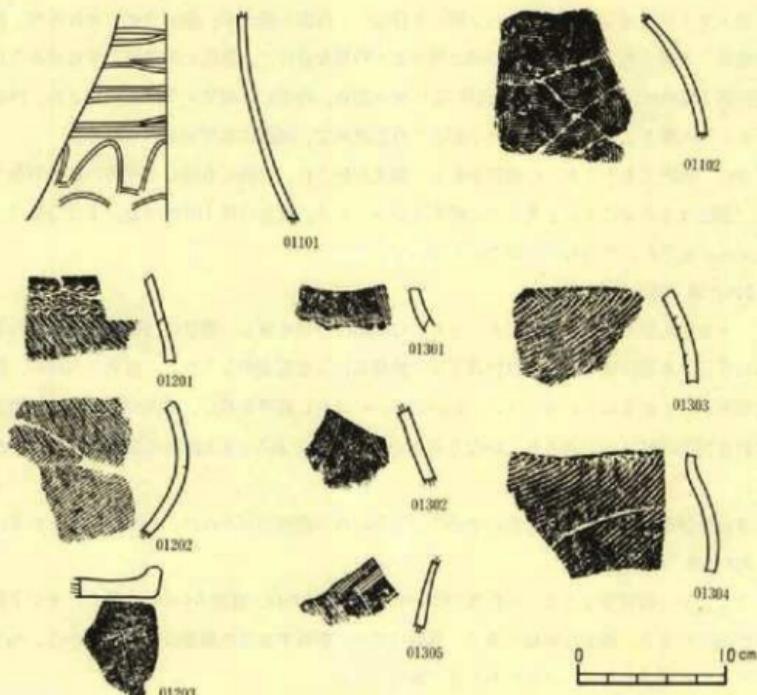
1・2とも扁平球胴形を呈すと思われる甕の細片である。1は肩部に6~7条のS字結節文をめぐらし、地は反撓りの単節繩文である。2は胴部中央の破片で、付加条繩文が羽状に施される。3は底部片で、底部には細かい編みの敷物痕がみられる。

• 013号跡 (第51図)

1は細頸甕と思われる。外面はハケナデが施され、頸部の文様は5条櫛による縦区画と横走文が描かれる。2も同形の肩部片で、半截竹管による渦巻文の下部が認められる。3・4とも甕であろうか。ともに胴部は反撓りの繩文が施され、3の肩部には3条櫛による文様がみられる。5は鉢である。全体にハケによる荒いナデののち、3条櫛により羽状条痕が描かれるが、表面に被熱の痕跡はみられない。

• 014号跡 (第52図)

1は口径 285 mm の広口甕である。口辺はゆるやかに拡がり、口縁で幅 25 mm の貼付け帶



第51図 011~013号跡出土遺物実測図

がめぐる。頸部は「く」字に近く肩部と接合するようである。口縁帯下端は棒様具による押捺が連続し、その裏面には指頭圧痕が残る。口縁帯3条一対のS字結節文が3段みられ、頸部内外の調整は横ナデのち縦の磨き仕上げのようだが、磨耗のためはっきりしない。肩部羽状綱文がめぐり、下端をS字結節文で区画し、一部に円形浮文が貼付される。

2は特異な形の広口壺である。やや歪みがあるが、平均して器高366mm、口径260mm、頭径250mm、胴径320mm、底径125mmを測る。頸部は直立し、口縁には幅15mmの帶があがる。肩部との間には接合痕が残り、これをヘラ刺突により強化している。胴はやや上方で最大となり、広い底部へとゆるやかに移行する。内・外の調整は不明で、仕上げには棒様具と思われる磨きがかけられる。口縁帯には繩文が施され、下端はヘラ先押捺による刻みが入る。頸部は羽状綱文で埋められる。なお内縁部分は全面的に磨耗および剥離斑点がみられる。

3は器高179mm、口径186mm、胴径180mm、底径65mmの壺である。頭は全体に比べて長く、ゆるやかに開く、胴は扁平球胴形を呈し、突出する底部が付く。口唇は棒様具による上および外面横からの押捺のため波状を呈す。外面の調整は横ナデ、横ヘラナデのち胴上半は縦ヘラナデを施し、胴下端はヘラ削りを行なう。内面も横ナデ、横ヘラナデされるが、胴部は磨耗し不明である。4は肩の極端に張り出す特異な器形で、底部に焼成前の穿孔がみられる。現存高165mm、胴径194mm、底径72mmを測る。外面には繩文がまばらに施され、内面は下から上へ磨き上げられる。6は小形品で外面燃糸文、底部に木葉痕がみられる。

5は小形壺であろうか。口縁帯を有し、繩文が施され、口唇にも同じく原体の押捺がなされる。頸部は3条櫛による2条一対の縦走文がみられる。推定口径140mmか。7は口唇にヘラ先刻みが施された高壺形の土器である。

• 015号跡（第53図）

1・2とも壺の口縁と思われる。ともに口縁貼付け帯を有し、帯状には細繩文が施される。1は頸部にも羽状綱文が、2は口縁下端に棒様具による刺突がなされる。前者は内面が、後者は外面がともに赤彩される。3は小形の壺か。やはり口縁帯を有し、繩文が施される。頸部には竹管押捺の縦区画がみられ、かなり器肉の薄いものである。4は底部に細編みの散物痕が残る。

5は紡錘車片、6は安山岩質の磨石で、下端のみに磨碎面がみられ、側面は研磨される。

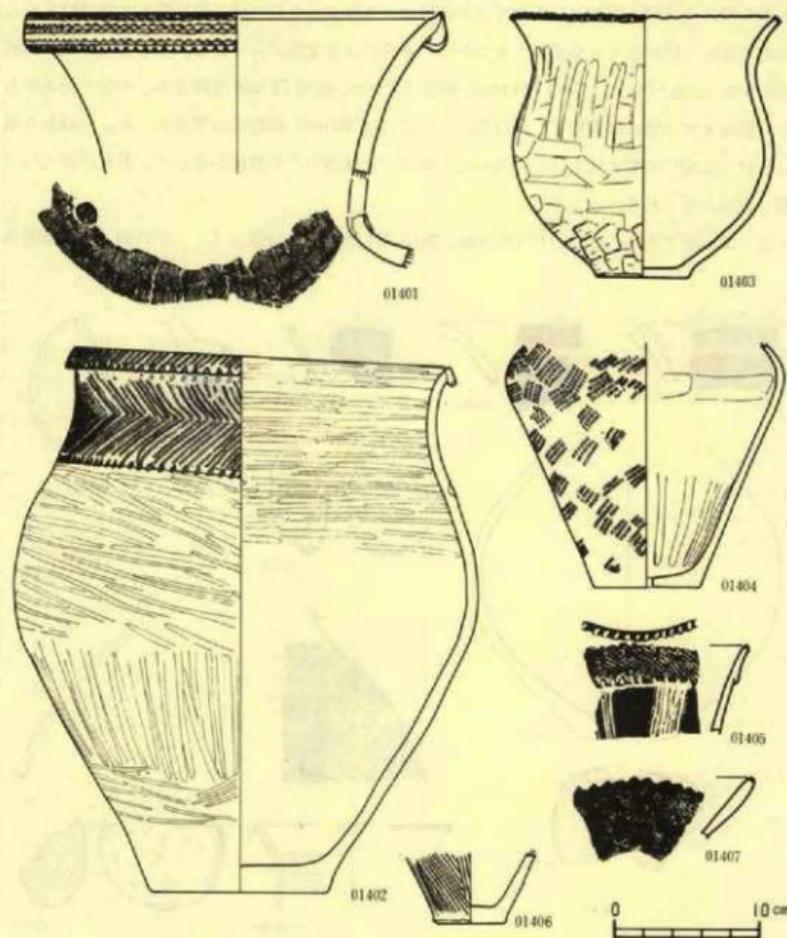
• 016号跡（第53図）

1は小形の細頸壺である。現存高202mm、胴径211mm、底径64mmを測り、やや下膨れの球胴形を呈す。胎土に砂粒が多く、器面は完全に磨耗するため調整は不明瞭ながら、ヘラナデのち外面は磨き仕上げされたようである。

2は軽石質の砥石と思われ、全体に面取りされている。

• 017号跡 (第53図)

1は胸径推定で300mm程の細頸壺の肩部分である。肩から胴にかけて少くとも2段の羽状細縞文が施されるが、原体の巻き付け方の違いか、文様の強・弱が交互に表われる。2は口径140mm前後の甕である。口辺はゆるやかに開き、長胴形を呈すと思われる。口唇は上から棒状具で押捺したため、小波状をなす。外面は丁寧な横ナデ、内面頸部には強いヘラナデの痕が



第53図 017号跡出土遺物実測図

住居跡

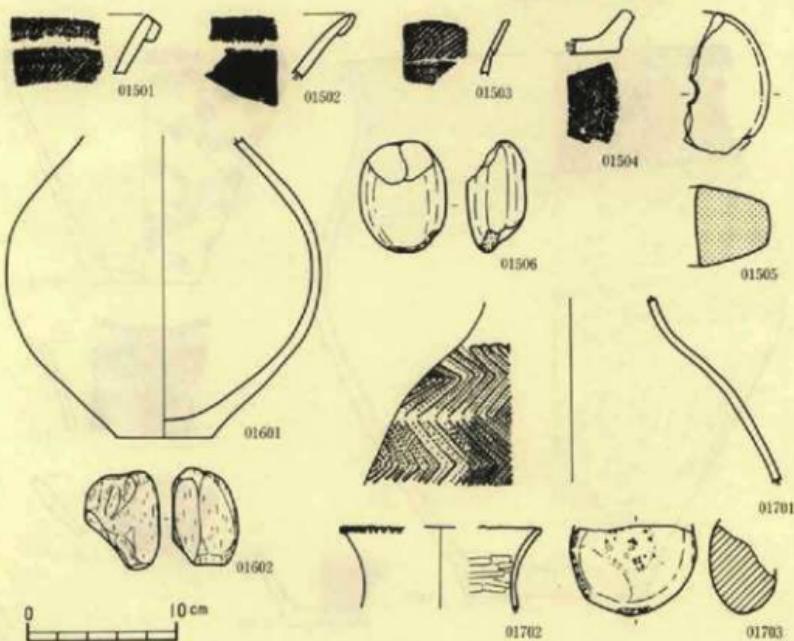
みられる。

3は花崗岩質の磨石で、側面の隨所に磨碎の痕が残る。

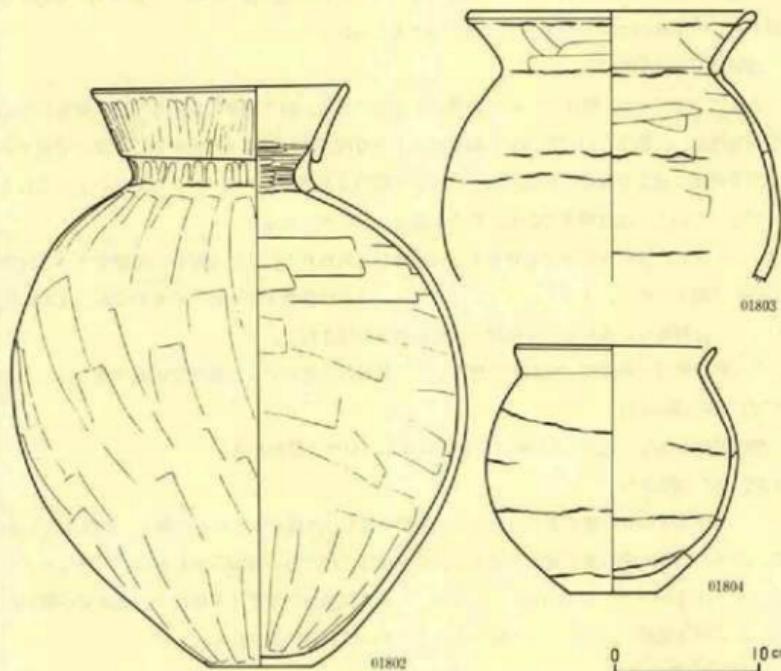
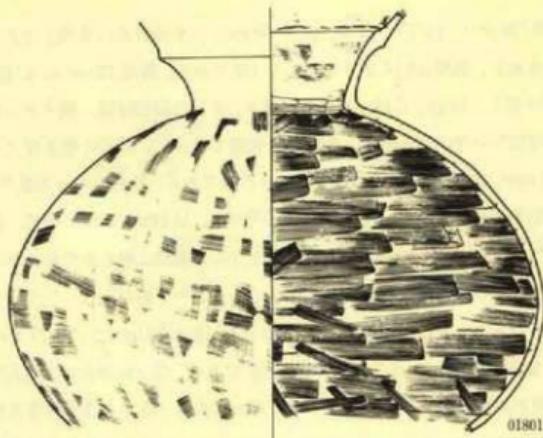
・018号跡（第54図）

1は大形の壺である。現存高312mm、頸径115mm、胴径362mmを測る。胴は扁平球形で下方で強く張り出す。頸は「く」字を開き、口辺で鋭い稜がめぐる。口縁内部にもこの稜に対応する明瞭な段がみられる。胴の内、外ともハケ調整されるが、外面では肩部で縱、斜方向、胸部で横方向に軽く行われ、内面では全体にはっきりとハケ目の残る程、強くナデつけられる。なお肩部には放射状とも格子目ともつかない赤彩による文様がみられる。2も壺である。器高402mm、口頭178mm、頸径124mm、胴径320mm、底径71mmを測るが、かなり歪みがある。胴は丸味の強い長胴形で、頸は短く口辺には60mmの幅広の帯がめぐる。口縁から頸にかけては幅広の磨き仕上げがみられる。胴以下は被熱のため磨耗が著しく、整形の際のヘラ削りの痕がみられるのみである。

3・4は壺である。3は口径197mm、胴径234mmで、口縁は「く」字を開く、4は器高



第53図 015~017号跡出土遺物実測図



第54図 018号路出土遺物実測図

住居跡

171 mm、口径 139 mm、胴径 174 mm、底径 60 mm のやや長めの球胴形である。ともに被熱のため器面が荒廃し、調整は明らかでない。5 は壺である。器高 125 mm、口径 200 mm、底径 58 mm の鉢形を呈し、口辺下に積上げの痕を残す。この口辺部は軽い横ナデのためハケ目が消えるが、体部は強いハケナデが残る。内面は不明瞭であるが、恐らく磨き仕上げであろう。

6 は器高 78 mm、口径 136 mm、底径 40 mm の塊である。被熱のため調整不明である。7・8 は器形の酷似する高壺である。壺部は口径 170 mm、164 mm の深い形で、脚は円筒状をなし、裾は比較的小さい。ともに表面が荒れているため、調整は明らかでないが、7 は全体にヘラナデのまま、8 はさらに磨き仕上げが施されているようである。

9~33 は土玉である。9 は径 37 mm と大きいが、他は 26 mm 3 点、27 mm 3 点、28 mm 10 点、29 mm 5 点、30 mm 3 点で、すべて完形品である。胎土は緻密で、明黄色を呈し、殆どのものに黒斑がみられる。手によって丁寧に丸められ、一方から縫様の穿孔がなされる点などを含め、同時に作成されたことは間違いないだろう。この他に径 42 mm の棒様刺突のある紡錘車や、管玉状の土製品があるが、混入品と考えられる。

・019号跡（第55図）

1 は口径 193 mm、頸径 161 mm の壺の上半部である。胴は扁平な球形を呈し、頭部はゆるやかに内反し、頭部と口辺部の境に輪積痕のような段があり、幅 60 mm の口辺帯を形成する。口辺帯全体に繩文を施し、肩部には 2 条の S 字結節文を 2 段めぐらし、さらにその上にこれをくり返している。地は繩文である。内面上部はヘラナデされる。

2~4 とも口縁帯を形成する鉢形または小形壺と思われる。2 は全面的に細繩文を、3 は口唇のみに繩文を施し、4 は荒いヘラナデである。3 の口縁帯下端にはヘラ先刺突が、4 の口唇にはヘラ先押捺がみられる。4 は壺で全面細繩文が施される。

6 は細粒軟質の砂岩で、分胴形の磨石、7 は軽石質の砥石で、金属的な切痕が残る。

・021号跡（第55図）

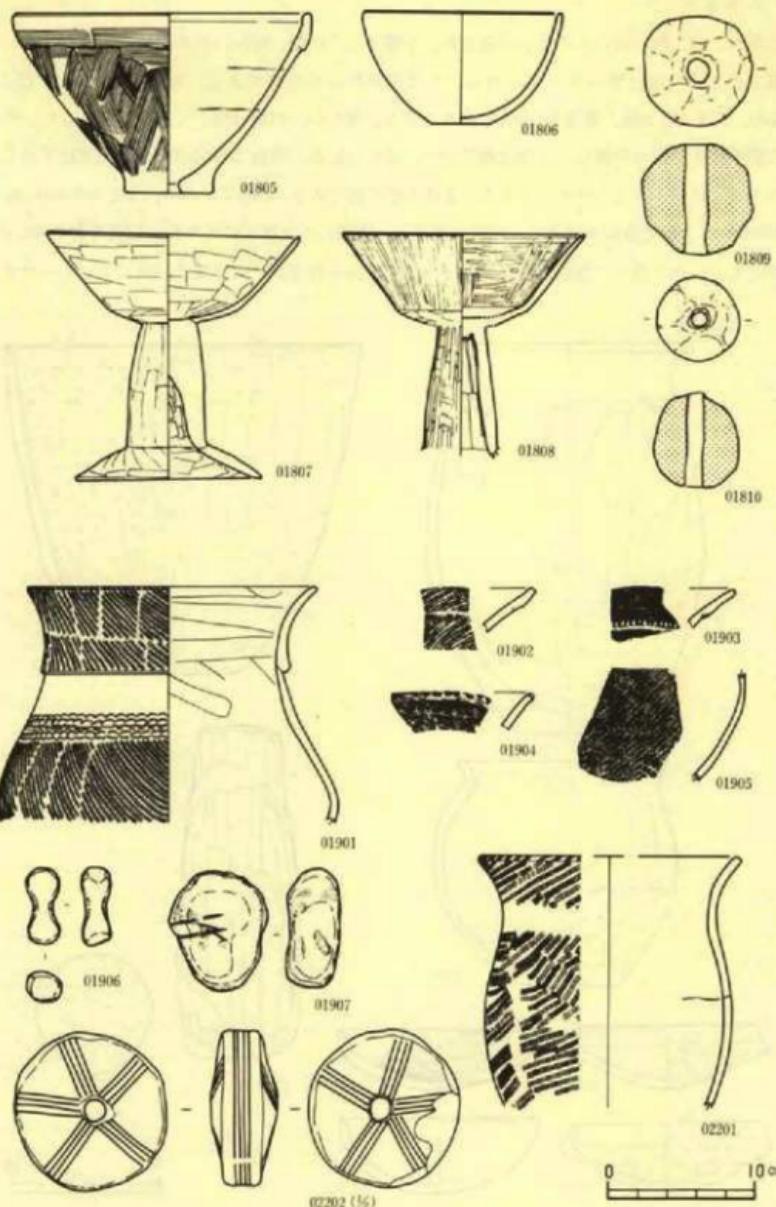
壺の底部がある。底径 65 mm で、胴部は球形を呈すと思われる。

・022号跡（第55図）

1 は口径 173 mm の壺である。全体に寸胴形を呈し、口縁でゆるやかに開く、頭部の 15 mm 幅を除き、口唇に至るまで繩文を施すが、交互に巻き付け方の強弱が表われる。内面はナデである。2 は径 54 mm、厚 23 mm の紡錘車である。側面は平滑で 4 条櫛により横走文が描かれる。両平面は笠形にふくらみ、同櫛によって 5 本の放射線が施される。

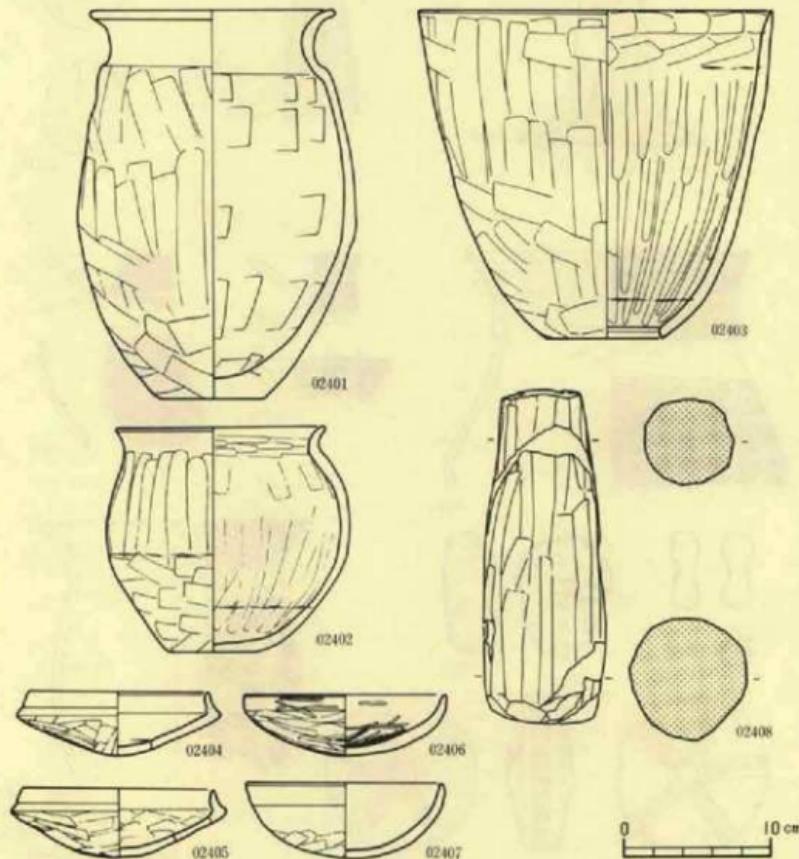
・024号跡（第56図）

1 は長胴壺である。器高 260 mm、口径 168 mm、胴径 190 mm、底径 68 mm を測り、やや歪む。頭部は直立に近く、口縁で大きく外反する。肩部には明瞭な棱を有す。外面は上から順



第55圖 018~022號跡出土遺物實測圖

に斜め、縦、横の荒いヘラ削りが施され、下部はとくに強い削りのため面取りされたままの状態である。内面は横ヘラナデされる。2は球胴形の小形甌である。器高152 mm、口径143 mm、胴径165 mm、底径58 mmを測り、歪みが著しい。口縁は短かく、余り開かない。外面は胴中位まで縱ヘラ削り、下部は横位にヘラ削りされる。内面は頸部が横に、胴部は下から上へかき上げるようなヘラナデである。3は大形の甌である。器高222 mm、口径240 mm、底径80 mmと下端で急にすぼまる。口縁は直立し、内縁のヘラ削りにより鋭い口唇を形作る。内、外とも荒いヘラ削りで面取りされたままの状態がみられるが、内面はその後に下からヘラナデ



第56図 024号跡出土遺物実測図

調整される。

4～7は壺である。4・5は器高45mmで、口縁が内反し、退化した稜を有し、底部は尖り氣味となる点で酷似の器形である。外体部は荒いヘラ削りのままである。6は器高41mm、口径138mmの丸底で、口縁は直立するが、稜はみられない。外面はヘラ削りのち、内面とともに磨き上げられる。7は器高50mm、口径135mmの壺に近い器形で、底部のみにヘラ削りの痕が残る。

8は長さ225mm、上径52mm、下径80mm前後の支脚である。ヘラにより面取りされたままで、かなり脆い。

これらは、中央床面出土の7を除き、完形品であり、良好なセット関係を示す。

・025A号跡（第57図）

1は口径250mm、頸径135mmの広口壺である。頸部は直立し、口辺から急に開き始め、口縁には幅25mmの帯がめぐる。口縁帯のため口唇は「T」字状となる。口縁帯上には繩文を施し、その下端は棒様具押捺が列をなす。頸部は2段のS字結節文、羽状繩文、竹管刺突列が上下の文様帶を形成する。なお外面の無文部および内面にはあざやかな赤彩が認められる。

2は口径170mm、頸径130mmの壺である。口辺はゆるやかに開き、肩部には輪積痕跡が一段だけ残る。この痕の上には竹管刺突列がめぐる。口唇には繩文原体を転がして装飾する。内、外の調整はヘラナデのようであるが、器面の荒廃のため不明瞭である。3も壺片であろう。地に撚糸文を施す。

・025B号跡（第57図）

1は小形の広口壺の口縁であろう。口縁から頸にかけて、3条櫛の上弦連弧文が少くとも3段めぐる。2も壺の胴下半であろう。現存高80mm、底径60mmを測り、かなり長胴形を呈すことがわかる。遺存する上端には半截竹管により、1重の四角文が連続するとみられ、そのいくつかには、中に「X」印も描かれるようである。地は撚糸文であるが、一部荒廃のため不明瞭であり、内面は最終的に簡単な磨きがみられる。

・026号跡（第57図）

1は細頭壺の頸部分である。口径125mm、頸径92mmを測る大形品である。044号跡出土のものと比べ、口縁の開きはゆるやかで、わずかに短かい。内・外の調整はヘラナデにより、口縁付近の3個所に3条のヘラ書き三角文が描かれる。また肩部以下には繩文が施される。この他に手捏ねのミニチュア土器や、径30mmの土玉が出土した。

・028号跡（第57図）

2は細頭壺の肩部破片である。半截竹管による連続渦巻文が描かれ、文様下端から地の細繩文が施される。1は口径118mm、推定器高150mmの小形壺である。ほっそりとした長胴形

住居跡

で、口縁はゆるやかに開く。全体の調整は不明工具によるナデで、口唇には燃糸原体を転がし、肩部以下の地は燃糸文である。

・029号跡（第57図）

1は壺の肩部と思われる。頸部文様帶は細いヘラによる格子文で、下端は横走沈線で区画される。肩部は無文で、下部以下に地繩文が施される。本遺跡でも唯一の文様である。2は壺片であろうか、地繩文がみられる。3は壺の底部と考える。底径90mmで、木葉痕が明らかである。全体にヘラナデ調整されるが、外面は面取りのような凹凸が残ったままの状態を示す。

・030号跡

わずかな破片から考えると、古式土師器の塊のような土器が含まれるようである。

・031号跡（第58図）

1は現存高145mm、口頭220mm前後を測る鉢である。頸、胴の区別なく円錐状に開く。口唇は外横からの指頭押圧を受け、痕跡の右端には爪痕も残る。内・外とも荒いハケナデがなされ、内面下半はさらにヘラナデされる。

2～4は恐らくは細頸壺の破片であろう。2は胴上部片で、半截竹管による連続溝巻文、3も同部位で、同工具によって5～6段の連続山形文のような文様を描く。4は胴下半で燃糸文を地文とする。5は壺片であろうか。地繩文がみられる。

・033号跡（第58図）

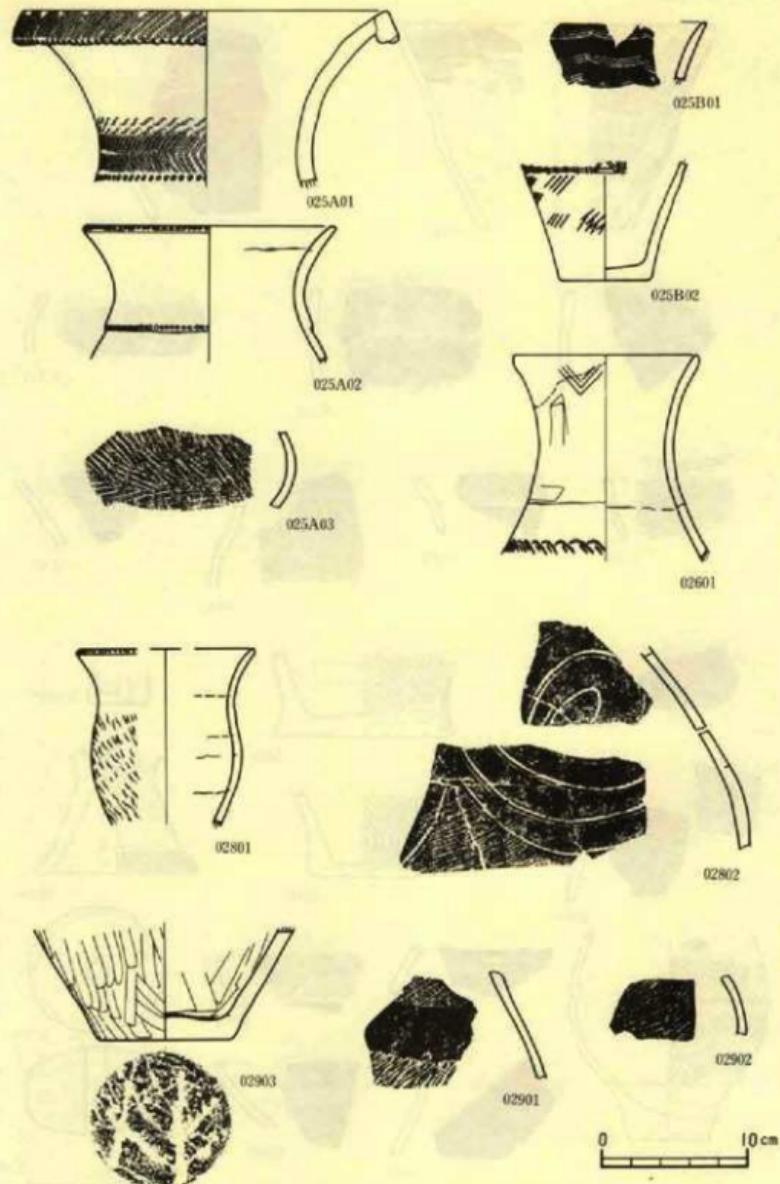
1は推定口径75mmの口縁部片である。幅40mmの口縁帶には、口唇を含めて繩文が施される。2は広口壺の口縁であろうか。口縁帶上には細燃糸文がみられる。3は壺肩部片である。S字結節文2段以下は細繩文が地文となる。4は中央で結束して羽状繩文をなす破片で器種は不明である。

・034号跡（第58図）

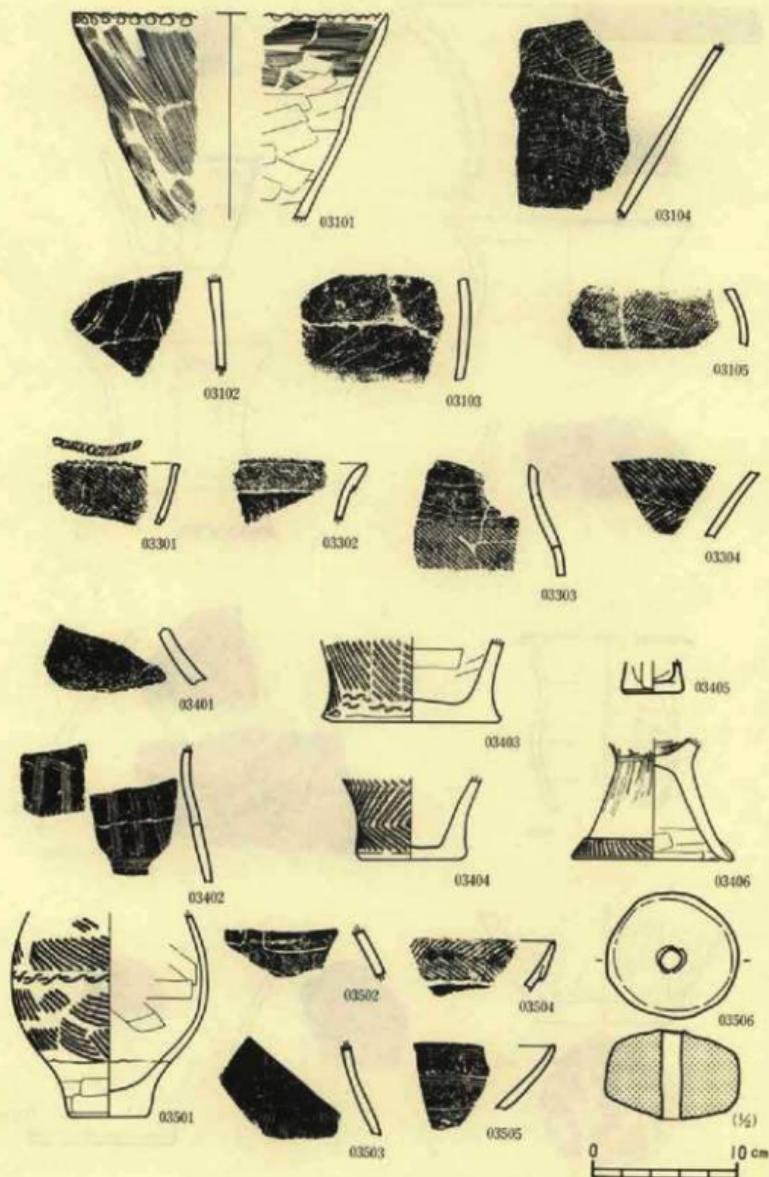
1は細頸壺肩部片で、S字結節文が2段まで認められる。2は広口壺であろうか、5条櫛により、重四角文の変型が描かれる。3、4とも底部であるが器形は明らかでない。3は底径118mmで木葉痕が残る。地文は繩文でその下端にはS字結節文がみられる。4は底径70mmで、やはり木葉痕が残る。外面には羽状繩文が施される。ともに内面はヘラナデされる。6は底径110、脚高68mmの高壺である。壺には貼付帯をめぐらし、繩文を施す。脚部から壺部にかけて全体を磨き上げている。壺部は恐らく鉢形となろう。5は手捏ねによるミニチュア土器である。

・035号跡（第58図）

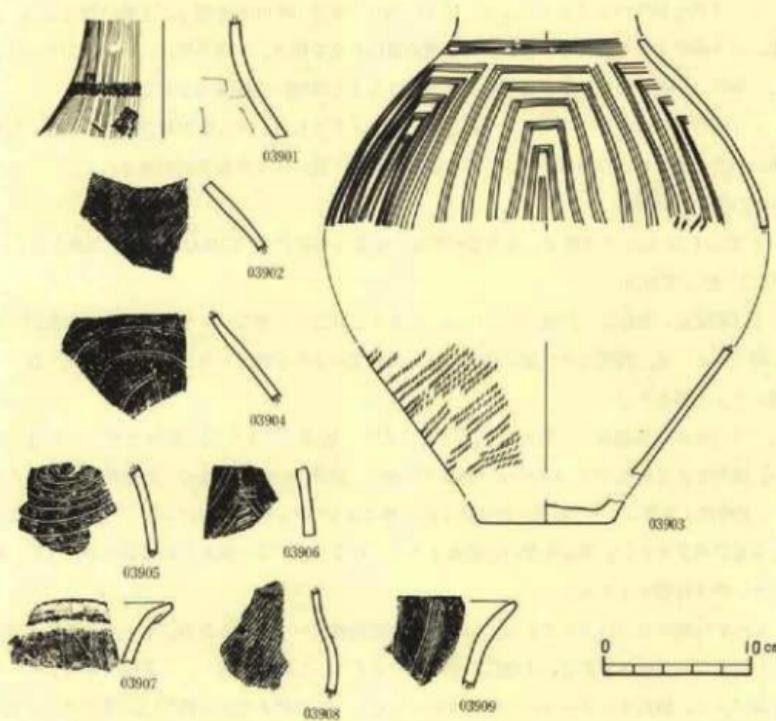
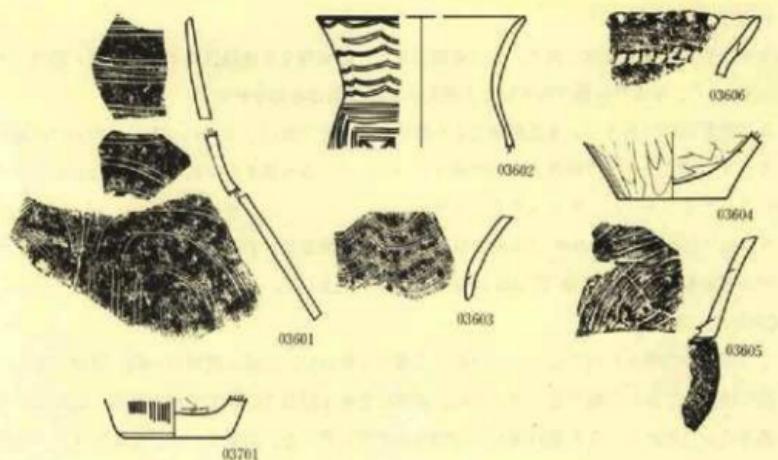
1は壺である。現存高140mm、胴径135mm、底径53mmを測る長胴の小形品である。全体にヘラナデ調整され、繩文が施される。胴の中央付近には原体の結び目がみられる。かなり



第57図 025～029号跡出土遺物実測図



第58図 031～035号跡出土遺物実測図



第59图 036~039号坑出土遗物实测图

突き出た底部には木葉痕が残る。2は壺肩部片で、磨消繩文を沈線区画する。文様の形状は不明だが、「ハ」字または梢円形を呈すと思われる。無文部は赤彩される。

3は壺肩部片であろう。9条細節により縦区画と横走文数段が描かれ、胴には撚糸文が施される。4は鉢である。口縁帯上に羽状繩文がみられる。5も鉢または高坏とも思われる。3条櫛により少くとも3段の横走文をめぐらす。

6は径44mm、厚30mmのずんぐりした造りの筋縫車で、表面はヘラナデ調整される。またこの他にも径55mm、厚27mmの半欠筋縫車が出土している。

・036号跡（第59図）

1は細頸壺の頸から肩部にかけての破片で接合しないが、土器の観察から同一個体である。工具には先の乱れた半截竹管が用いられ、頸部に2条3段以上の横走文が、肩部には稚拙な連続満巻文が描かれる。5も他の例から同類の壺底部と考える。胴全体に撚糸文が施され、底部には敷物痕が残る。

2・3は小形広口壺である。2は口径143mm、頸径108mmを測る。半截竹管により、頸部には6段の上弦連弧文を、胸部には5重の重四角文を描き、四角内側には「×」印がみられる。胴部は小破片のため単位は不明である。3も2と同様の文様構成である。

4は底径74mmで、内外および底部までヘラナデされる。6は壺口縁部であろうか。口縁帯はハケナデされ、口唇は外縁からの棒様具押捺、下端はヘラ先刺突列が施される。

・037号跡（第59図）

1は底径70mmの底部で、木葉痕が残る。地文は撚糸文で、内面はヘラナデが施される。

・039号跡（第59図）

1は細頸壺の頸部で、頸径103mm以下である。外面は丁寧なハケナデが施され、頸部下端に繩文がめぐる。肩部には同種の繩文による山形文のような痕跡がみられる。2も同一類で、繩文が2段横走する。

3は肩部が少しがれ遺存し、胸部は少しがれの破片だが、底部とともに同一個体と考えて間違いない。復元すると器高410～430mm、胴径310mm、底径90mm前後の大形細頸壺と考えられる。文様は3条櫛により、肩部上端には2段の横走文を描く。肩から胴にかけては同工具によって5重四角文を施し、最も中側には縦線1本を入れるが、下端の横走区画は認められない。胴下半の地文は撚糸文である。

4～6は細頸壺の肩部片である。いずれも連続満巻文の一部であるが、4・6は半截竹管により、5はヘラ書きである。7は広口壺口縁であろう。口縁帯を有し、6条櫛描きの2本一対の縦区画と、横走する2～3段の小波文が施される。8は撚糸地文の壺片で、頸部には3条櫛描きの文様がわずかにみられる。9は器肉の厚い鉢で、7本細櫛により縦走文が描かれる。

・040号跡（第60図）

1は口径 180 mm の長胴壺である。短かい口縁部はわずかに立上がり、口唇で受口状となる。外面は上半が継ぎ、下半が横位の荒いヘラ削りで、内面も荒い指頭横ナデにより調整される。他の土師器壺に比べ、器肉が厚く、粗雑な造りである。

2は丸味の強い深い器形の壺である。口径 128 mm、器高 51 mm、底径 52 mm を測る。底部は回転糸切り離しで、体端を含め無調整で、内面は丁寧な磨き仕上げである。他に大形の広底壺の底部片などがある。

3は長さ 170 mm、上径 70 mm、下径 110 mm の扁平な支脚で、かなり硬く焼き上げられる。4は硬質砂岩質、5は細粒の軟質砂岩質の砥石であろうが、ともに明瞭な砥面はない。

・041号跡（第60図）

1は現存高 155 mm、口径 169 mm、胴径 180 mm の壺である。口縁は「く」字に直線的に開き、胴はやや下彫れとなる。外全面および内口縁には、はっきりとしたハケナデ調整がなされ、頸部はヘラにより面取りされる。外面には炭化物が全体に付着している。

2は器台である。器高 84 mm、口径 71 mm、底径 106 mm を測る。受部は浅く大きく開き、脚部は末広がりに裾へと続く。脚の中央には 3 孔の透しが穿たれ、内側には貫通孔がみられる。脚の内外ともハケナデが施され、その後に器全体は磨き上げられる。

・042号跡（第60図）

1は細頸壺の口縁であろうか。内外ともに縄文が施され、外面には 2 重の波状沈線が描かれる。2も口縁片で外面に縄文が、内面は磨き上げられる。3は肩部片で、半截竹管による渦巻文がみられる。4は鉢の口縁であろうか、口唇には棒様具の刺突がめぐる。

・043号跡（第60図）

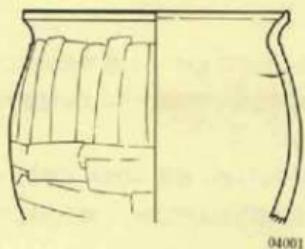
1は器種不明の口縁片で、縄文が施される。縄文の間隔は粗く、交互に強弱が表われる。

・044号跡（第61図）

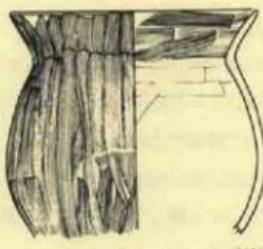
1～3は細頸壺である。大きさや器形、文様構成など似た点も多いが、詳細に記述する。

1は器高 485 mm、口径 131 mm、頸径 89 mm、胴径 344 mm、底径 100 mm を測る。器形の特徴は、かなり肩部の張り出すこと、頸部が急速にすぼまり、口縁でラッパ状に開くことなどが挙げられる。内外表面とも剥落や磨耗が著しく、整形、調整は不明である。文様は最大幅 3.3 mm の 4 条櫛工具によって、頸部から肩部にかけて描かれる。頸部には 2～3 条の横走文が 2 段認められ、口縁部には 1 条の連弧文が描かれた可能性がある。肩部には 5 単位の連続渦巻文があり、その上下にはこれを囲んで各々 3 重、1 重の連弧文がみられる。地の撚糸文は間隔が粗い。

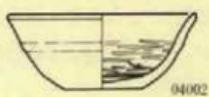
2は上下接合しないが同一個体であることは間違いない。口縁部は遺存しないが、推定器高



04001



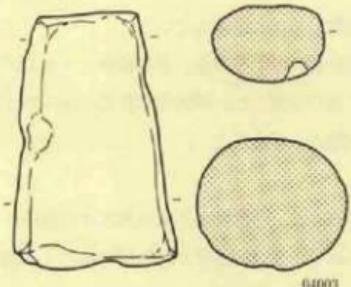
04101



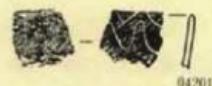
04002



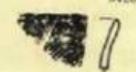
04102



04003



04201



04202



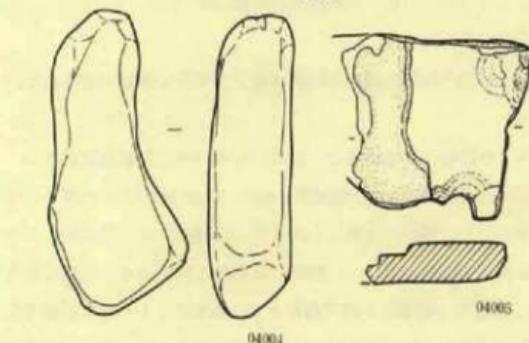
04203



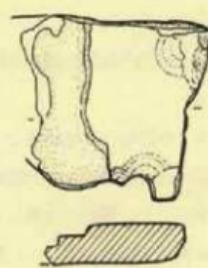
04204



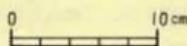
04301



04004



04005



第60図 040~043号跡出土遺物実測図

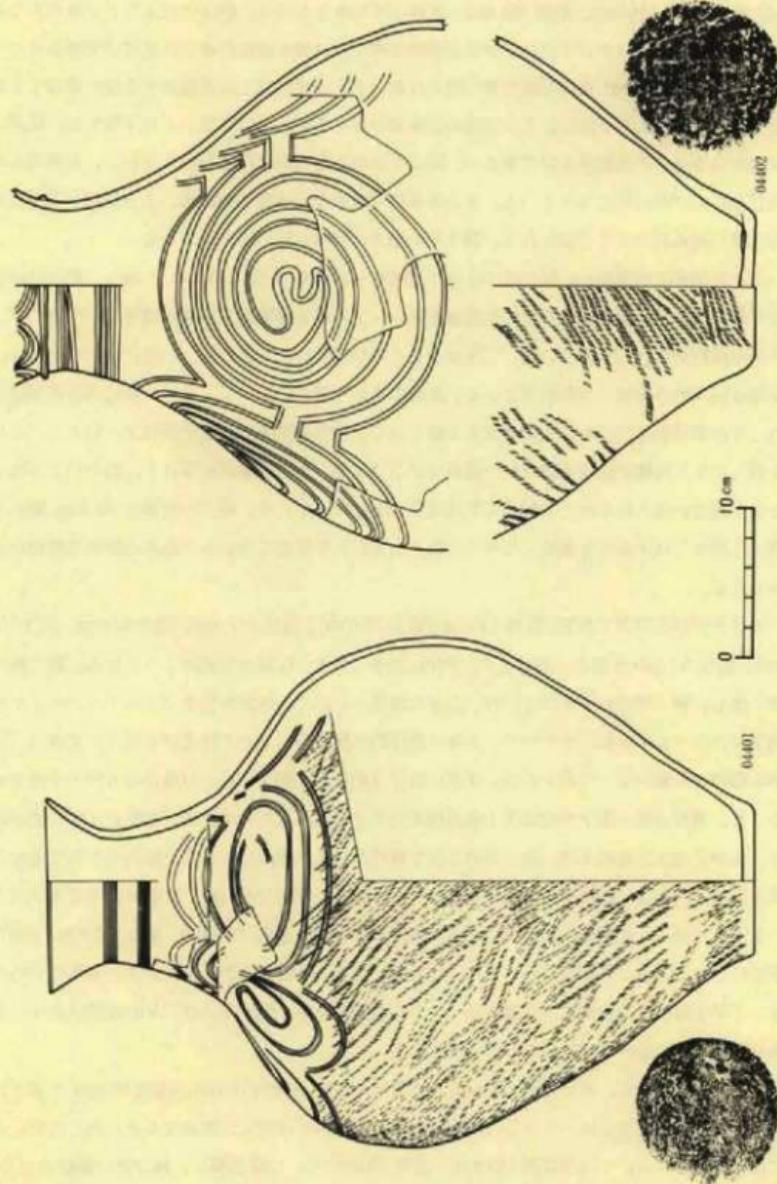
530 mm、頸径 116 mm、胴径 364 mm、底径 100 mm となろう。胴は中位より下で最大となるよう、肩から頭にかけてはゆるやかな曲線を描く。口縁と頸部の境には貼付け突帯をめぐらす。文様は径 35 mm 程の半截竹管で描かれる。まず口縁には上弦連弧文を 2 段に重ねて 9 単位表わす。突帯より下部には上下 2 段の描走文がめぐるが、上は 3 重、下は 4 重する。肩部の文様帶は 5 単位の連続渦巻文であるが、図の正面から左方向に描き始めたためか、右奥の 5 単位目は歪んだ長円形になっている。また各単位の連接部は横線で結ばれ、1 と同様上下 3 ないし 1 重の連弧文のように描かれる。胴下半の地文は間隔の粗い撲糸文である。

3 は肩部までが遺存し、現存高 415 mm、胴径 345 mm、底径 110 mm を測る、胴はほぼ中位で最大となり、肩部はゆるやかな曲線を描く。1・2 と同様施文以前の調整は不明瞭だが、内面の観察から、ヘラ削りの後、丁寧なヘラナデが施されたと思われ、一部には光沢が残る。文様は幅 4 mm 前後の半截竹管による。肩部中央から胴部にかけて、やはり連続渦巻文が描かれ、その最外端は明らかに次の渦巻文と続く点で、正確な意味での連続渦巻文といえる。これを囲んで 2 と同様の横線で結ばれた連弧文が下で 1 重、上で 5 重認められる。胴中位より地文として繩文が施されるが、文様の下半は地文の上にのっている。繩文の原体は 11 mm 間隔と粗く、恐らくは 4 条で 1 単位となろう。以上の 3 点とも底部には細かい編みの酷似の敷物痕がみられる。

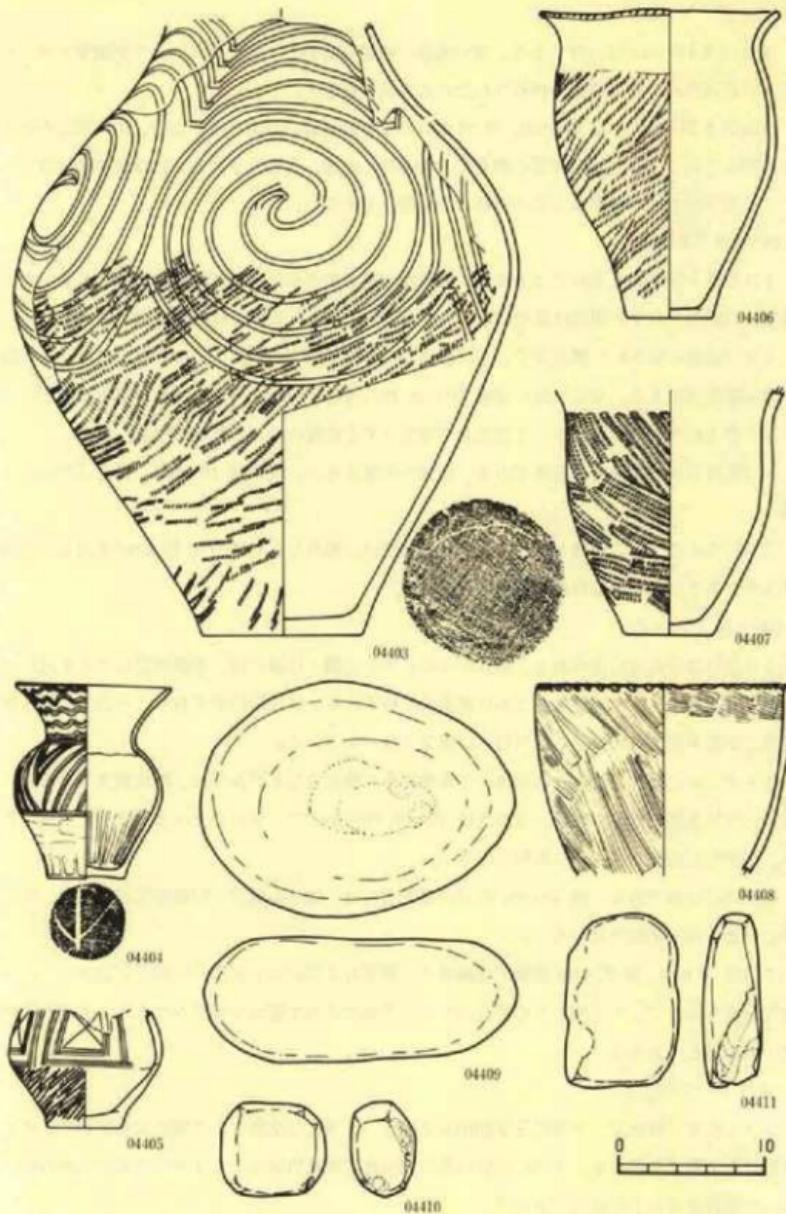
4 は小形の広口壺である。器高 130 mm(頸長 38 mm)、口径 107 mm、頸径 60 mm、胴径 101 mm、底径 52 mm を測る。頭は「く」字状に大きく開き、口縁は朝顔のようになる。肩は強く張り出し、胴下半でわずかにくびれ、大きな底部へと続く。外面の調整は上へ下へのヘラナデ、胴下端は下へ上への強いナデツケ、さらに全体的に横位のヘラナデ仕上げを行う。文様は 3.4 mm 幅の 3 条櫛によって描かれる。まず口唇には櫛先刺突がなされ、口縁部は 5 段の小波文がめぐる。頭接合部と胴下半部は各 1 条の横走文で区画され、その中に重三角文が 4 単位描かれる。1 単位は正三角形 4 個、逆三角形 2 個で構成される。最後にこれら文様の間に無文部に赤彩を施す。内面は口縁部横ナデ、胴部は下からの磨き上げが行なわれ、底部には木葉痕が残る。

5 もやや扁平な球胴形の小形壺である。現存高 80 mm、胴径 104 mm、底径 50 mm を測り、下膨れとなる。肩から胴部にかけては、3 条櫛による 2 重四角文が、全体を 5 ~ 6 単位でめぐり、1 単位毎にその内側にヘラ書きの「×」印が描かれる。胴下半には 7.5 mm 間隔の 4 ~ 5 条の撲糸文が、2 ~ 3 度にわたって施文される。

6・7 は甕である。6 は器高 160 mm、口径 165 mm、胴径 151 mm、底径 60 mm を測り、肩部近くで最大となるほっそりした胴形である。肩部以下は地文に撲糸文がみられ、口唇にもこれが転がされる。7 は現存高 165 mm、底径 60 mm で、口縁の開く、鉢に近い器形となる。頸部以下に繩文を施す。



第61图 044号器出土物实测图



第62圖 044號跡出土遺物實測圖

8は口径 170 mm 程の鉢である。深い塊形の特異な器形で、外全面にハケナデ調整がみられる。口唇は外縁から棒様具を押捺されたため小波状を呈す。

9は長さ 215 mm、幅 160 mm、厚 84 mm の硬質砂岩質の石皿状の石器で、中央部分がわずかに凹んでいる。10は安山岩質の磨石で、全面的に研磨、面取りされる。11は細粒砂岩質のもので、両平面が平滑であることから砥石の可能性もある。

・045号跡（第63図）

1は頭径 123 mm と太めではあるが、細頸壺の類であろう。肩から口縁にかけゆるやかな曲線で、口縁帯を有す。頸部は継位の細いヘラナデ仕上げされる。文様要素には3種ある。

1は口縁帯に施された燃糸文で、2は肩部にみられる地文の繩文、3はその上にめぐる3段のS字結節文である。なお内面には幅 10 mm 程の接合痕が明らかで、これが粘土紐巻上げによって作られたことがわかる。2は燃糸を地文とする底部片で、木葉痕が残る。

3は花崗岩質の所謂有角石斧である。頭部を欠損するが、現存長 105 mm、刃幅 72 mm を測る。

全体に極めて丁寧に研磨され、とくに刃先は鋭い。両角とも本体から 10 mm 突出し、先端は丸味がある。握りの部分は断面梢円形を呈す。

・046号跡（第63図）

1は壺の口縁の可能性がある。頸部からゆるやかに開く口縁には、半截竹管による7段以上の横走文がめぐり、内縁にはわずかに燃糸文が施される。2は口縁帯を有し、その上にはS字結節文が数条施され、さらに口唇には繩文を転がしている。

3・4ともに壺である。3は頸部に3条櫛描きの横走文などがみられ、地は繩文である。4は地に付加条繩文が施される。5は底径 70 mm 程のもので、下から上へとヘラナデが施される。突出した底部の様相から鉢形となろう。

6は鉢の口縁である。幅 40 mm 程の口縁帯上には、体部の地文と同様繩文が施され、体上端には2条のS字結節文がめぐる。

7は径 56 mm、厚 22 mm 前後の紡錘車で、側面および図の上面のみに繩文が施される。中央孔は径 8 mm で、一方向よりの穿孔のため、上面にみみず跡が明らかである。8は軟質砂岩の小形砥石であろう。

・047号跡（第63図）

1は大形壺の肩部で、下方にS字結節文を配し、上方には沈線により鋸歯文を描いて、その中间は磨消繩文で埋める。2は小形広口壺の肩部片で半截竹管による4重四角文が描かれる。

3は軟質砂岩質の小形砥石であろう。



第63圖 045~047号跡出土遺物実測図

・048号跡（第64図）

1は胴径 307 mm、底径 110 mm の球胴形の壺である。器面が荒廃しているため調整は不明であるが、外面に幅 10 mm の粘土紐巻上げ成形の痕が明らかである。底部には木葉痕が残る。

2は小形壺の類であろう。現存高 140 mm、口径 132 mm、胴径 143 mm を測る。広口の口縁は長く、直線的に開き、肩が張り出す。調整は不明で、口唇および肩部下端にはヘラ先様の刺突列がめぐる。3は器高 90 mm、口径 221 mm、底径 57 mm の鉢である。截円錐形の整った器形で、口縁には帯がめぐる。外面はヘラナデ、内面は横位の磨き仕上げがなされる。

・049号跡（第64図）

1は現存高 155 mm、口径 235 mm と推定される鉢である。頭部で「く」字状にくびれる器形で、口唇は外縁から指頭圧を加え、波状を呈す。外面は細めのヘラによるナデ、内面は横ヘラナデである。なお外面は煤により黒変する。2は軟質砂岩質の小形砥石である。

・051号跡

小破片のうちには、3条櫛および半截竹管による円形文（満巻文か）が 2・3 みられる。

・052号跡（第64図）

1は壺肩部片で、半截竹管による満巻文が描かれ、地は繩文である。2は壺片で、地に撚糸を施す。

・053号跡（第64図）

1は比較的大形の壺肩部片である。上端に S 字結節文を 4 条程配し、以下は羽状の細繩文がくり返されるようである。内面は丁寧にナデ仕上げされる。

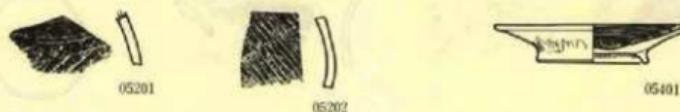
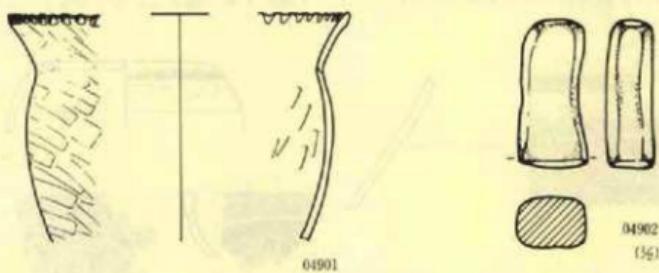
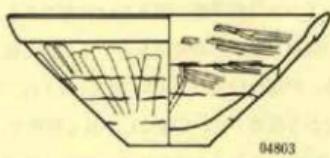
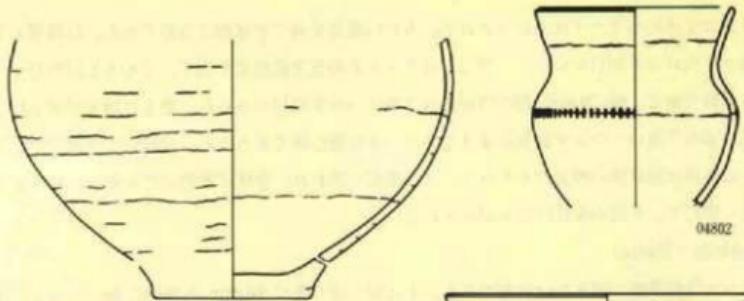
・054号跡（第64図）

1は高台付の皿である。器高 26 mm、口径 137 mm、坏底径、台径とも 76 mm を測る。坏底部の切離しは不明で、回転ヘラナデの痕が残る。貼付け高台との接合部は、ヘラナデによって調整される。内面は基本的に横位に丁寧な磨きがなされ、黒色処理される。他に同期のものがない。

・057号跡（第65図）

1は現存高 90 mm の細頸壺の肩部である。頭部には 6 条以上の沈線文がめぐり、無文帯を経て、繩文帯がみられる。内面は磨耗、剥落が著しい。2は小形球胴形の壺片である。S 字結節文 3 条が 2 段施され、以下には羽状細繩文が 1 段認められる。極めて堅緻な土器である。3はやはり細頸壺肩部で、3 条櫛により少くとも 5 重の満巻文が描かれる。4は木葉痕を残す底部片で、肩下端には細いヘラによる丁寧なナデが施され、内面は剥落が著しい。

5～7は無頸壺または壺の類である。5は口径 106 mm、胴径 177 mm を測り、ほぼ球形を呈す器形である。口縁には幅 20 mm 程の口縁帯をめぐらし、その下端は竹管刺突列が配される。



第64図 048~054号跡出土遺物実測図

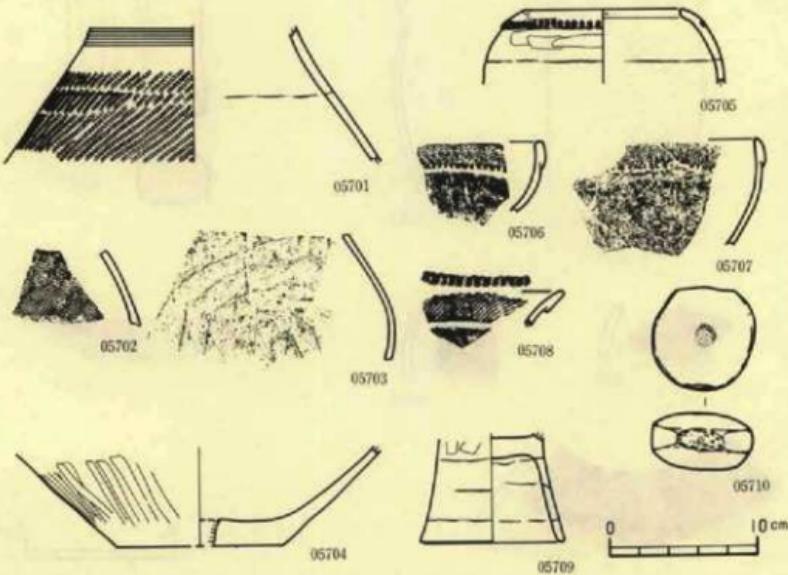
住居跡

外面は全体にヘラナデ仕上げなされる。6は口縁帯を有す半球形のものである。口縁帯の下端はヘラ先による刻目がめぐり、帶上には5~6条のS字結節文を施す。7も6と同形だが、より大形である。幅20mm程の口縁帯は下端にヘラ先刻目がみられ、帶上は繩文が施される。体部はかなり荒いヘラナデ調整のままである。8は甕口縁であろうか。口縁上には繩文が施され、口唇には同原体の押捺がみられる。9は脚部と思われ、全体に被熱のため脆い。10は安山岩質の磨石で、平面中央には凹みがみられる。

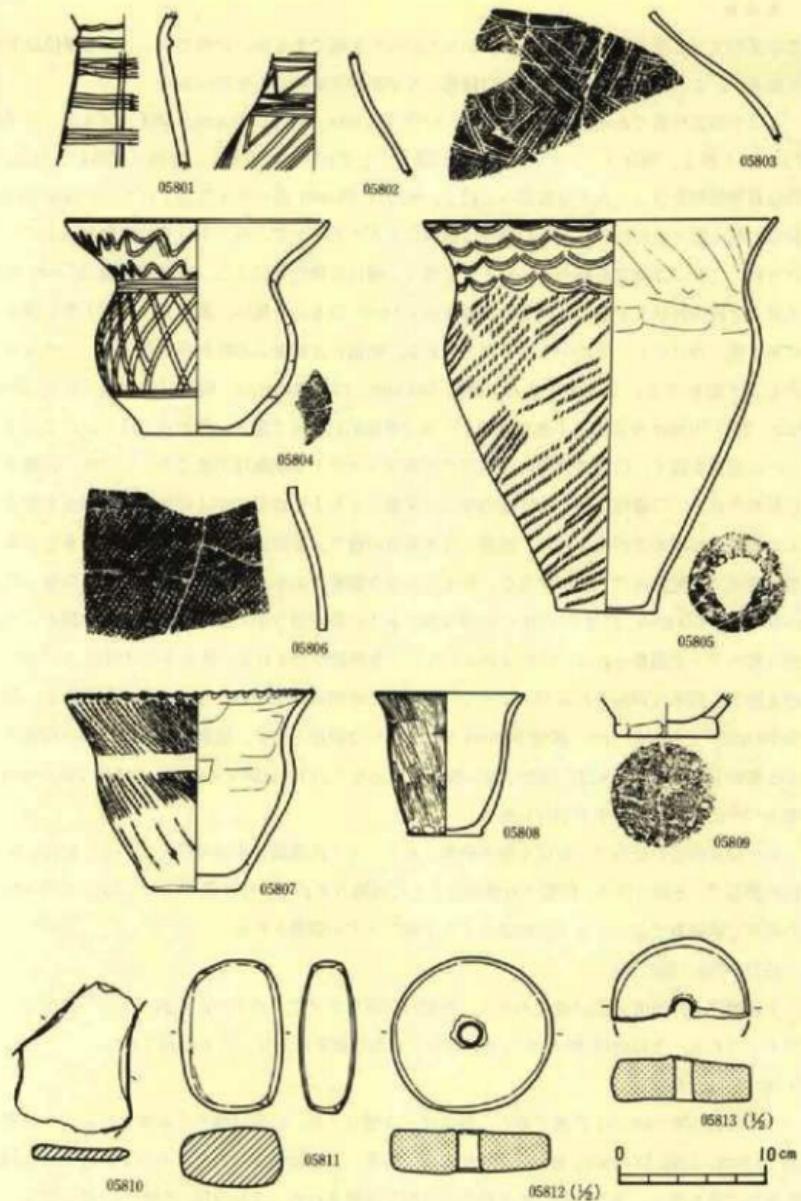
・058号跡（第66図）

1~3は細頸壺の頸または肩部である。1は頭上端の径が60mmと極端に細い。頭と口縁の境には造出しの突帯をめぐらす。口縁には幅3mmの半截竹管による上弦連弧文がみられる。頸部は同工具で4単位に区画され、さらにこれを貫通して、9mm幅の4条櫛による横走文が3段めぐる。文様はいずれも稚拙で、頸部の施文順なども一定しない。2も頭径60mm弱の比較的小形のものである。文様は幅2mm程の半截竹管を用いて、頸、肩部文様帯を描く。前者は上下に少くとも3重の横走文をめぐらし、その間には7単位の山形文を施す。

後者は中心の逆三角形を囲んで4~5重の三角形を1単位とし、4~5単位を描いている。3は肩部に半截竹管による文様がみられる。上、下端に1本の横走文をめぐらし、その間に4



第66図 057号跡出土遺物実測図



第66圖 058號跡出土遺物實測圖

重の菱形文と2重の三角文で埋める。かなり亞んだ文様であるが、全体で少くとも5単位以上となろう。この他に同形のもので、口縁部にS字結節文をめぐらす例がある。

4は小形広口壺である。器高145mm、口径182mm、頸径110mm、胴径136mm、底径75mmを測る。頸は「く」字状に開き、口縁より上でわずかに内溝し、全体に朝顔形となる。胴は扁平球形を呈し、大きな底部へと続く。成形は25mm幅の粘土帯巻上げで、口縁部は円盤状の粘土板と思われる。内外の調整は指頭によるナツケで、外下半はその後磨き仕上げがみられ、口唇には繩文を転がしている。文様は2種の半截竹管による。口縁部は幅2.7mmの工具で2段の波状文を描く。胴部の文様は幅4.2mmのものを用い、頸部および胴下半に横走文を2重にめぐらし、その中を格子文で埋める。底部には細編みの敷物痕が残るが、これは9のものと酷似する。5は甕である。器高263mm、口径243mm、頸径199mm、胴径216mm、底径70mmを測る。小さな底部からほぼ直線的に肩まで開き、肩から口縁にかけてゆるやかな曲線を描く。円面の調整は口縁部で丁寧なヘラナデで胴部は不明である。口唇には繩文が転がされる。口縁部には6mm幅前後の3条櫛により上弦連弧文が4段描かれ、胸部全面に5mm間隔の撚糸文が施される。底部には木葉痕が残り、外面は煤により黒変する。6も3条櫛の連弧文、地撚糸文と酷似するが、胎土はかなり緻密である。7は器高135mm、口径170mm、胴径135mm、底径64mmの部厚な鉢である。肩が張り出し、口縁は直線的に開く。内面は横ヘラナデ調整される。口唇は外縁からヘラ先押捺がなされる。胴全体には肩部の15mm幅を除き、撚糸文が施されるが、下半では磨耗のため明らかでない。8も小形の鉢である。器高96mm、口径103mm、底径50mmで、全体に寸胴形を呈す。底部の接合のための指頭様の圧痕が下端に残る。内面の調整は粗い横ナデであろう。口唇は繩文を転がし、外面は幅6mm程のハケにより、荒いナデが行われる。

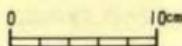
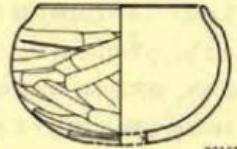
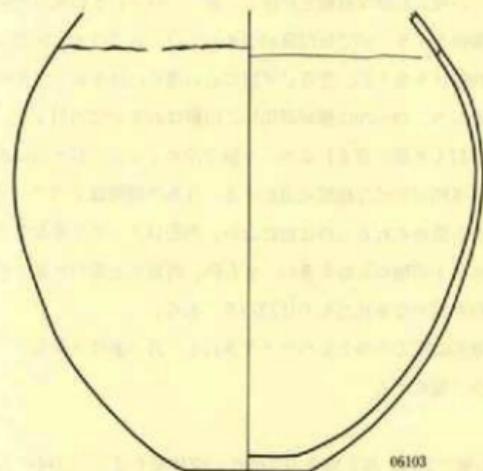
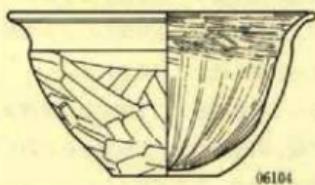
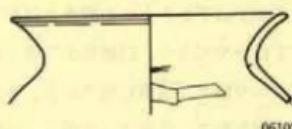
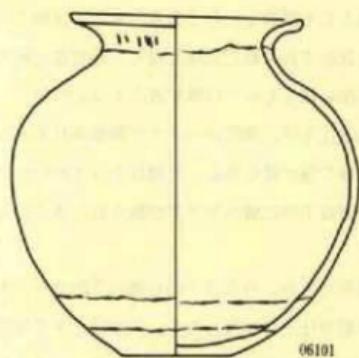
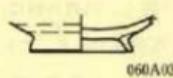
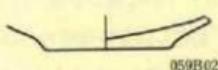
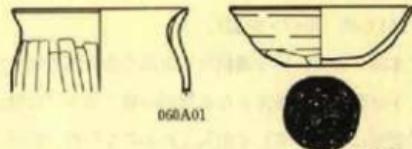
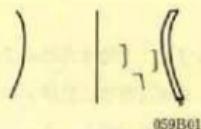
10は硬質砂岩の砥石で、裏面を除き研磨される。とくに表面は中央で凹んでいる。11は花崗岩の磨石で、上端を除き、研磨され側面はとくに面取りされる。12は径54mm、13は径46mmの扁平な紡錘車である。ともに指頭により丁寧なナデが調整される。

・059B号跡（第67図）

1は頸径100mmの広口壺であろう。外面は丁寧なナデで、わずかに光沢があり、内面はヘラナデされる。2は底径86mmの壺底部で、外面は磨き仕上げのち赤彩される。

・060A号跡（第67図）

1は口径120mmの小形甕である。外面はヘラ削りされ、内面は横ナデがなされる。2は器高39mm、口径123mm、底径51mmの壺である。体部はかなりの丸味を有す。底部には回転糸切の痕が残り、体下端を含め手持ちヘラ削り調整される。3は台径70mmの高台付皿である。切離しは不明である。



第67図 059~061号跡出土遺物実測図

・061号跡（第67・68図）

本跡に確実に伴う遺物は土製品を含め25点出土した。そのうち3・7を除き完形品である。

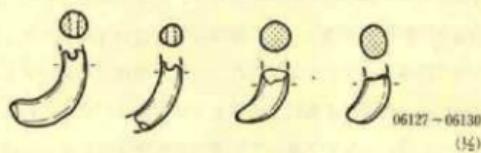
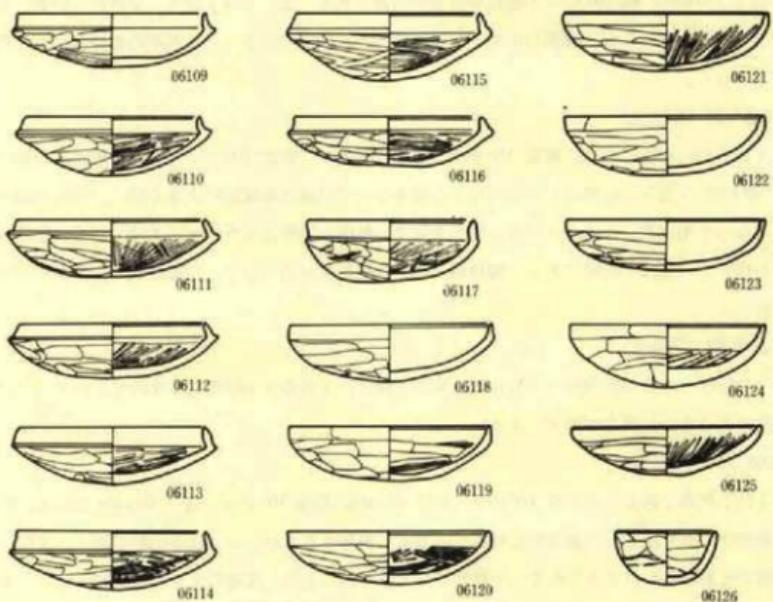
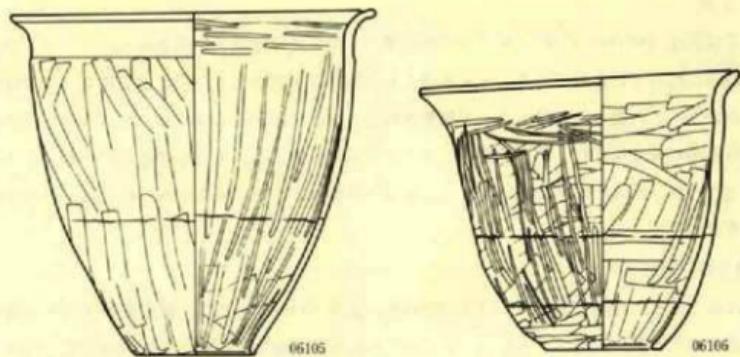
1は胴上半で最大となる球形の甕である。口縁は極端に開き、先端は帯状に肥厚する。内外の調整は磨耗が著しく殆んどわからないが、頭部にヘラ先の押えた痕跡が残る。2はやや大形の甕で、口縁は「く」字状に開く。口唇外縁にはナデツケによるわずかな稜が形成される。3は推定器高400mmの大形長胴甕である。これも著しく磨耗、剥落し調整痕は認められない。このように甕についてのみ被熱による影響が明らかである。4は甕を模した鉢である。肩部に稜がめぐり、口唇は帯状に肥厚する。外面はヘラ削りが斜方向に施される。内面は上方で横位の、下半では下から上への磨き上げがなされ、全体として堅敏なものである。7、8は壺である。7はやや大きく、口縁部まで強く内窪し、口唇はわずかに直立気味となる。外面は比較的丁寧なヘラ削りが縦横に施される。8は半球形の体部に稜をもって口縁が直立する。口唇はかなり部厚となる。外面はヘラ削り、内面は口縁で磨き仕上げ、体部はヘラナデ調整される。5は丈長の大形甕で、全体にゆるやかに立上がり、口縁で急に反り返る。外面は上へ下へのヘラナデ、底部付近のみ逆方向のヘラナデがみられ、内面は下半に横ヘラナデが施され、さらに下へ上への磨き仕上げがなされる。

6は寸胴形の甕で、下端で急にすぼまる浅めの器形である。外面は下端に横ヘラ削りが、大半に縦、斜位のヘラナデが施されたのちに全面荒い磨き仕上げが行われる。内面は上半で横位、下半で縦位のヘラナデがみられる。9～25は壺である。これらは口縁部の造りの違いから3類に大別が可能である。9～16は体部との境に明瞭な稜線を形成する一群で、いずれも口縁は内傾している。とくに9～13は稜が鋭く突出し、9、10では口縁がつまみ上げられている。法量の点からみると、小形の10、体部が三角錐状を呈す15、さらに平底に近い浅めの16を除き、器高38、口径128、受部径142mm前後となる。18～20は稜が退化し、口縁はわずかに内傾する。口径は140mmと酷似の器形である。17も本類に含まれるが、小形で深めとなる。21～25は浅い半球状を呈し口縁部は横ナデのため区別が可能な程度に退化する。外面の調整はすべてヘラ削りで、20のように再調整のヘラナデの認められるものは他にない。内面はすべて丁寧な磨き仕上げがなされたと思われるが、痕跡の不明瞭なものも多い。また内、外面とも黒色を呈す色調のものが多いが、明らかに内面黒色処理のなされたものは13のみである。

26は手捏ねの土製品であろう。半球形の壺で内外ともヘラナデされる。27～30は土製勾玉であるが、完存しない。胎土や色調は全く酷似する。

・062号跡（第69図）

1は口径200mm、頸径136mmの甕である。推定器高160mmの深鉢形を呈し、口縁に25mmの帯がめぐる。口唇外縁にはヘラによる押捺がみられ、帯上および胴部には網文が施され



第68図 061号跡出土遺物実測図

る。2は胴径180mm前後の扁平球明形の甕で、地文には細縄文が施される。これは3でも同様数段に渡って行われている。4・5はともに器形は不明である。前者は細縄文、後者は撚糸文が地文で、内面はともにヘラナデ調整される。6は口径176mmの鉢であろうか。口唇および外全面に縄文施され、内面は荒いヘラナデがみられる。7、8とも底部片である。7は大形甕と思われ、地文に撚糸文が施される。8は小形甕のようで、縄文がみられる。ともに底部に木葉痕が残る。

・064号跡（第69図）

1は鉢である。器高155mm、口径209mm、底径68mmを測り、截円錐形を呈す。調整は外面でハケナデ、内面で丁寧なヘラナデが行われる。文様は3条櫛による条痕文で、口唇には同工具の刺突がなされる。底部は内面指で押された痕があり、外面には木葉痕がのこる。2は長さ140mm、幅100mmの細粒砂岩質の石器である。上、下端を除き、全体的に研磨、面取りされる。とくに表、裏面は中央がわずかに凹み、表面ではさらに3個所の錐様具による孔がみられる。

・065号跡（第69図）

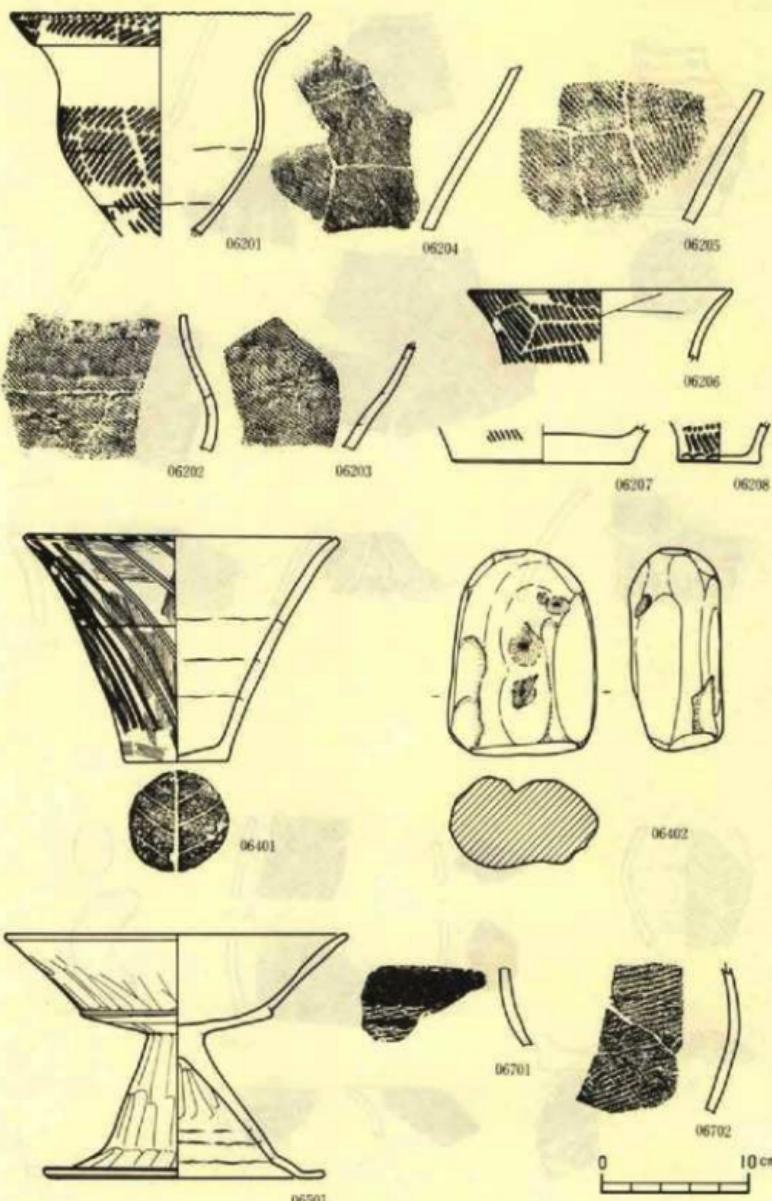
1は大形の高環である。器高165mm、口径232mm、裾径193mm、环との接合部の脚径は39mmを測る。环部は下端に突出する棱をなして口縁は直線的に大きく開く。脚は末広がりとなって裾はめくれ上がる特異な器形を呈す。外面の調整はヘラナデにより、内面は口縁周辺の横ナデの他は不明瞭である。脚は粘土巻上げ成形痕が明らかで、内側は脱くヘラ削りがなされる。

・067号跡（第69図）

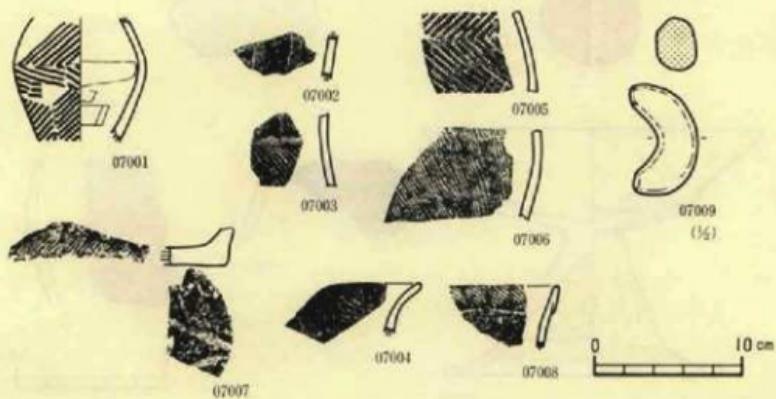
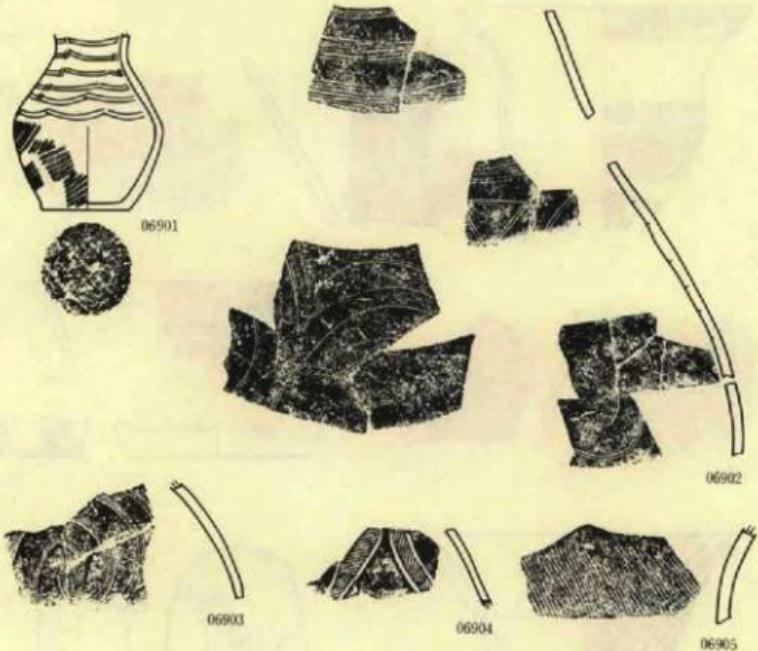
1は頸径の大きな細頸甕と思われる。肩部上端には3条のS字結節文が2段配される。2は甕片であろうか。縄文が地文である。

・069号跡（第70図）

1は小形甕である。現存高120mm、頸径49mm、胴径100mm、底径60mmを測る。胴は算盤状に張り出す。内面は頸部付近でヘラナデ調整されるが、以下は不明瞭である。文様は口縁から肩部にかけてみられる。半截竹管による6段以上の上弦連弧文を、縦線によって一本毎に5区画される。ただ最下の文様に対してもこの区画がみられず、全体に稚拙である。胴部の地文は縄文により、底部には細編みの敷物痕が残る。2は細頸甕の各部位片であるが、同一個体であることは間違いない。外面は簡単なヘラナデ調整され、内面は摩耗、剥落が著しい。文様は幅3mm程の半截竹管で描かれる。頸部は3重以上の横走文が4段まで認められる。肩部は4～5重の溝巻文を中心に、これを囲いこんで2重の下弦連弧文が施され、さらに溝巻文の連接部上方には逆三角形が描かれる。全体的に乱雑な施文で、単位数は不明である。3も同



第69図 062～067号跡出土遺物実測図



第70図 069～070号跡出土遺物実測図

類で、4条櫛により少くとも4重の渦巻文が描かれる。4は壺肩部片である。内面はヘラナデにより丁寧に仕上げられる。沈線による「八」字文の中に繩文を埋め、沈線の外側は地文を磨消して、さらに赤彩する。5は部厚で大形の鉢であろう。外全面にハケナデがみられ、内口縁にも横位に施される。

・070号跡（第70図）

本跡は3住居跡の重複があるが、いずれも小片で、覆土として一括して遺物を取り上げたため、残念ながら所属の不明なものばかりである。1は胴径89mmの小形壺である。器形は069号跡出土のものに似て算盤状を呈す。内面は横ナデ、ヘラナデにより、外面は撲糸文を羽状に施す。全体に雑な造りである。

2～4は広口の壺か、長胴の壺であろう。いずれも櫛描文様を主文としているが、2が8条、3が5条、4が6条で、縦走の小波文が施され、3は他に横走の区画がなされる。地文は3の撲糸文のみ明らかである。

5～6は胴部片で、前者は繩文を羽状に施し、後者は細撲糸文を地文とする。7も地文は撲糸文で、底部に木葉痕が残る。8は壺であろうか。口縁帶に細繩文が施される。

9は長さ37mm、径13mm程の土製勾玉であるが、頭部の穿孔は認められない。

2項 古墳跡

・201号跡（第71図）

1は器高65mm、口径106mm、底径26mmの壺である。器高の約2/3は段を有しながらわずかに開く口縁で、底部は横状文に凹む。外面は体部および口縁下部にヘラ削りがみられ、内面はヘラナデである。なお体と口縁の接合部分には指頭圧痕が残る。2は口径140mm、器高56mmの壺である。扁平な半球形を呈し、口縁部は内傾する。外面はヘラ削りののち、内面とともにヘラナデ調整される。3は台付壺の模造品のようである。器高119mm、口径90mm、底径51mmを測る。外面は荒いヘラ削りのままで、内面はヘラナデを施す。

・208号跡（第71図）

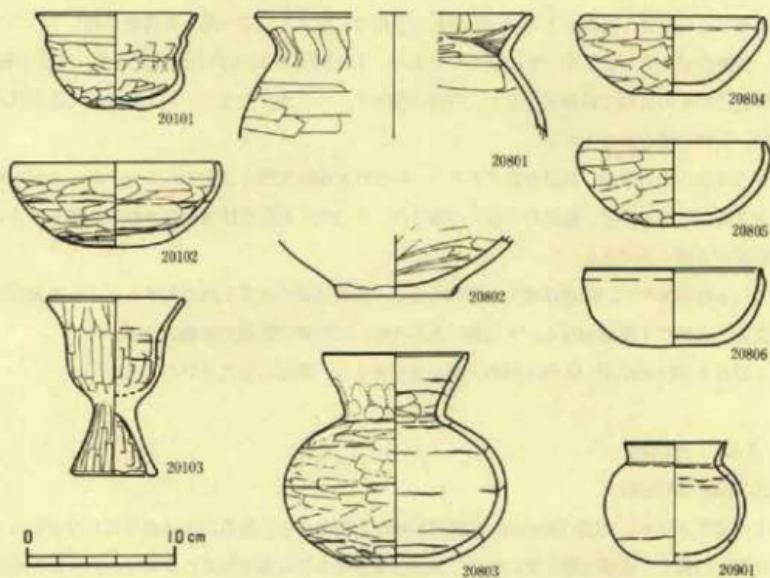
1は口径190mm、2は底径80mmの壺である。1は口縁が「く」字状に開き、全体に荒いヘラナデ調整され、口縁内面のみに棒様具による磨き上げがみられる。3は器高141mm、口径98mm、頸径67mm、胴径152mm、底径60mmを測る壺である。タマネギ形の胴に、ラッパ状に開く口縁が付く。外面は荒いヘラナデが施され、口縁部には指頭圧痕も残る。

4～6は口径120～122mm、器高51～55mmの壺である。半球形を基本とするが、口縁で直立し、底部は平底気味となる。いずれも口縁部横ナデの後、外面はヘラナデ調整されるが、6ではこれが不明瞭である。

その他の

・209号跡 (第71図)

1は器高80mm、口径70mm、胴径95mmの壺である。ほぼ球形の胴に、極めて短かい口縁が付く。口唇は鋭く、全体に精緻な器形である。内外とも工具は不明だが、丁寧なナデ調整が施され、わずかに光沢をもつ。

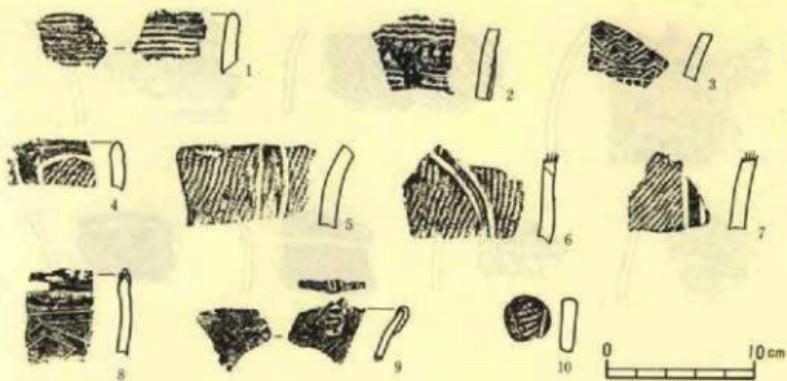


第71図 201・208・209号跡出土遺物実測図

3項 その他

・縄文式土器 (第72図)

1～9はいずれも深鉢の破片である。1は内外とも貝殻条痕を横位に施す。2は中央に貼付突帯が縱走し、その上下に半截竹管による小波文を配す。3も同工具で山形文と、刺突列が描かれる。4～7は地文に縄文を施し、2本の沈線内を磨消して無文とするものである。4の口縁には楕円形の区画が、6は円形に、他は縦位に垂下する文様構成がとられる。10の径35mmの土面も文様から同類であることが知れる。8は口唇に突起を貼付したもので、その内側に竹管刺突がなされる。口縁には幅15mmの沈線がめぐり、それ以下に細縄文が施される。さらにヘラ先による沈線を用いて、菱形文を2重に描き、この中の縄文を磨消している。9は口縁



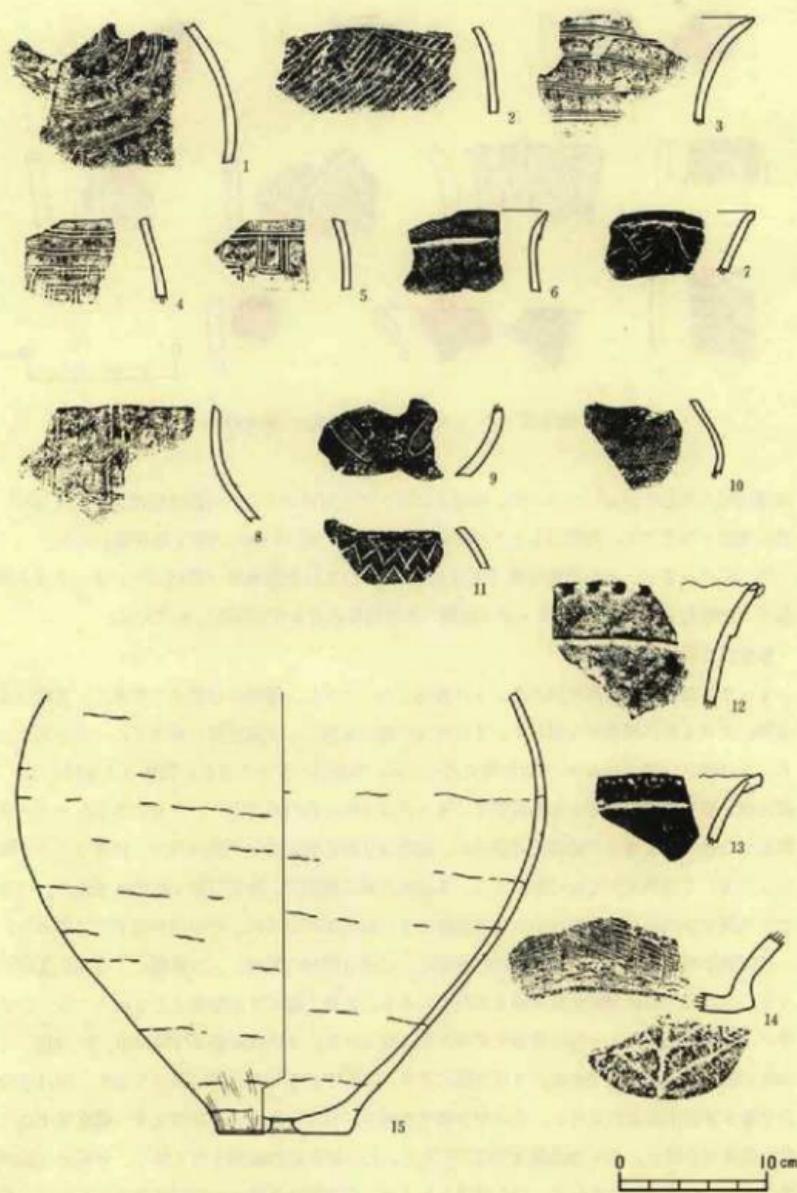
第72図 グリッド内出土土器実測図（縄文時代）

に梢円形の突起を貼付したもので、突起上にはヘラ先刻目が入る。外面は細縦文を地文とし、波状沈線が横走する。内縁にも上下に結節の痕を残し、幅 10 mm の縦文帯が描かれる。

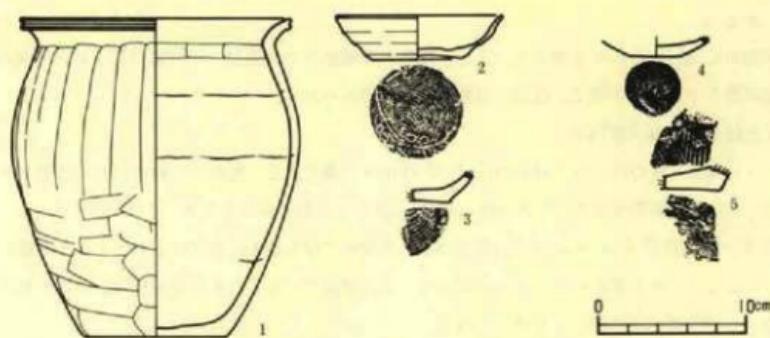
時期別にみると、1が早期末葉（茅山上層式）、2・3は前期後葉（諸磯式か）4～7は中期後半（加曾利E II式中心）、8・9は後期（加曾利B式および安行式）と考える。

・弥生式土器（第73図）

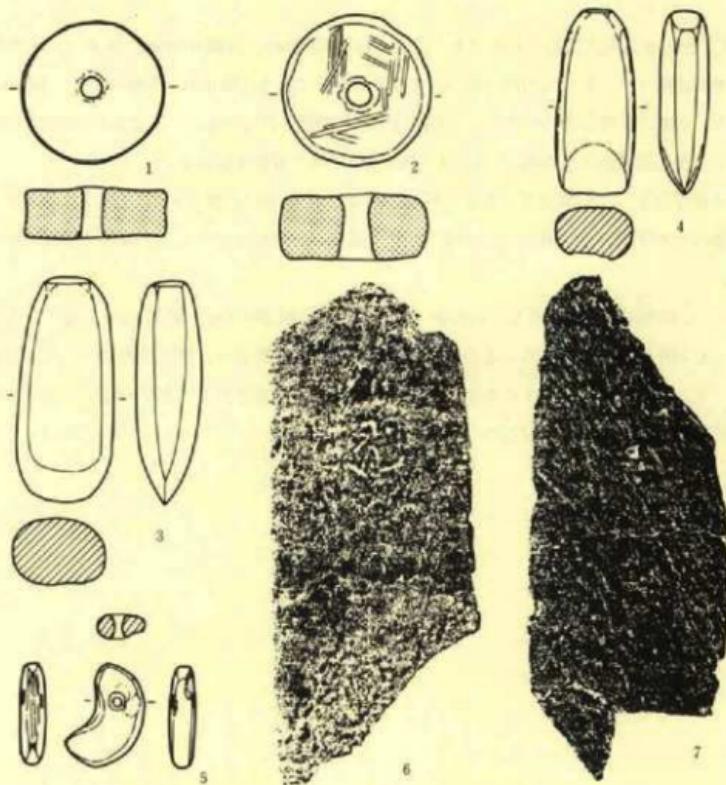
1・2は細頸壺の肩部片である。1は器面をヘラナデし、胴部には撚糸文を施す。文様は4条櫛により4重の渦巻文を表わす。2は地文に縦文を施し、半截竹管の渦巻文の一部がみられる。3は推定口径 240 mm の広口壺であろうか。外面はハケナデされ、文様は3条櫛により、縱区画と横走文を少なくとも5段配す。4・5は小形の広口壺である。ともに丁寧なヘラナデ調整がなされ、文様は半截竹管で描かれ、前者は2段の横走文と2重四角文、後者は上下の横走文に接して四角文が交互に描かれる。6は広口壺口縁部で、推定口径 135 mm を測る。口縁帶には縦文が施され、頸部はヘラ書き沈線により縱区画がなされ、その中を格子目で埋める。7は形状不明であるが、口径 92 mm を測る。口唇は帯状に肥厚し、5条櫛による波状文がめぐる。8は推定口径 200 mm を測る大形壺である。肩部上端にS字結節文を2段めぐらし、頸部には2列の撚糸文と3列の竹管突文が交互に施される。9は推定胴径 160 mm、10は同 110 mm の小形壺の胴部片である。9は沈線により「八」字文を描き、中に縦文を施す。10は3段の2重S字結節文をめぐらし、その中に縦文を施す。11は上端にS字結節文を、縦文帯中に2重の鋸歯文を描く。9・10の無文地は赤彩する。12は幅広の口縁帶を有す鉢で、外縁から指頭押圧され、口唇は波状を呈す。13も鉢であろうか。口縁帶の外縁には棒様貝押捺がみられ、地文に撚糸文を施す。14は木葉痕を残す底部で、撚糸文が地文である。15は現存高 300 mm、胴径



第73図 グリッド内出土土器実測図（弥生時代）



第74図 グリッド内出土土器・陶器実測図（土師器・陶器）



第75図 グリッド内出土土・石製品実測図（1.2.5=1/4, 3.4=1/4, 6.7=1/4）

その他の

365 mm、底径 96 mm を測る壺である。内外とも被熱のため調整は不明瞭であるが、下端の一部に磨き上げの痕が残る。底部には焼成後穿孔がみられる。

・土師器・陶器（第74図）

1 は壺高 217 mm、口径 184 mm、底径 94 mm の壺である。短かい口縁は口唇に凹帯がめぐり、全体に寸胴形を呈す。外面全体に縦・横の荒いヘラ削りが施される。2 は口径 116 mm、器高 30 mm、底径 61 mm の壺で、高速回転の水挽法で作られる。底部は 3 とともに糸切離しで、ともにカワラケと思われる。4 は灯明皿で、5 は摺鉢で、ともに糸切痕が残り、飴釉が施される。5 の内画には竹櫛による摺目が残る。

・土、石製品（第75図）

1・2 は土製鋤車で、各径 48 mm、51 mm を測る。ともに表面は丁寧に磨き上げられている。

3・4 は安山岩質の大型始刃石斧である。3 は長さ 152 mm、刃幅 67 mm、厚 46 mm で側面を除き全面研磨され、とくに刃部は鋭い。4 はやや小型で長さ 123 mm、刃幅 44 mm、厚 34 mm を測る。全体に自然な凹凸が多いが、刃部は丁寧に研磨されている。ともに201号跡周溝内から出土し、その位置から 3 が044号跡、4 が064号跡に伴う可能性がある。

5 は青緑色をした石製勾玉である。長さ 34 mm、幅 16 mm、厚 9 mm を測り、極めて丁寧な研磨のため光沢ある。頭部の孔は径 5 mm で両側から穿たれている。表採品で所属は明らかでない。

6・7 は緑泥片岩（俗に青石）の板碑である。ともに幅 200 mm、厚 17 mm 前後で、現存する長さも 500 mm と一致する。6 の頭部は明らかに三角形を呈し、中央上方には、阿弥陀を表わす「キリーグ」種子が刻まれるが、蓮座等はない。7 は頭部も欠けるが一部に三角形の加工がみられる。ともに神社の付近から出土した。

4節 まとめ

1項 弥生時代

本遺跡より76軒の住居跡が検出された。これらは台地全体に認められ、さらに調査区外の南側に続くことは間違いない。時期別にみると、古式土器を伴う住居跡7軒、カマドをもつものが6軒、全く時期の不明のものが7~8軒ある。その他は弥生時代と考えることができる。まず当該期からみていくことにする。

前後関係を明らかにするのに必要な重複の例を列記すると、

- 1) 009>010>011<053
- 2) 008<015>017>016
- 3) 025A>025B>026>027<057>056>028
- 4) 034>037>036
- 5) 046<047、となる。

次に住居跡の個別の要素についてまとめてみる。

・平面形 円形=005・022・026・027・044=5軒

楕円形=010・028・029・036・039・046・069=7軒

隅丸長方形=002・003・006・008・012・014A・014B・015・017・019・025A・031・035・043・047・053・057・058・067・070B=20軒

隅丸方形=034・042・045?=3軒

隅丸形をしたもののうちで、各辺とも直線的で、狭義の隅丸方形といえるものは019のみであり、他は四辺がやや胴張りとなる形態である。

・規模 長軸あるいは直径を参考にしてみる。

7m 前後=002・008・057=3軒

6m 前後=010・012・014A・029・035・044・046・062=8軒

5m 前後=006・015・016・019・022・026・027・028・031・069=10軒

4.5m 前後=005・017・025A・036・039・042・043・058・067・070B=10軒

4m 以下=034・047・053=3軒

付帯する施設については、炉、主柱穴の配置、P₁とした柱穴およびP₂とした貯蔵穴を取り上げる。

・炉の位置 長軸あるいは直径の半分を1.0として、火床の中心がどの程度壁に近寄るかを指数で表わしたが、これに基づいてみる。

1.0前後=005・008・010・026・027・029・033・034・039・069=10軒と006

0.8前後=014B・028・031・035・036・044・046・070B=8軒

0.65前後=014A・017・019・022・057・058=6軒

0.5前後=002・015・025A・047・069=5軒

・主柱穴の配置

長方形=010・022・027・029・033・044・046・047・053・069・070B=11軒 このうち010・046は極端な長方形配置となる。

方形=002・006・008・015・016・017・019・025A・026・028・031・035・039・042・043・055A・057・058・062・067=20軒

このうち028・062は台形となる。

不定形=014A・034=2軒

・P₄の有無と形態 炉に対面して長軸上に位置し、例外なく主柱穴配置の外方にある柱穴である。

有 住居外方に傾斜するもの=008・010・015・022・025A・028・031・035・036・070B=10軒

有 垂直のもの=014A・019・021・029・039・043・046・055A・057・058・064・067・069=13軒

無 明らかなもの=006・027・034・037・042・044・047・053・062=9軒

無 不明のもの=その他

・P₄の有無と位置 従来から貯蔵穴とされている皿状の穴で、いずれもあまり深いものではない。

有 左寄=008・015・025A・026・028・031・035・036・037・043・057・064・069・070B=14軒

有 右寄=006・039=2軒 このうち周囲に土堤をめぐらす例は031・036のみで一般的ではない。

無 明らかなもの=010・011・014A・019・027・029・034・042・046・047・053・058・062=13軒

無 不明のもの=その他

土器については、成田市およびその周辺において当該時代調査例が乏しいため、詳細は不明である。しかし本遺跡では014・044・058号跡に良好な伴出関係がみられるため、これを基軸として、ある程度の編年は可能である。まず基本となる3住居跡出土の土器について改めて注目してみる。

044号跡では細頸壺3点、小形壺2点、甕2点および深鉢1点が併存する。細頸壺は1と2・3では肩の張りや頸部から口縁の造作など違いは認められるが、いずれも50cm前後の大型土器である。文様の点でみると、1と他ではより異なる様相が指摘できる。1は3条櫛を用いて肩部のみに扁平な連続渦巻文を描き、頸部には横走文がめぐる。2・3は半截竹管を用いて肩部から胴部にかけて渦巻文を大きく描いている。渦巻文は3は5単位連続し、主文をかこんで連弧文が重なる。頸部以上遺存の2では突帯の下に横走文、上に上弦連弧文がめぐる。ここではこれらをa類とする。

小形壺の施文はともに3条櫛でなされ、4は頸部に小波文、胴部に重三角文、5は胴部に重四角文と内側に「×」印を描いている。後者をa類とすると、同類に含まれる036号跡出土のものでは頸部に連弧文が施される。

甕・深鉢は器高15~17cm程度である。6は地文が撚糸で、頸部以上は無文であり、7は繩文である。8はハケナデで口唇は小波状を呈す。本跡には石器も完備している。

058号跡では細頸壺1~2点、小形壺1点、甕2点、深鉢1点が併存する。細頸壺は2・3をみると半截竹管により重三角文、重菱形文が描かれ、044号跡には趣きを異にする。b類としておく。4はラッパ状に開く特異な器形で、口縁部に小波文、胴部に格子文が施される。04404とは同一視はむずかしいが、一応b類と考えられる。5は比較的大形の甕で、口縁に3条櫛の連弧文を配す特徴がある。04406などをa類とすれば、b類と類別することができる。7は口唇の造作などに04408に似た点が指摘できるが、地文は撚糸で、これと区別すべきである。8は小形であるがハケナデ調整の特徴は04408と共通する。本跡もまた石器の良好な資料が得られた。

014号跡では広口壺2点、甕2点が出土する。おそらくA号跡に伴うものであろう。1はラッパ状に開く器形で、口縁部にはS字結節文がめぐる。2は特異な器形ではあるが、同じく口縁部があり、繩文が施され、頸部には羽状罫文が施される。3はヘラナデ調整の甕で口唇は波状を呈す。4は肩の張る器形で繩文が施される。

この他にいくつかの住居跡より良好な資料が1・2点みられ、前記3住居跡の不足分を埋めることができる。01601は細頸の小形壺で全く文様がない。01102は頸部に半截竹管による区画・横走文が描かれた甕である。また008・019号跡では扁平球形の甕がみられ、胴部全体に繩文または付加条繩文が施される。025A号跡からは広口壺の2種類が出土した。

これらの土器を器種別に類型化し、主な出土例をあててみる必要があろう。

1. 細頸壺 a類 連続渦巻文を主文とする。

半截竹管によるものが原則である。(04402・03の他、01101・02802・03601・06902) なお櫛描きのものをa'類とする。(04401・05703・06903)

b類 重四角文や重菱形文などを主文とする。a類と同じく工具に違いがある。

(05801・02・03) b'類 (03903・00502・02601?)

c類 繩文を配し、なかには沈線区画を施すものもある。好例はない。(01102・01701・03901・02)

2. 広口壺 a類 頭部がゆるやかにしまる器形で、口縁帯をもつ。(01402・01001・04501)

b類 口縁部がラッパ状に開く器形で、口縁帯をもつ。(01401・025A01)

3. 小形壺 a類 広口壺形で、連弧文と重四角文を描くもので、半截竹管による。(025B02・03602・03・06901)、櫛描きによる a'類 (04405の他、00503・025B01・03402・04702)

b類 口縁部がラッパ状の器形で、波状文と重三角文や格子文などを描く。(04404・05804)

4. 壺 a類 長寸胴形で、頭部以上が無文か、頭部のみ無文のもの。(04406・07の他、05807・02801・02201・06201・06?)

b類 やや大形で、頭部以上に半截竹管や櫛描きにより、連弧文が描かれる。(05805・06・01303) 区画と横走文のもの、(01002の他、03908・04602・01005?)

c類 扁平な球胴形で、一般的には幅広の口辺帯をもつ。頭部を除き、繩文や付加条縄文を施す。(01901の他、002・006・008・012・033・046・062出土のものと、01003)

d類 球胴形で、波状口縁となり、無文のもの (01403)

5. 深鉢 a類 ハケナズ調整され、原則として波状口縁となるもの。(04408・05808の他、03101・06905・01305?)

b類 ラッパ形で、櫛描き条痕文が施されるもの (06401の他、01008・03909・04601?)

次に土器の供伴関係について、前記の3住居跡を中心にみると、

1. 044号跡=1-a、1-a'、3-a'、3-b、4-a、5-a

2. 039号跡=1-b'、1-c、4-b'、5-b

3. 058号跡=1-b、3-b、4-a、4-b、5-a

4. 010号跡=2-a、4-b'、4-c、5-b

5. 014号跡=2-a、2-b、4-d

6. 025A号跡=2-b

7. 019号跡・008号跡=4-c

またこれらの土器様相を大別すると、南関東の流れを有するもの (1-c、2-a・b、4-d、5-a) と、北または東関東にみられる要素をもつもの (1-a・b、3-a・b、4-a・b・c、5-b) に分けられるようである。これをふまえて從来の形式編年におきかえるなら、044=足洗式+宮ノ台式、039=宮ノ台式+足洗式に近い様相、058=足洗式に近い様相+長岡式に近い様相+宮ノ台式の新しい様相、010=長岡式の新しい様相+久ヶ原式+印籠・手賀

系式、014—久ヶ原式、025—弥生町式、019・018—印旛・手賀系式と考えることが可能であろう。本遺跡で特徴的なことは、南・北関東の土器様相が何らの差もなく混在し、有機的に結びついていることであろう。

2項 古墳時代

大別して、古式土師器を伴う住居跡7軒、古墳の遺営8基、カマドをもつ住居跡2軒に分ける。

古式土師器を伴う住居跡については3つの形態的差がみられる。009号跡は長軸4.7mの隅丸長方形で、その平面形や、炉の構造および貯蔵穴をもつ点で、弥生時代と極めて近い要素を示す。次の一群は隅丸方形で、長軸4.9mの007号跡を除くと、1辺3.1~3.4mのものである。いずれも炉の掘り込みは退化している。030号跡には主柱穴がないが、他の007・041・048・059B号跡にはこれがみられる。P₁とした柱穴も原則的には存在するが、いずれも外方に傾いて掘り込まれている。最後は001・018号跡である。ともに1辺6.5m前後の正方形で、主柱穴を完備する酷似のものである。他にこれに属すると思われるものに001号跡床下から検出された065号跡がある。

遺物についても住居形態差に対応した3時期の編年が可能である。009号跡からは壺3、甕1、高坏1点の良好な資料が得られた。1は球胴形で、ラッパ状に開く口縁を有す器形で、棒状浮文の貼付などにも前代の影響が残り、肩部には櫛描き文が残る。内面は荒いヘラ削りのまま無調整である点が特異である。甕もまた全体的にヘラ削りが施され、口唇はつまみ上げられたように内縁に段を残す。007・041号跡出土の甕は口縁が「く」字状に開き、全体をハケナア調整する。器台もともに出土し、007号跡には炉器台がみられる。048号跡の2、059号跡の1などは広口壺の類で近似する要素を持つ。

これらはいずれも五領式土器の範疇に含まれるが、009号跡はより古い様相を示し、東海地方の影響も受けている可能性がある。後者は典型的な五領式土器と考えて大過なかろう。

次に001・018号跡の遺物である。前者は壺・台付壺・高坏などに祭祀的な様相が強く反映され、後者は壺・甕・甑や高坏など生活必需品で構成される違いは指摘できるが、ともに和泉式土器の古い形態であることに差異はない。また壁下から一括出土した土玉類の存在も、全く同時に廃棄されたと考えることができる。

古墳の築造は001・018号跡の廃棄直後に開始されたと考えられる。築造の方法については知る由もないが、内部施設の痕跡が全くないことから、逆に墳丘上に設ける形式であることが考えられよう。203~202号跡がほぼ南北に並び、それぞれ規模が異なる。205~207号跡は、この

歴史時代

列より東に7m以上離れて、N-23°-Wの軸で南北に並ぶ。各列での周溝外縁は3.0~0.5mと接近し、とくに、205号跡南側は206号跡周溝のため部分的に直線となる。後代の台地整形のためにその大半を失なっている208号跡の存在を考えると、さらにもう一列あった可能性も否定できない。いずれの古墳も遺物に乏しいが、201・208号跡出土の土器から考え、和泉式土器を伴うと思われ、土器自体に先後の差のないことから、かなり短期間に続々と営されたものと思われる。

024・061号跡はともにカマドを持った被災住居跡である。住居の形態は全く異なり、主軸も約90°のずれがみとめられる。しかしその間隔が4m、床面の高さは一致する事、ともに火災により廃棄されている点など、同時存在と考えて間違いないところである。

遺物については、ともに完形品が殆んどである点で注目される。とくに024号跡では覆土内に当該期遺物を全く含まず、図示したものがすべてであり、小規模住居の生活品を知る上で最良の資料となろう。それは煮焚き用の壺・甑、小形の壺、环4および支脚のセットである。同じく5m級の061号跡では若干の欠損品や流入品もあるが、大型・壺・鉢・各1と、甑2、环15~17個と中規模住居のそれを知る手懸りとなろう。いずれも鬼高式土器であるが、長脚壺、口縁が帯状となる壺、矮の退化の始まったものから全く矮をもたない浅めの环などの様相は、7世紀代として間違いない。

3項 歴史時代

040・054・060A・060B号跡がこれにあたる。最大の040号跡でも1辺3m強、054号跡では1辺2mに過ぎない。いずれも主柱穴ではなく、カマドに対面して垂直に掘り込んだP_s柱穴がみられる。遺物は少ないため、時期の細分はむづかしいが、04002・060A02の丸味のある环や、05401の内裏皿を見る限りでは国分式土器でも後出的と考えられる。

中世に至って、本遺跡をのせる台地全体は城として利用された痕跡がある。今回の調査ではそれと断定できる遺構はないが、土塙のうち101・105号跡などは注目すべきではなかろうか。また傍証的ではあるが、古墳跡の遺存度からみて本台地全体に大規模な整形が行なわれたと考えられる。その時期は国分期の住居跡の占地からして、それ以後であることが考えられる。

The Sekido site

Preface

Prefatory notes

Contents

Chapter I Location and Excavation Process

1. Location

2. Excavation Process

Chapter II Artifacts

1. Pit-dwellings

2. Kofuns

Chapter III Remains

1. Pit-dwellings

2. Kofuns

3. Other Artifacts

Chapter IV Conclusion

1. Yayoi period

2. Kofun period

3. Historical age

SUMMARY

The Sekido site is located in lots 241 and other, aza-Wada, Sekido, Narita-shi in the north of Chiba prefecture. It is situated on a Shimousa Plateau which faces south toward the Nekona stream. It was excavated from October 1 in 1980 to March 31 in 1981.

The site was occupied during Yayoi period, Kofun period and Heian period.

Yayoi period :

The dwelling pits were seventy-six altogether in the excavated area of Sekido ; fifty-five dwellings were artifacts of Yayoi period. Those were used during the Kugahara and

Yayoi-cho pottery phases of late Yayoi period. Most of dwellings severally had four postholes and a hearth, and their plans were square-with-round-corners on side 4.5~6 m.

A number of Yayoi pottery styles in this site were the most outstanding features associated with Yayoi period materials in the south area of Kanto district.

Kofun period :

It was possible to excavate about nine dwellings, and eight Kofuns. Dwellings were used during Goryo and Izumi pottery phases. Seven dwellings severally had four postholes and a hearth. other had a clay oven.

Kofuns were built continuously for a short time during Izumi pottery phase, and those had nothing without ditch.

*Kofun : ancient sepulchral which was covered in.

Historical age :

It was possible to excavate about four dwellings which were used during later Kokubu pottery phase (Heian period). Those were smaller than other dwellings, and had not postholes.

The plateau which the Sekido site is located in was used as a fort in the Middle Age.

写真図版



1. 遺跡遠景 (南より) 2. 同 (北より)



1. 遺跡近景（東より）

2. 調査風景



1. 遺跡空撮（北東より） 2. 同 （南西より）

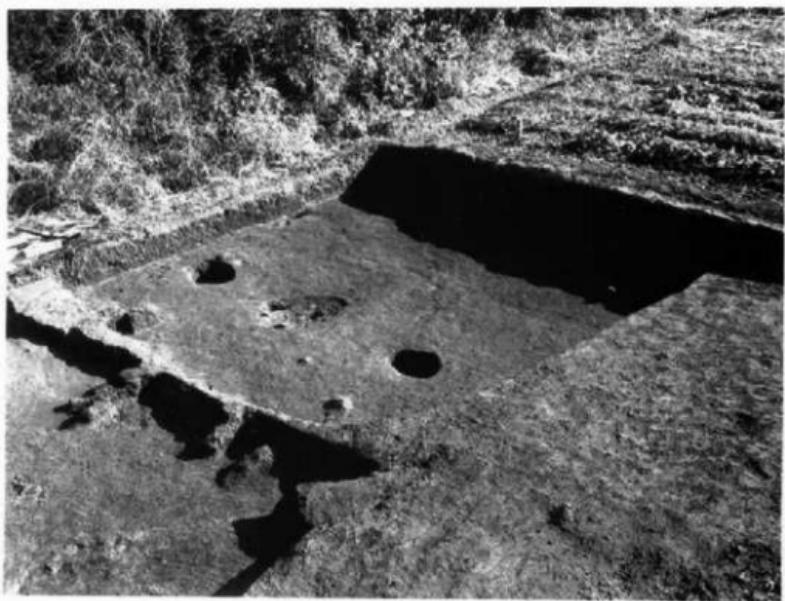


1. 遺跡空撮（東より）



1. 調査状況 2. 同

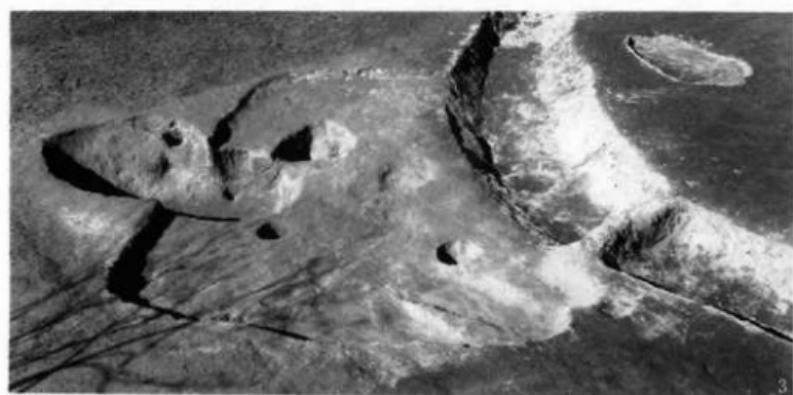
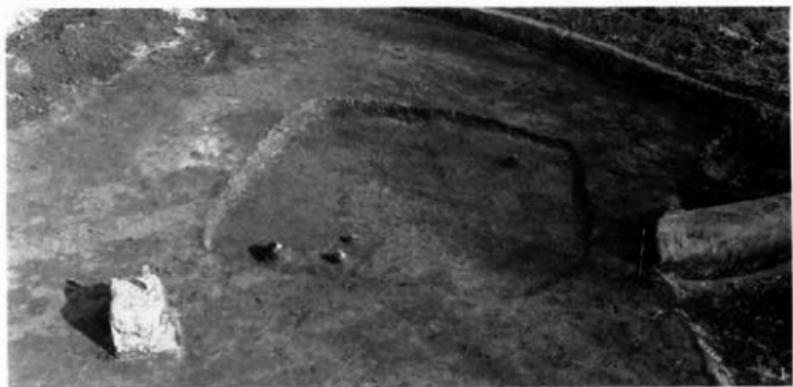
图版 6



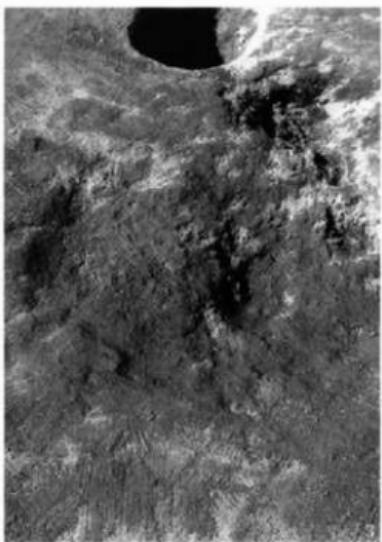
1. 001号踪全景 2. 002号踪全景



1. 003 号踪全景
2. 001 号踪 06 出土状况
3. 002 号踪炉
4. 003 号踪 01 出土状况



1. 004 号路全景 2. 005 号路全景 3. 006 号路全景

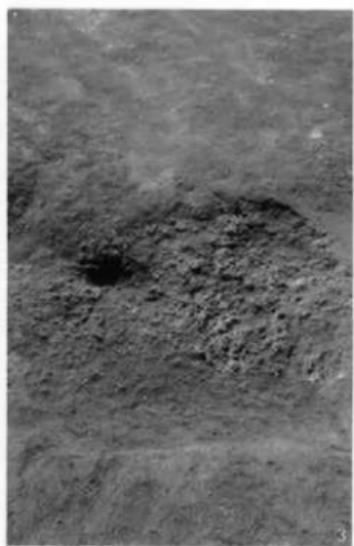


1. 007 号跡全景

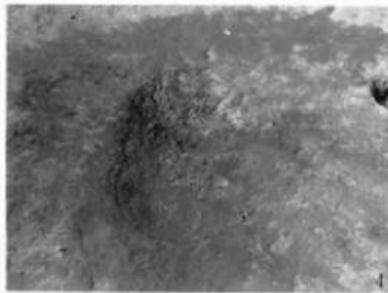
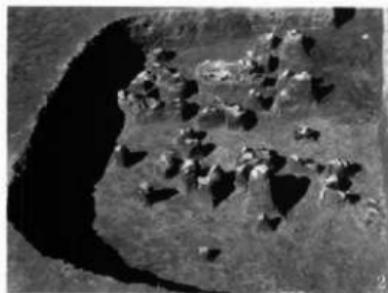
2. 同 遗物出土状况

3. 同 炉

图版 10



1. 008 号踪全景 2. 同 01 出土状况 3. 同 炉



1. 009 号跡全景

2. 同 遺物出土状況

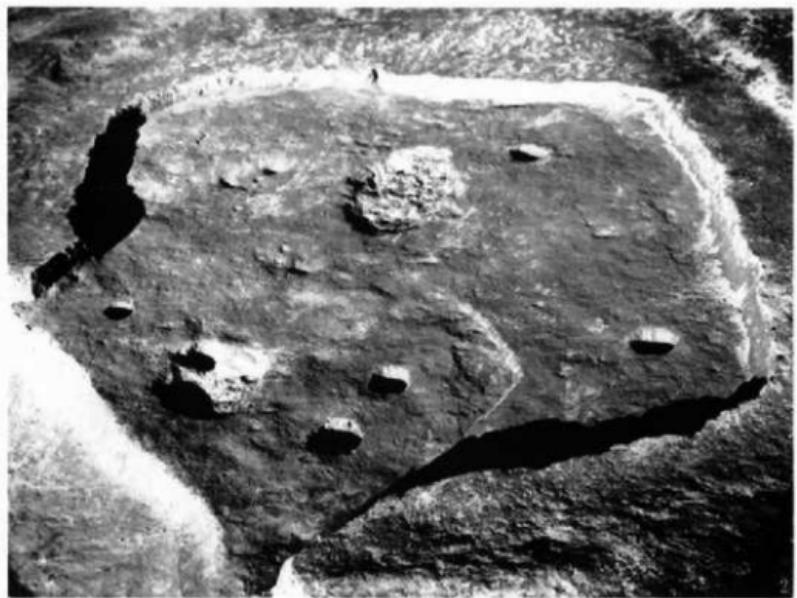
3. 同 01 出土状況

4. 同 炉

图版 12



1. 010 号跡全景 2. 011·053 号跡全景



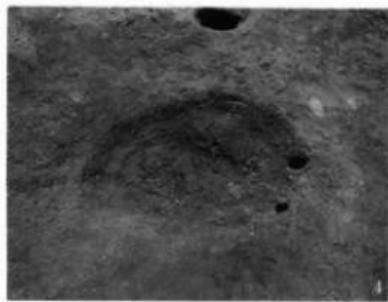
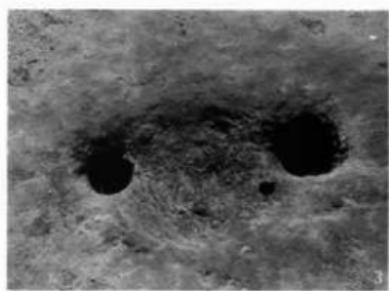
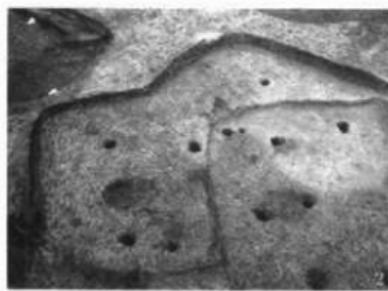
1. 012·013号跡全景

2. 014 A·B号跡全景

图版 14



1. 015 号迹全景 2. 016 号迹全景



1. 017号跡全景
2. 015~017号跡重複狀況
3. 015号跡炉¹
4. 017号跡炉²



1. 018 号踪全景 2. 同 床下状况



1. 018 号葬物出土状况
2. 同 01 • 02 出土状况
3. 同 01 出土状况
4. 同 02 出土状况
5. 同 03 • 07 出土状况
6. 同 土玉出土状况



1. 019・022号跡全景 2. 021号跡全景



1. 024号跡全景 2. 同 床下状況
3. 同 遺物出土状況
4. 同 カマド掘方状況





1. 025 A号跡全景

2. 同 炉・01出土状况

3. 同 02出土状况

4. 025 B号跡全景



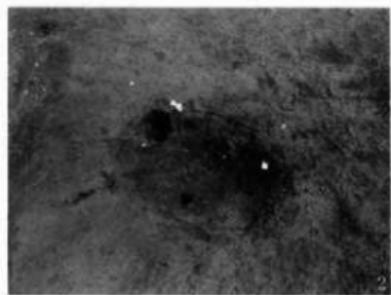
1. 026·027 号跡全景 2. 028 号跡全景



1. 029号跡全景 2. 030・031号跡全景



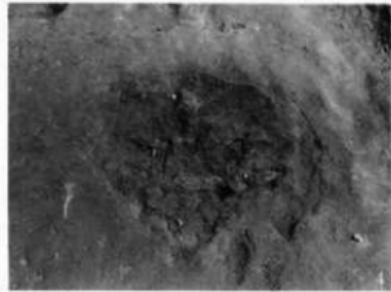
1



2



3



1. 034·036·037 号踪全景

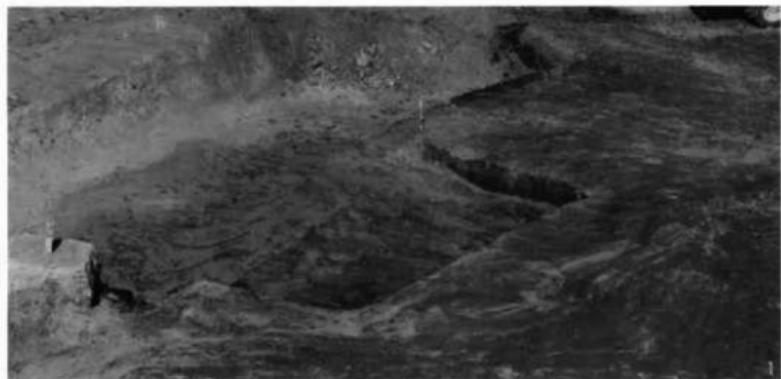
2. 034 号踪炉

3. 036 号踪炉

4. 037 号踪炉



1. 035 号跡全景 2. 039 号跡全景



1



2

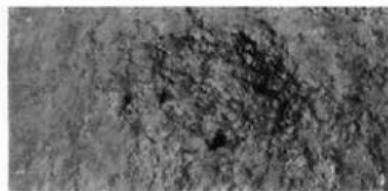


1. 040 号跡全景

2. 041 号跡全景

3. 同 01・02 出土状况

4. 同 炉



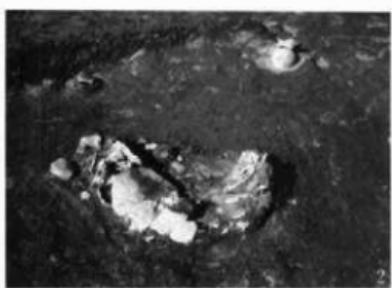
图版 26



1. 042号跡全景 2. 043号跡全景



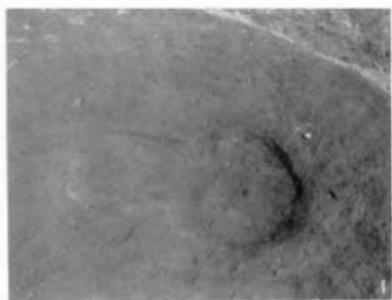
1



2



3



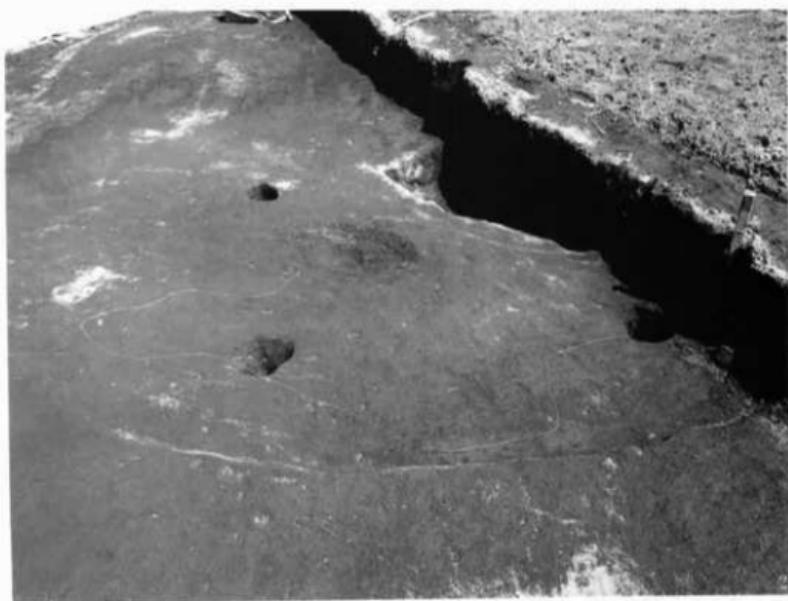
4

1. 044·045号跡全景
2. 044号跡遺物出土狀況
3. 同 爐
4. 045号跡 03出土狀況

図版 28



1. 046 号跡全景 2. 047 号跡全景



1. 048号跡全景 2. 051号跡全景



1. 054 号跡全景 2. 057 号跡全景



1. 058 号迹全景

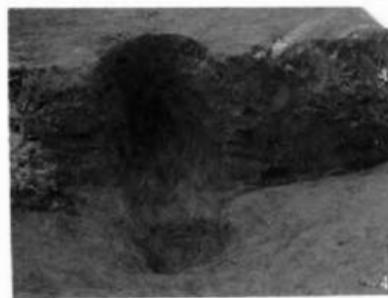
2. 同 05·07 出土状况

3. 同 02~05·07·012 出土状况

4. 同 炉



1. 059 B+C 号迹全景 2. 060 号迹全景



1. 061号跡全景

2. 同 カマド状況

3. 同 断面状況

4. 同 挖方状況



1. 061号跡カマド右脇遺物出土状況
2. 同 カマド左脇遺物出土状況
3. 同 土製勾玉出土状況
4. 062・063号跡全景

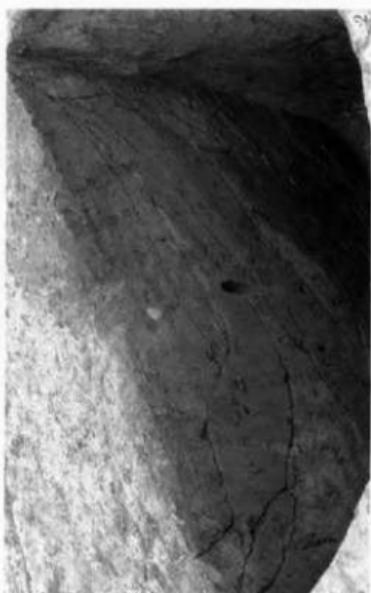




1. 067号踪全景

2. 069号踪全景

3. 070号踪全景



1. 101号迹全景

2. 同 断面状况

3. 105号迹全景

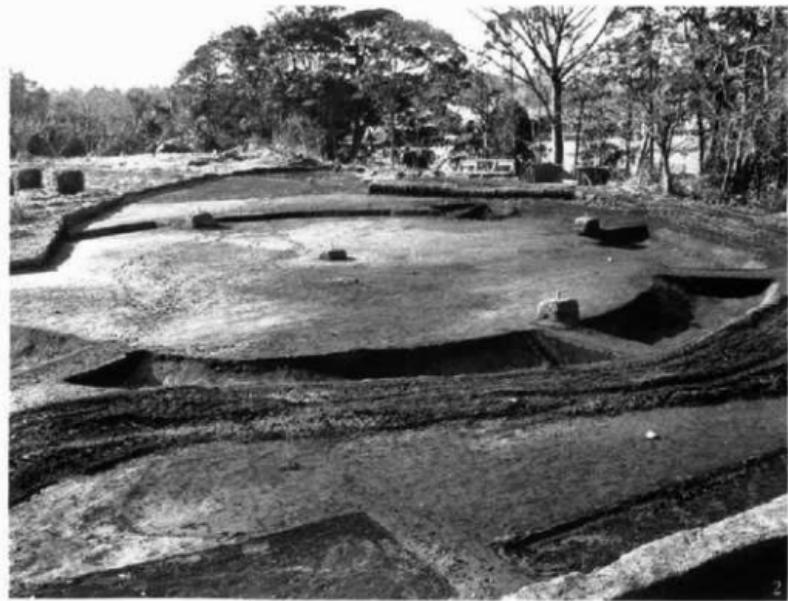
4. 同 断面状况



1. 201号跡填丘状况 2. 同 全景



1. 201号跡填丘断面状況（南北） 2. 同 （西）



1. 202号跡検出状況 2. 同 全景



1. 203~206号跡検出状況 2. 203・204号跡全景



1. 205号跡全景 2. 206号跡全景



1. 207·208号跡検出状況 2. 207号跡全景



1. 209号跡全景

2. 208号跡遺物出土状況

3. 同

4. 209号跡遺物出土状況

図版 44



00101



00102



00103



00106



00112



00108



00301



00109



00302



00702



00703



00704



00901



00902



00904



00907



00909



00801



01002



01401



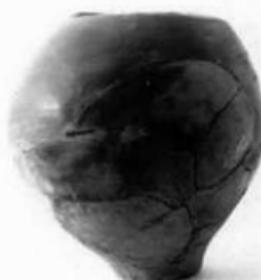
01403



01402



01404



01601



01801



01805



01802



01806



01807



01804



01808



02403



02404



02401



02405



02406



02402



02408



01901



02601



025 A 01



03501



025 B 02



04501



04401



04402



04403



04404



04405



04406



04407



04408



04102



04803



04802



06501



04001



05401



060 A 02



05801



05807



05808



05802



06201



05804



06401



05805



06901



06101



06105



06104



06106



06107



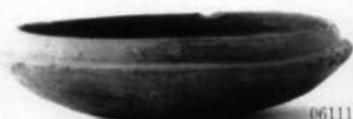
06108



06109



06110



06111



06118



06112



06119



06113



06120



06114



06122



06115



06123



06116



06124



06117



20101



20102



20103



20803



20804



20805



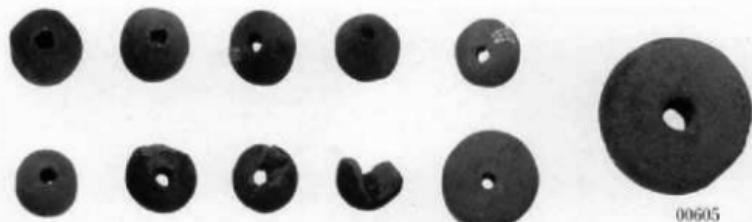
20901



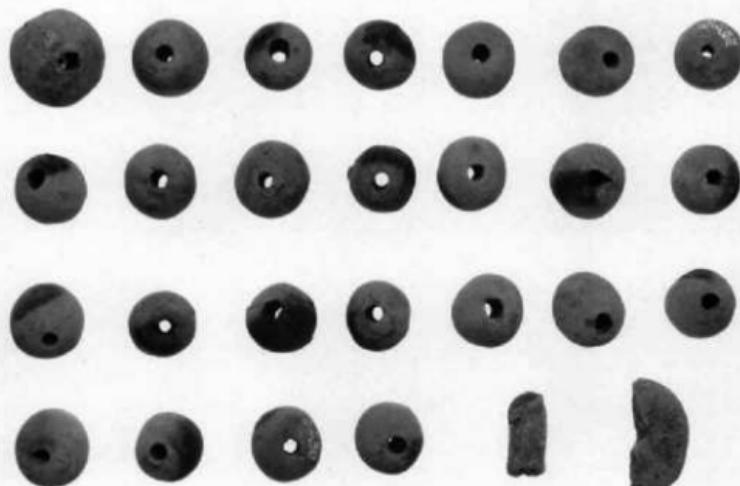
弥生 15



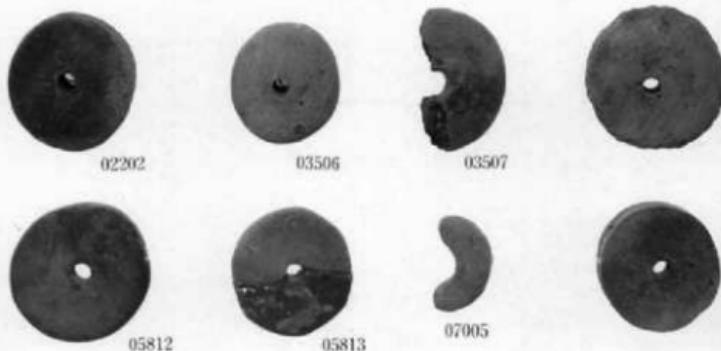
歴史 I

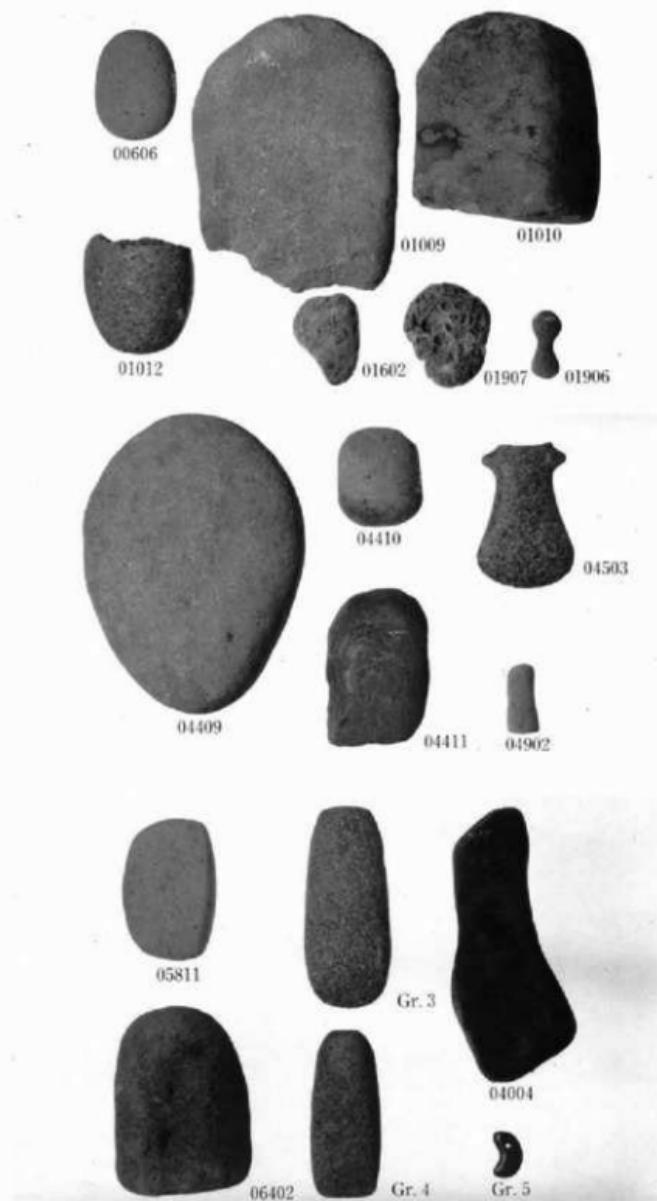


00113～22



01809～B5

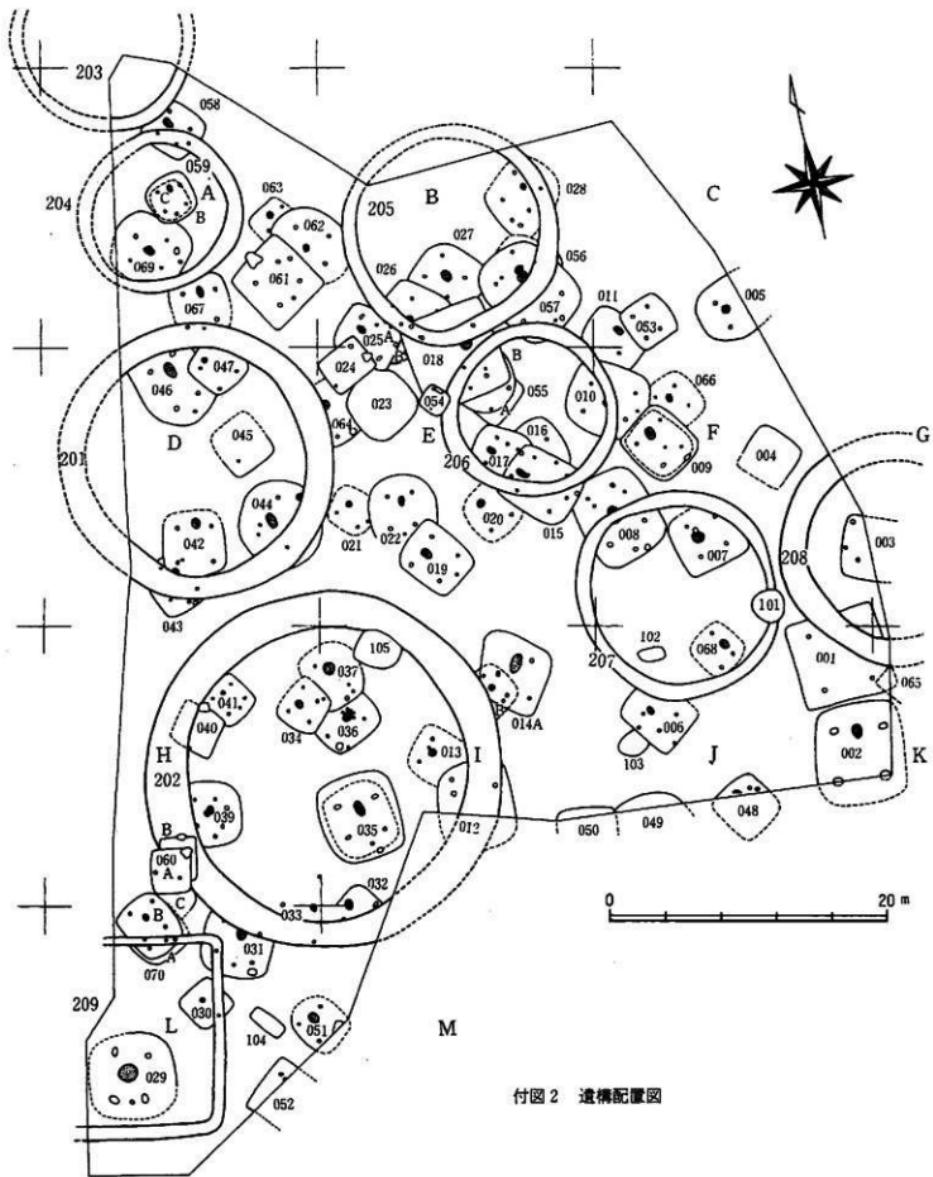




遺跡出土石器



附圖1 地形圖



付図2 遺構配置図

昭和58年2月21日 印刷
昭和58年3月31日 発行

成田新線建設事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書II

発行 日 本 鉄 道 建 設 公 団
財團法人 千葉県文化財センター
千葉県千葉市亥鼻1-3-13
電話 0472(25)6478

印刷 株式会社 弘 文 社
千葉県市川市市川南2-7-2